

自立した女と男を  
人間らしい生活を  
差別のない社会を  
育み 創り出す

# We

ウイ

## 新しい家庭科

逐次刊行物

---

平成 2年 9. 20 成

---

国立婦人教育会館  
婦人教育情報センター



# 10

1990

### 特集 地域をよみがえらせる

季節のうた

仙田敬子



さくら  
柘榴の実

美しく  
老いたし鏡中の  
秋薔薇

地域をよみがえらせる

特集	●地域をよみがえらせる政治 ・紀平梯子	2
	●町がよみがえる時 ・野本三吉	6
	●足尾に通い続けて ・竹見智恵子	10
	●分校が地域をかえる ・押切 郁	16
	●博覧会ってなんだろう ・飯田しづえ	20
	●原発で地域はよみがえった? ・木下雅子	22
	●ふるさと創生資金のてんまつ -ふるさとは誰のもの?- ・芦谷美鈴	24
	●ふるさと創生資金のてんまつ ・姉帯美和子	26
	●市民のエネルギーを引き出す -行動するたかまつ女性会議- ・岡内須美子	28
	●学習の主人公たち ■下町に自然を見つける/鈴木まき子	30
郷土料理っておもしろい?/西本和代	33	

新しい家庭科を創るために

(小学校) 子どもたちの食事の周辺(1) ・村田汀子	38
(高等学校) 定時制の生徒と地域 ・小野塚サチ子	45
地域の教育資源を活かす ・渡辺彩子	49

連載

荒野のバラ/地域再生の試み(その1) 「足もとを掘れ! そこに泉が湧く!」	田中裕一	56
家族と家庭科/占領期の家族領域-総括	酒井はるみ	60
大学生たちと歩く/遊ぶ大学生、そのココロは	小沢牧子	62
男性学への契機-魔男の宅急便/男という不快	諸橋泰樹	64
私の朝鮮史/李舜臣(イ スン シン)	岡百合子	66
食べもの文化史/くらしと食事 行事食	石川尚子	67
KNOW HOW 共学家庭科/'82年の教育課程改訂にむけて(その2)	湯沢静江	69
19歳の日記/「自由」	金森土岐	70
広がる運動、広がる人の輪/教育塔を考える会(1)	中村英之	71
波/桜の樹-病院の日々の中で-	半田たつ子	72

○ひと 中村英之さん 44

■情報 男女共学を考える会 府教委に要望書 54 ■編集者への手紙/星名 綾 74  
 ●今月の読書から 15 ●私のすすめる一冊 37 ●イキイキぐるうぶ 68 ●泉 77 ●わたくしからあなたに 78  
 ●Weの読書会だより 80 ●十字路 84 ●編集室からあなたに 85 ●アンテナ 86 ●編集後記 88

# 地域を よみがえらせる 政治



紀平 梯子

早いもので、わたくしが熊本県民33万2699人の熱い支持を受け、予想をはるかに上回る最高点で当選を果たしたあの89年7月23日の第15回参議院通常選挙から一年と一カ月が過ぎました。22歳で故市川房枝先生と出逢い、先生とともに平等・人権・平和を願う婦人参政権運動の道を歩いて40年目の政策決定の現場への参加でした。

中央の政治からはるかに隔絶していると言っても過言では

ない九州は熊本選挙区からの参院選立候補は、去る86年の夏のある日から始まりました。亡き父、佐々弘雄(元・参議院議員)、祖父佐々友房(元・衆議院議員)の縁から、保守の金城湯池、18年間にわたりオモテ・ウラとも自民四議席独占の一角を、女性候補・無所属革新立場で破って欲しいという、強い県民有志の要請を革新陣営からの使者をもって受けたからです。熱慮半年ののち、当落を度外視して承諾、全国の同志の支援のもと、帰熊三カ月余の選挙戦を戦い抜きました。旧姓、佐々姓ならともかく、「紀平梯子」など知る人も少なく、熊本人でもなく、市川房枝先生ほど有名でなく、中山千夏ほど若くもない……と反対陣営から酷評され、「落下傘降下こしかをした見知らぬ女」とまで言われました。熊本は人も知る「看板・地盤・カバン」の三バン選挙がまかり通る厳しい選挙区、その中で86年7月7日の開票日、思いがけない約28万票、自民党2位当選者をおびやかす高点を得、次点惜敗の結果でした。

予想された熊本市や県下市部での高得票はともかく、農・山村部からも少なからぬ支持のあったことは大きな驚きでした。文字通りの「理想選挙」、選挙資金は全額支援者からのカンパ、5〜6人から30人単位のミニ集会を中心とする言論一本槍の戦いでしたが、女性、おとしより、心身障害者の方

がたの強く熱いまなざしを実感しながら、はたらく人たちの活動力に支えられた、睡眠時間平均三時間というすさまじくハードな理想選挙でした。

昨年の完全勝利の理想選挙は、落選の翌日から始まった支持者たちの「今日からあしたへ手をつなぐ県民の会」とともに歩んだ三年間の、日常地域活動の延長線上にありました。

確かに86年に帰郷した頃のわたくしは、熊本を識らないと言われても仕方がありませんでした。わたくしの掲げた選挙公約・政策は、もとより国政全体としては「政治浄化」「婦人の地位の向上」「消費税撤廃」などですが、特に農業県熊本については、農・林・漁業政策の転換と振興、そして人生80年・福祉充実の政策の推進です。86年から89年の参院選まで熊本98の市町村を計五回めぐり抜いて対話・ミニ集会を持ち、野から高原へ、そして山から海辺へと歩きました。名だたる長寿県を誇る熊本で、若者の少なくなつた僻村に残るひとり暮らしのお年寄りの姿、訪れるものない老人病院に横たわる、もの言えぬ患者、児童福祉施設に女性の客とみれば無邪気に寄ってくる寄るべき子どもたち、減反につぐ減反で荒れる水田、手入れのゆき届かぬ山林、特に国有林で働く営林署の人びとの不安定な労働環境、開発で失われる農地と漁場、三十年余にわたる、原爆に比肩しうる惨害「ミナマタ」の被害者の実情など、胸がいたみ、できることならば我

が手でこれをよりよくしたいとの思いがみずからの強い意思になっていくのを自覚しました。還暦を超えた私は今、初めて「政治」について自分なりの実感を得た、といえましよう。

89年8月7日、参院選後初の第115臨時国会が招集され、38年前市川先生に從いて昇つたその同じ大理石の国会正面玄関の階段に足をかけました。議員の出欠を登録するパネルは往時とは違い、木の札でなく電動の押しボタン式にはなつておりましたが、古いしきたりを重視する国会は、そのバツヂも院内規則も、女性に不慣れたトイレも旧態依然たるものです。超党派であるべき参議院の本来のあり方を実践するため「各派に所属しない議員（無所属）を貫くわたくしには、委員会法務委員会ひとつ、希望した農林水産か社会労働などに所属することはできません。しかしこれまでの運動の中で国会活動の経験を生かし、当選直後から、活発な議員活動を開始しました。無所属ですから自分で動かなければ何もはじまりません。消費税撤廃、被爆者後援法、育児休業法など、与野党逆転の参議院の野党議員の一人として提案採決に参加する一方で、今もつとも主体的に取り組んでいるのが、二回にわたる熊本選挙で知つた熊本という地方が抱える自然と暮らしの問題です。

8月4日、わたくしはその二日前の集中豪雨で最大の被害

をうけた阿蘇郡一ノ宮町の坂梨の水害地に呆然と立ちつくしました。長い都会育ちのわたくしは、空襲体験とベトナム戦争の映像でしか知らなかった災害の現実をまのあたりにしました。阿蘇、山鹿、玉名など広範囲にわたって家が全壊、半倒壊、泥濘に埋まり、かろうじて残った家屋の床は泥の層が畳と入れかわっており、電気・ガス・電話は途絶、水は親戚がいればドラムカンで運ばれるが、ない家は役場の助けを待たしつかない。小学校に避難した家族は急のこととて布団もなく、いつ家に帰れるかわからない。この災害は政府、衆・参両議院・県知事の視察が同月半ばまでに入ってから、9月末になってようやく「激甚災害指定」がおりて国の災害対策費が特別交付税中においてこまめ、来春各自自治体に交付される見込みですが、家や家財道具を流失し、また働くに働けない状況の中で失われた財産・生活の救済は、低利の融資などでわずかに補われるというのが現実であります。県全体では農林水産施設183億円、農林業関係281億、公共土木関係504億、文教施設6億など、総額980億円、死者16名、重軽傷者28名など、きわめて深刻重大な被害ですが、ここまで被害が拡大された原因の一つといわれているのが、昨年7月末より今日まで続く阿蘇火山の噴火により堆積したヨナ（火山灰）の除去が不十分であり、ヨナ濁流被害が生じたためです。従来、溢れはしても鉄砲水が生じなかった河川におびただしい鉄砲水が

発生しており、伐採中の杉などをマツチ棒のように押し流して国道や人家を破壊したのです。さかのぼる昨年7月よりの阿蘇噴火について、11月現地に入り、高森町などを視察しましたが、当地名産のタカナは全滅。土地は酸性化し、ハウス栽培のトマトやイチゴを守るためヨナを流す噴流設備やビールの張りかえなど多くの要らざる出費、傘をささねば学校に通えない子供たちの教育問題、目や鼻を侵される健康被害など総額11億円もの被害が農業者を中心に住民を直撃していたことに重ねての追いうちでありました。このヨナ対策については、わたくしは参院の災害対策特別委員会委員長の協力を得て本年1月17日同委員会の現地調査の実施にまちびき、3月、平成元年度特別交付税によるヨナ救済費支出を各ヨナ被害自治体に対し最高前年度比22.6%増で交付させることへの一助となりました。こうした災害対策の際に思うことは、国の自然災害に対する対応はいつも原状復帰、そして自治体への事後的な損失の補てんにとどまり、河川修復や山林壊成など抜本的な対策には至らず、10年あるいは20年ごとに必ずやってくる大災害に遅れをとってしまうということです。

この他、ゴルフ場についても、熊本各地域にわたってゴルフ場乱開発による環境被害があとを絶たず、特に緊急には、ゴルフ場の雑草をとるための農薬被害が深刻なものになりつつあります。噴霧された薬品が附近の小学校や病院へ風への

って来襲、子どもや病人の方が窓をしめきつてもまだ部屋の  
中へ有毒の葉が侵入してくるという例まででてきており、こ  
れに対してわたくしは、この1月、菊池郡大津町矢護川地域  
で「水といのちを守る」講演会を主催、水問題についての住  
民運動に発展させるきっかけを提供、その後もゴルフ場開発  
と農業問題につき、水源環境の立場から法律制度上の情報提  
供を怠らず続けております。

これらの問題は、日本の産業政策の中で農・林・水産業  
の位置付けと大きく関係しているものでもあります。現在、  
日本の農業においては、来年のオレンジ・牛肉完全自由化、  
国際市場の再編成に伴うコメ市場自由化の嵐の前に、生産者  
・消費者ともに量的・質的食料問題、食料安保といわれるさ  
し迫った問題をかかえると同時に、これまでの農林水産政策  
の貧困に伴う環境破壊という、国土の安全をも侵す政治問題  
にもいや応なく直面させられています。熊本県の試算では、  
農業や農村が持つ機能は、熊本県だけで730億円もの市場を  
創出し、県内耕地の各種公益的機能は年間3600億円にも換算で  
きるものとなっております、とくに水田農業の有する水資源かん  
養機能、大気浄化機能、防災機能は地域の環境の保全という  
視点からは金銭に換算しえぬ価値を有しているといえますよ  
う。

右のような立場から、わたくしはまた、コメの無定見な自

由化には公約通り絶対反対であり、むしろ地域振興の鍵とし  
てこの維持発展こそが必要と考えております。そのためには  
何が必要か、検討のすえ、わたくしは昨年末から現在まで、  
農水省も認める「特別栽培米」制度を活用して、無農薬・有  
機肥料栽培の無公害米を都市の消費者にあっせんし、地域の  
生産者と大消費地の消費者を直結させて食の安全と農業の振  
興を両立させる試みを鋭意実行しており、現在のところ取扱  
い量が実質3カ月で1.2トンを突破いたしております。このよ  
うな試行のなから少しでも強い農業、安全な主要食料品の  
普及ができれば幸いであると思っております。

いわゆる地方の時代といわれ続けて20数年、日本の生活環  
境、自然環境を保全した上で地域振興を図る試みへと国政上  
の発想の転換が必要であり、私もまた無所属ではあつても熊  
本をはじめ各地域からの陳情をこれまで200件ちかく受けつ  
け、心をこめて行政当局に申し入れるなどを続けています  
が、いまだ地方の時代の遠いことを実感しております。首相  
の命運をかけたはずの政治改革も、いつの間にか小選挙区制  
導入とすりかえられるなど、油断がなりません。今、世界一  
の長寿国日本の一員として、過疎県熊本から国民が等しく福  
祉を享受する暮らし優先、生活優先、いのち優先の真の政治  
改革をつみ上げるため、日々を歩んでいくのみです。

(きひら ていこ・参議院議員)

## 町がよみがえる時

野本 三吉



集めてきて使っていました。

一九六〇年、安保闘争の年、ぼくは大学に入りまし  
た。大学の四年間、ぼくは小学校の管理員（警備員）  
のアルバイトをし、その小学校の宿直室に泊まり込み、  
大学へ通っていました。この頃から、ぼくは、生まれ  
育った家や風土から少しずつ離れ、親や家族から離れ  
た中で生活をするようになってきたように思います。

戦後の貧しさから脱け出し、高度経済成長へと、全  
体が動きはじめていた時期でもあり、ぼく自身も、自  
由に生きられる時代に入っていたように思います。

ぼくは、約四年間、小学校の教師生活をしていま  
す。短い期間でしたが、この中で、教育というのは、  
一定の共同生活体が成立して、はじめて成り立つもの  
だと感じていました。地域で生活する人々、親たちの  
思いや期待を受けて、教師は子どもたちと関わり、育  
てるものだという思いがぼくの中にあつたのです。けれど  
も、この四年の間に、地域で暮らす人々の、あるいは親の思  
いが、微妙に分裂し、バラバラになっていくのを感じていま  
した。「よい後継ぎ（農家・商店）になってくれればよい」  
「体さえ元気なら」「やさしい子になってほしい」といった思  
いから「勉強のよくできる子」「進学する力をつけてほしい」  
「個性を引き出してほしい」といった学力中心に親の思いも

ぼくが子どもの頃、生活をし育ってきた横浜のはずれの町  
にもどってきてから、もう十年になります。小学校から高校  
まで、地元の高校に通っていたぼくは、緑に囲まれた田園風  
景をごく当然のこととして成長してきました。

家の近くのあき地に、野菜やトマトを栽培し、鶏やウサギ  
を飼って生活し、たきぎは、山に入っかかれ葉や、かれ枝を



移りはじめ、遊びや自主的な活動、集団活動に力を入れていたぼくのやり方がストリートには支持されない状況もでてきたのでした。ぼくは、こうした変化の中で、共同体について、もっと考えたいと思い、教師をやめ、日本の各地の共同体をまわる旅をはじめたのでした。この旅が約四年つづき、ぼくは三十歳の年に、横浜の寿町という日雇労働者の街の生活相談員となり、寿町の簡易宿泊所(ドヤ)に住むことになりました。

## II

日本の各地にあった共同体は、ひとことと言うと、第一次産業(農業・漁業・林業)を中心とした生活体でした。いわば、大家族で一つの共同生活体を運営していくというもので、生活している人は、みな家族であり、兄弟姉妹という感じでした。しかも、全体のこととは、全て全員の話しあいの中で決めていく。

つまり、寄り合いが基本になり、そこで自分たちの生活のあり方を決めていくというやり方だったのです。ぼくは、この生き方が、ひどく自然でしたし、長い間、特に東南アジアの人々の生活の基本だったのではないかという思いにとらわれていました。この日本列島の共同体めぐりは、北海道から沖縄にまで及び、特に沖縄では、共同体の中で、いのちを産みだす「女」と、自然にもっとも近い「子ども」と「老人」

が生き生きとし、大事にされていない共同体(村)は活力のない、滅びの村だと言われ、とても納得のいったことを覚えていきます。

この頃、日本の農業は大規模農政に切りかえられ、次・三男は都市へと出稼ぎに出かけていました。また、地域共同体の崩壊の中で、地域や家族の中からはみ出してしまった人々は、都市へ吸いよせられていました。

匿名者の集団である都市は、その中に、山谷や釜ヶ崎、寿町、笹島といった「寄せ場」を形成してゆきます。一日一日、肉体労働をする人を集め、何の保障もない中で、機械化できない労働を強いていく労働者が集まる場、それが簡易宿泊所(ドヤ)街です。

日本の共同体の多くは、そこでは生活できない人々によって、互いに支えあい助けあう形ではじまっています。奈良の心境部落はその典型で、村八分された人々による共同体でした。

そうであるなら、日本の各地からはみ出してしまった人々、自ら進んでやってきた人々によって形成された寿町にも、共同体の芽があるはずでした。

## III

寿町にある横浜市の生活相談所「寿生活館」が、ぼくの職場でした。ぼくも、寿町の簡易宿泊所(ドヤ)に泊まり、一

への住人になっての生活が、それから約十年つづきます。

予想に反して、寿町で出合う一人一人の労働者は、孤立していました。みな一匹狼で、むしろ人を信じることをあきらめてしまった人が多かったのです。

その淋しさ、孤独をいやすために飲酒やギャンブルが盛んでした。酒場はいつも満員でお祭りのような雰囲気の中で、人は唄い、語りあい、口論やケンカが日常的でした。

一九七〇年代の前半から、日本の高度経済成長にかげりがみえはじめました。第一次石油ショック、そして構造不況、経済が落ち込むと、まっ先に切られるのが、何の身分保障もない産業予備軍の日雇労働者です。

何の身分保障も、財産もない日雇労働者に残されているのは、アプれて食事もとれず、外で寝ることだけ。まさに、死ぬ自由しか残されていないのです。体の弱い人から、次々と病氣や栄養失調で倒れはじめました。

何とか食事を、宿泊所を保障してくれという要求が、ぼくに激しく寄せられました。

この中で、小さな集まりが町の中で開かれるようになりました。「寿と自分を自由に語る会」——何人集まるかと不安の中で開いた第一回から、労働者は続々と集まってきて、日頃の不満がドンドンと噴き出しました。

働きたいのに仕事がない。景氣のよい時は目いっぱい使っ

て、景氣が悪くなれば、ポイと捨ててしまふ。そんなことでよいのか。

激しいやりとりもあり、その中から自分たちで学習もしていこう、お互いがもっと知りあわねばいけないのではないかという話がでてきて、この集まりの中で「労働基準法」の学習がはじまったのでした。

意外なことに、寿町には、さまざまの前歴の人がいて、司法試験に挑戦したことのある老人が、その講師役をやってくれ、組合結成への意欲もふくらみ、寿日雇労働者組合が結成されてゆくことになりました。

また、相互学習の渦の中から、文学研究会、俳句会が生まれ、寿夜間学校も誕生してゆきます。寿夜間学校では、参加者一人一人が自分史を語る「私の自叙伝」が定着し、急激に仲間意識が広がっていききました。

さらには、字が自由に読み書きできない人たちによって、寿識字学級が生まれ、簡易宿泊所（ドヤ）の中に、寿識字文庫も誕生。

さらには、寿町にいる身障者の人たちによる学習会「身障者の権利」講座をもとに、寿身障者の会がうまれるなど、数年のうちに、次々と自主的なサークルや集まりが生まれてきたのでした。

#### IV

不況の波は、全くの失業状態を寿町に生みだしました。泊まるところのない労働者は何百人という数になり、とうとう日雇労働者組合を中心に、市の建物である寿生活館に寝泊まりするという自主管理が行われるようになりました。カンパを集めて、布団をかり、炊事も行うようになりました。

泊まる人たちも、朝はキッチンと清掃し、炊事の手伝いもするようになり、仲間同士の生活相談も行われるようになったのでした。

それまで、行政は、寿町の人々による自治能力については、全く信頼していなかったと思います。しかし、こうして、寿生活館の自主管理を行い、さまざまのサークルや団体が出てきて、相互扶助や学習が行われるようになると、交渉相手として認めないわけにはいかなくなりました。

寿町は小さな町です。人口は約五千人。簡易宿泊所は90軒。この町で生活する人たちが自分たちで、自らの生活を守るためには力をあわせ、まとまっていくしかありません。

こうして、寿町にある、さまざまの団体、サークル、グループが集まって、「寿住民懇談会」を結成します。この中には、先にあげたグループの他、自治会、老人会、子ども会、断酒会なども参加し、熱心な話し合いがつかまりました。そして、一つずつ、みんなの総意で決まったことから実現してい

くことになり、その第一番目は、寿町の中に「診療所」をつくることになりました。街頭にでの署名、寿町内の署名が行われ、あつという間に二千名をこえ、短期間の間に、行政との話し合いが付き、念願の寿診療所がうまれました。

さらに、寿生活館の改造と再開。これも約百回に及ぶ、深夜までの話し合いが続き、寿町の住民の要求が、ほぼ受け入れられる形で改築され、再開されることになったのでした。四階の集会堂には、シャワーもつき、冠婚葬祭も行われるようになり、何よりも画期的なのは、住民の中から四人の人が、職員として採用されたことでした。

自分たちの町を自分たちでつくっていくという動きは、不況という「生きてゆく」ためのギリギリのところから胎動しはじめたといつていいと思います。

そして、寿町には、住民会館も完成しました。労働者が力を出しあい、働いたお金を出しあった会館です。この中でさまざまな話し合いが行われ、夏には夏まつりの準備が、冬には夜間パトロールが行われています。さらに学童保育もつくられ、子どもたちの生き生きした声があふれています。

#### V

今から十年前、ぼくは、寿町の職員をやめ児童相談所のケースワーカーとなりました。久しぶりに、育った町に帰ってみると、田畑は埋められ、工場が建ち、山はけずられ団地が

特集

地域をよみがえらせる

# 足尾に 通い続けて

竹見 智恵子



はじめて足尾を訪れた時の衝撃を忘れることができない。  
今から八年ほど前のこと、足尾に着いてまず目に飛び込ん

地となった。

銅の生産が増えるにつれ、渡良瀬川中・下流域に魚介類

建ち並んでいます。そして数年前、巨大な高速道路が、ぼくらの村を埋めて走る計画が発表されました。わずか五百戸の町で九〇軒の家が壊されることになりました。

町のまん中を通ることで、町も二分されてしまいます。この危機の中で、ぼくは故郷を守り、自分たちの町を、自分た

ちでつくりあげるため、小さな集まりからはじめようと思っています。寿町での十年の体験は、いまぼくの中で、どの町でも必ず、自分たちの町づくりは行えるという確信になっているのです。

(のもと さんきち・横浜市南部児童相談所)

できたのは、赤錆びた工場の廃屋と、崖にへばりつくように建っている坑夫長屋の家並みだった。

渡良瀬川沿いに登っていくと、川をへだてて威圧的に建っている建物の一群があった。古河鋳業(現・古河機械金属)が経営する銅の精錬所だ。ほぼ中央に巨大な煙突。白い煙が川の上流へとゆっくりたなびいている。煙の行く先は全山裸地となった山々の連なり、一木一草生えていない。これが「公害の原点」といわれている足尾の風景だった。

足尾銅山は、一八七七(明治十)年、古河鋳業の創始者・古河市兵衛によって本格的な操業が開始された。市兵衛はヨーロッパの新技術を積極的に導入、銅の生産高は急激に伸び、数年後には日本最大の銅生産

が減る、農作物が枯れる等の被害が出始めた。被害は年々増大し、ついには漁民や農民の生活や生命を奪うまでになっていった。これが世に言う『足尾鉍毒事件』で、ちょうど百年前の一八九一（明治二十四）年、田中正造の帝国議会での質問をきっかけにして顕在化した。

公害問題は今でこそ社会的に認知され、公害企業は人々の指弾を受けるようになったが、百年前、日本も国威を発揚して列強の仲間入りをはたそうとしていた時代、国益の前に個人の権利など鳥の羽根のように軽かった。鉍毒の被害地で田畑の作物が枯れ、魚が死に、家族が飢え、死産が増えても、政府は「国家伸展のために一地方の多少の犠牲はやむを得ない」とする方針を変えようとせず、田中正造を中心とする公害反対闘争を強権をもって弾圧した。そして一九〇七（明治四十）年、鉍毒被害地である栃木県谷中村の村民を強制移住させ、そこに遊水地（鉍毒の溜め池）を作ることで強引な幕引きをした。以後足尾鉍毒反対闘争は急速に退潮していく。

足尾の荒廃した山々を見て、私は『足尾鉍毒事件』の本質を見たように思った。八十年前に谷中村の強制破壊を見届けた田中正造は、「地域住民の生活を破壊して顧みない政府のやり方は、日本全体の『亡国』に通じる」と断じたが、足尾の山の風景は、正造が言うところの『亡国』の風景に私には

思えた。企業の利潤追求と国家発展の野望がひとつになった果てに、荒れ果てた山や川や田畑が残っている情景だった。

そう思っていると、足尾と同じ風景はいたるところにある。水俣も、東京湾も、イタイイタイ病の富山も、そして日本中の学校という学校が、足尾と同じ風景だ。

「足尾」を見ることで「日本」がわかる。「足尾」を知ることと、「アジア」を見通すようになれる。日本の近代化の歴史が凝縮されている足尾にこだわるのが、日本全体へ、アジアへ、そして世界へと私自身の視線を拡大していくことを可能にしてくれた。足尾は、いつのまにか、私の世界を見る目の原点になっていた。

足尾町のいちばん奥深く、渡良瀬川源流にあたる松木地区は銅精錬所の煙害をもっともはげしく受けている地区だ。春から初夏にかけてこのあたりを歩いていると、時々奇妙な光景を見かける。岩肌のむき出した山の斜面に張りつくようにして、ひと抱えほどの土袋をたんねんに並べている人たちがいる。立っていることさえ困難な場所に、手作業で、何十、何百と土袋を並べていく。危険で根気のある作業だ。実はこれが、日本中の営林関係者から植樹法のモデルとして注目されている足尾式といわれる緑化方法なのだ。

足尾の山は、たんに樹木が枯死してしまっただけではなく、

植物が根を張るべき土までも剥げ落ちてしまっている。伐採や煙害による立ち枯れで地面の表層が荒れ、雨が降るたびに大量の土砂が流出してしまつたのだ。岩肌が露出してしまつていゝ山には、直接種を蒔いたり、若木を植えたりすることができない。そこで考え出されたのが、布袋に土・肥料・種子を混ぜて入れ、それを山肌に並べて、滑り落ちないよう鉄杭で止めていく方法だ。さらに急な斜面には、ヘリコプターを使い、種子・肥料・アスファルト乳化剤の混合物を散布する。突風の吹く谷間を、ヘリコプターはまるでアクロバット飛行のような方法で種子を蒔いていく。

こうした作業が林野庁の手で営々三十年以上にわたつて続いているが、その遅々とした進展ぶりを見ると、いったん失われてしまつた緑を回復するためには、いかに膨大な労力と費用が必要かを無言のうちに教えてくれる。緑化を担当している林野庁営林局の発表では、一九七三年に行つた実地調査では、緑化事業を終えた地域の八割に植物の芽生えが見られるというが、芽生えは緑化事業のほんの第一歩にすぎない。それらの植物が成長してかつてのような樹林となるまでにはおそらく数百年はかかるだろうと予測する学者もいる。その上、未だ手つかずの荒廢地が数千ヘクタールにわたつて残されている。足尾の山々がかつての緑を回復するには、いったいどれだけの歳月を必要とするのだろうか。

おかしなことに、こうした緑化事業に対して、煙害を起こした古河鋳業は一銭も費用を負担していない。すべてが税金でまかなわれている。煙害地区の八割は国有地でこの緑化は林野庁が担当し、後の二割の民有地（ほとんどが古河の私有地）は栃木県が担当している。一企業の出した公害の後始末である緑化事業が、すべて行政の負担、つまりは国民の負担で行われている。企業責任を問うどころか、行政がみずから公害企業の後始末をしているという奇妙な構図がまかり通つているのだ。

おかしなことはまだある。水源の森林が荒れば、当然川も荒れる。渡良瀬川の上流は、雨のたびに流れだした土石や流木でえぐられて水路の傷みがはげしい。その上、保水力を失つた山からは大量の土砂が流れ出し、いくら取り除いてもすぐに川底が埋まってしまう。そのために河川を管理している建設省では、これまでに足尾周辺だけで大小合わせて百カ所を越える砂防ダムを作つてきた。そしてこれらの工事も建設省が予算化し、緑化事業同様、国の事業として行われている。

さらに、渡良瀬川流域には今も鉍毒によつて汚染された田畑があるが、汚染は足尾にある鉍滓堆積場の崩壊が原因であることが明らかになつたにもかかわらず、土地改良事業は群馬県実施の公共事業として行われ、古河は費用の半額を負担

しているだけだ。

先日、古河鋳業の出した公害の後始末に、国や地方自治体などのくらい税金を注ぎ込んでいかを調べてみた。すると、ここ三十年ほどの間に、足尾の山々の緑化事業には林野庁・栃木県あわせて約一二七億円、足尾地区の砂防ダムには建設省が二一七億円、渡良瀬川沿岸の土地改良事業には二十億円、ざっと計算したところでも三六四億円が一企業の出した公害の後始末費として注ぎ込まれている。しかも、これらの事業はいずれも完結したわけではなく、この先も半永久的に続けなければならない。野放しどころか、企業ほしいままに行政が使われている見事な一例だ。

古河鋳業は一九七三（昭和四八）年に閉山を迎えるが、この閉山劇がまた見事に公害企業の体質を物語っている。

突然訪れた足尾銅山の閉山劇は、町の人々を一時はほとんどパニック状態に追いやった。企業城下町といわれる足尾では、町民の大多数が古河に依存して暮らしていた。それにもかかわらず、閉山が発表になって実際に坑口が閉鎖になるまでじつに手際よく事態が進行した。

古河は閉山の理由として「鉱源の枯渇」「銅鋳業の停滞」「公害対策の経費増大等による経営悪化」をあげた。それに対して、まず町当局があっさり古河の窮状を認め、続いて労

働組合も解雇反対の闘争を放棄した。鉱源がほそり、鉱況がかんばしくないのなら仕方ないという意見が大勢となり、銅山労働者は涙を吞んで古河側の解雇条件に同調した。

しかし、調べたかぎりでは閉山の理由は別のところにあつたと思う。古河鋳業発行の『創業百年史』によると、古河鋳業は、実は閉山発表の数年前から海外進出に向けて着々とレールをしいていた。しかも、この動きは古河にとつてはじめてのものではない。

古河鋳業の海外進出は、実は戦前から始まっている。タイ、インドネシア、フィリピン等の豊富な鉱物資源に目をつけ、各地の金山・銅山に一九三〇年代半ばから資本投入を始めている。それが敗戦ですべてが無になってしまい、古河としては惜念の思いがあつた筈だ。そのため、六〇年代に入り、銅の貿易が自由化になったあたりから、ふたたび戦前の夢を追って海外飛躍を目論んでいたと思われる。

六〇年代後半から、古河は具体的なかたちでアフリカ・中南米・アジア各地の金山・銅山、ウラン鉱に資本参加を開始する。この動きが、実は足尾での閉山につながる。足尾での閉山はけつして銅鋳業不況のためでもなければ、銅鋳脈の寿命が尽きて自然消滅の事態を迎えたのではない。

アジア・中南米・アフリカ等は、ちょうど明治の頃の足尾のように、豊富な鋳業資源と安い労働力に恵まれている。公

害の規制もまだうるさくない。それらの地域で銅の現地生産ができたなら、古河にとつてあらゆる点で都合だ。そこで古河は、海外進出のための調査をし、周到な準備を整えたところで足尾の閉山を敢行した。古河は足尾という場を得て成長してきたにもかかわらず、他所により大きい利潤獲得の可能性があれば、父祖の地さえ捨ててかえりみない。閉山時、町の人口の四分の一が生活基盤を失って足尾を去った。そしてその後も人口の流出が続ぎ、足尾は今、栃木県でも有数の過疎地となった。

今年五月の参議院予算委員会で、ODAがらみで進出した多国籍企業によるフィリピン・レイテ島での公害問題が野党の追求を受けた。フィリピン・レイテ島には日比合弁の銅精錬所が七年前から操業を始め、現在深刻な公害が発生している。排水の流れ込む海域の水質は異常に酸性度が上がりすでに魚がすめなくなっているし、周辺の椰子やパンの木が枯れ始め、老人や子どもが呼吸器官の異常や皮膚のかゆみを訴え始めている。現地からの報告を聞いた時、その様相があまりにも百年前の足尾鉍毒事件発生時に似ているのに驚いた。このプロジェクトに古河鉍業は技術提供とかたわちで加わっている。日本であれほど非難を浴びながら、同じことをフィリピン・レイテ島でくり返しているのだ。

## We 100 号記念索引

11月に完成予定!

11月号でWeは100号になります。Weの索引があったらいいなと思いつつ、のびのびになっていました。We 関西で11月3日完成めざして、100号記念の索引作りに取り組んでいます。

Weを創刊号から愛読している方、最近Weに出会った方、(出会えていないお友達にも)、ぜひ買って、お役立て下さい。

11月にWe 100号記念の集いを各地でされませんか。ご連絡下されば、そちらにおとどけます。

- ・予価 500円+送料実費
- ・問合せ先 We兵庫の会 相川美知子 (〒657 神戸市灘区鶴甲4-6 鶴甲コーポ23-402)
- 西本和代(〒655 神戸市垂水区狩口台4-24-301)

今あちこちで、虫がりんごを喰いつぶすように、企業の経済活動が地球を喰いつぶしていく。問題は一地域でおさまらなくなり、住民同士、強い連帯が必要だ。他地域でのことも他人事ではすまされぬ。今後レイテ島で、第二の足尾鉍毒事件が深刻化するなら、今度は私たち一般市民も公害企業と同罪ということになる。

(たけみ ちえこ・フリーライター)



# 今月の読書から

半田 たつ子

日本住宅会議・関東会議編

『キッズプレイス』

居「こちよい子どもの住環境』

ささら書房

都市破壊・農村破壊・自然破壊の進む中で子供の成長にプラスになるまちづくり、住まいづくりを求めて、三十一人が執筆を分担。四年がかりでまとめた労作。

子どもの生活と住環境をトータルにとらえようとした意欲を買うが、子どもの生活の第二章は、すでに言い尽くされたことを整理したという感を持つ。第四章「子どもの「みち」の視点は新鮮だ。多数の著者による執筆は、構成を決定するまでが大変で、かなり時間がかかったというが、もっと練ってもよかったのではないかと惜しまれる。

第五章「子どもと公園で紹介された「羽根木プレーパーク」は、延藤延弘氏の『まちづ

くり読本』(本号、波参照)にも登場するが、後者のほうがはるかに魅力的である。せっかく各地の豊富な実例が載っているのに、図・写真が小さいのは残念。座談会の頁を減らし、図や写真にたっぷりスペースをとってほしかった。「コラムーさまさまなアプローチ」では、「東京下町風景二題」の森まゆみ氏がおもしろく、「池子の森と市民運動」もいい。

野田正彰

『都市人類の心のゆくえ』

文化精神科学の視点から』

日本放送出版協会

前著で物足りなさを感じたあと、開いたこの本、特に「第一章大都市社会の気分」は興趣尽きなかった。現象を並べることはもう飽きた。なぜその現象が生まれたかを掘り下げなければ、そう痛感した。高知県で生まれ、北海道大学で学び、パプア・ニューギニア高地で文化精神医学的研究をした、という著者だけに、大都市社会の気分をうがう目はシャープだ。「いつしか現代人は、抑圧も、その抑圧に伴う夢の検閲も薄らいで、あまり夢を見なくなった。しまっておきたい無意識の領域が乏しくなったのかもしれない。そのかわ

り、意識は清明なまま、夢の中ではなく、活動している時間の中に、めまいの遊びを散りばめるようになった。これが世紀末のオン・ザ・ウェイである」など、現代人の特徴を言い当てている。

高齢化社会に関して、「主要な問題は、痴呆の世話や年金の検討ではなく——もちろんそれも大切だが、確かな情報を提供し、老人から不安を少なくし、一回かぎりの人生の意味に向かえるようにすることである。老いの型の崩れた時代にあつて、老人のための情報がまず求められている」にも納得した。

「妻たちの思秋期」が話題になったが、この分析は多分に誇張されており、「産業社会化を支え、低成長期を耐えて、ながい負荷にあつたのはむしろ中高年の男性であり、精神医学的問題は圧倒的に男性に多い」と言う。単に若い男性の結婚難が「花婿学校」を出現させたというような皮相的な見方でなく、中高年男性の自殺率が、女性の三倍にも及ぶならば、マン・リップの声は拳がなるべくして拳がらねばならないだろう。

著者の「婦人問題」にかかわる視点に、異論はあるが、「いま」を生きる上で貴重な示唆が散りばめられている本だ。

## 分校が 地域をかえる



押 切 郁

民話のふるさと、遠野市と、宮沢賢治の童話の里、花巻市とのちようど真中に小さな村がある。賢治が銀河鉄道と呼んだ、空に向かって列車が走るような山また山の地である。

岩手県のほぼ中央に位置する人口六千二百人の宮守村。

この日一六月二十七日アメリカ、デュボイス高校留学生の歓迎に、のどかな村中が湧いた。宮守村総合センターに集まる人々の緊張と興奮に包まれた顔。佐々木康治村長はじめ

村役場の人々、この村唯一の高校、遠野高校宮守分校の職員、そしてこの三月、デュボイス高校に短期留学した生徒たち、ホームステイを受入れる家庭の人たち、本校からは鈴木直校長が。また、この春転出された奈良憲光元教頭のにこやかな顔もみえる。「ワタシハ、ライアン、ウイルキンソンデス、ドーンヨロシク」六名の留学生たちの自己紹介に大きな拍手が湧く。すでに顔見知りの生徒たち、留学生が席につくと、もう、会話ははずみ、楽しい交流がはじまる。

「とても信じられないことです。今の子どもたちは、しあわせです」。頬を紅潮させ楽しげに語り合う分校生徒たちの姿に、父母たちは、感慨をこめて話しあっていた。

### 廃校寸前の分校

かつて、人口一万人を超えたこの村、急激にすすむ過疎化の波に今は六千人に減少、懸命の歯止めをかけた幾多の施策も効なしの状態で、多くの公共機関が村から姿を消していった。この村ただ一つの高校、宮守分校も廃校を論議されるようになった。人口の減少と交通の至便化、加えて、「非行」生徒の増加という問題をかかえて生徒数は激減、新入生は一九七四年の百二十六人をピークに年々減少、ついに'86年の新入

生は十四人だけとなり、地元宮守中学校からの進学は、卒業生八十人余りのうち四人のみ、あとは遠野の本校や花巻市等、村外の十七高校に分散してしまつた。村づくりは人づくりと教育行政に力を入れ、就学前教育の一貫性と、小中の統廃合を実施、その成果が上げられたことの皮肉な結果であつた。村役場に佐々木康治村長を訪ねた時、窓外の水面を指さし、「折角育てた苗が、みんな他所に持ってゆかれてしまうようなものだったんですよ」と語つた。「先生方はこんな分校は早く廃校になつたほうがよいと思つたでしょう」とも。86年、宮守村議会で分校の廃校が論議された。あまりの荒廃、村からの入学生がいない。小中学生に悪影響を与える、廃止すべきとの意見も出た。

翌年、本校と兼務する山影源吉校長、分校の責任者奈良憲光教頭が就任した。この時、いよいよ、廃校、整理にやつてきたと村民は嘆いたという。分校存続に固執してきた村長も、どうにもならないという状況になつていた。

### 逆転の発想からのスタート

老朽木造校舎、目新しいものは何一つない分校。生徒は荒れ、TVドラマを観るような日々が続いた。元分校生の誘惑からのがれるため、窓ガラスはすべて曇りガラス、使用する三つの教室以外は鍵がかけられ、まるで刑務所のような印象

だつた——と、就任当時の様子を奈良教頭は語る。

山影校長、奈良教頭は、再生を目標に、多難な業務を乗り越かのように発想を転換させ、新たな構想を打ち出していった。荒れた生徒であるからこそ教育すべきだ。交通が至便化されたなら逆流もあり得る。田舎だからこそ、最も先端的な学科へ転換させよう、国際交流をしよう。どうにもならない軟式野球部だからこそ、硬式野球部へ転換しよう。基本的な発想は、学校がよくなれば生徒は必ず集まる。人材育成こそ、地域の活性化と連動できるという信念である。逆転の発想からのスタートであつたと言えよう。

学校内には全職員による分校活性化委員会を設置、村には分校振興協議会（会長佐々木康治村長）が再編成され、両者一体となり分校活性化への真剣な模索がすすられた。

#### ●学科転換——普通科から情報ビジネス科へ

「非行」と学力低下からの再生計画は、国際化、情報化の流れに対応した学科—情報ビジネス科への転換である。学校施設の改修策が打ち出され、グラウンド整備、マイコン導入、コンピュータ室の整備、外人教師招請等々。次々と実施された。刑務所のような教室の暗いイメージを一扫するためにも、改修がすすめられた。村が分校に注ぎこんだ経費は、およそ一千万円、県立高校に何故それほど肩入れするのかと批判の声もあつたが、次々と実現される分校の変容ぶりに村民も変わ

り、九月村議会には分校振興協議会への補助を全員一致で採択した。

分校活性化構想は提示されたものの、果たして、入学志願者は何名あるものか。あまりに長く続いた低迷・荒廢の歴史は短期間にはぬぐい難く、分校不信は、なお、根強かった。

奈良教頭を先頭に、凍てつく冬の夜、教師らの中学生へのPR活動、家庭訪問が二か月にわたって繰返された。

「あんな分校に入れない」と玄關払いされたこともしばしばとか。四、五回訪問する家庭もあった。その内、しだいに、学校を語り、地域の未来を語るようになったという。

'88年、分校の歴史を変えた画期的な年、この四月、入学志願者は、ついに定員四十五名の二倍を超える九十二名に達し、県下に大きな反響をまき起こした。

#### ●国際交流活動

この小さな村で、この分校でと驚くような国際交流活動も宮守村との幾多の協議の末、方向性を確認。'87年十月、日米高等学校交流プログラムに参加することが決定されたものの県教育委員会が認めないこの異例の事業も、宮守村をあげての推進が表現に大きな役割を果たした。即ち、宮守村国際交流推進協議会の事業として、'88年五月、アメリカ・ワイオミング州・デュボイス高等学校と姉妹提携した。また、国際交流育英奨学金制度を確立し、分校生に無利子で資金を貸与し

た。

'89年、分校生十二名を統率教師二名とともに、デュボイス高校に派遣し、約一か月の学校生活、ホームステイを体験した。同年六月、デュボイス高校生九名と教師一名が来村、村をあげての歓迎の中で、三週間にわたる交流が行われた。ホームステイをして通学し、共に学び、クラブ活動やさまざまな体験学習をした。まのあたりに見る国際交流、生き生きと活動する生徒たちの姿に、村民の驚きと喜びは大きかった。

今年度も、三月に十五名の生徒が留学、六月は六名のデュボイス高校生を迎えた。内、一名は、一年間の留学生である。

国際交流を担当する鈴木静子教諭は、三回の訪米、準備段階から今日までのハードな仕事をこなしている。華やかな国際交流の陰に、期待を荷う担当者苦労も忘れてはならない。

#### ●軟式野球から硬式野球への転換

野球部長猪岡教諭にも、分校の存続を荷う苦しい日々があった。'85年、非行のふきだまりのような分校に赴任、「野球で何とかなるかも……」と監督を引受けた。しかし、「クラブ活動より遊ぶほうがよい」という風潮の中で、練習に出るのは二人だけ。翌年の入部は一名、試合に出る度五回コールド負け。毎日、登校拒否寸前の心境だったと語る。奈良教頭は高野連理事長を歴任、野球への造詣が深い。分校再生を野球にかける思いも強く、軟式がだめなら硬式野球部に転換す

ることを提唱。今でも練習できないものを途方もない転換と思われた。しかし、豪雨の中で最悪の条件で強いられた軟式の試合、しかも、あきらかな「ミスジャッジ」による惨敗が、硬式への転換を決意させた。「三年生が夏の大会で満足のゆく試合がやれるためには、軟式で望めぬなら硬式へ移行しよう」と、二年生三名、一年生六名で発足した。しかし、部員は意に反し、「きびしい」「遊ぶひまがない」と退部する有様、ついに二名を残すのみとなった。奈良教頭と共に入部勧誘のための家庭訪問が続く。地元からのきびしい批判・不信の中で、野球部が過疎化してゆく郷土を守るという信念が支えになった。宮守村は、五百万円を投じグラウンド整備、用具整備をすすめ、助役を会長とする後援会を結成、実現に向け対応した。整備がすすめられたものの「本当にやれるか」焦燥の日が続く……。

'88年、学科転換に伴い定員の二倍を超える志願者が集まり、地元中学部野球部の大半が入学するというニュースに驚く。そして十六名の硬式野球部が誕生、後援会も六百人を超えた。昨年七月、硬式野球部に転換して二年目に分校の四倍の生徒数を有する学校からの念願の一勝に応援席は歓喜、乱舞した。人口の二割が応援に操り出し、食堂、役場、農協も開店休業。地元の活性化へ確かな手ごたえを感じた喜びでもあった。

## 二十一世紀の村づくりを目ざして

分校が変わった。三年前七十二名の廃校寸前の分校が、二百七十名の日本一生徒数の多い分校になった。村民の意識も変わった。今、この村では分校と呼ぶ人はいない。西校と言う。こうした分校の変容は全国にも紹介され、共感を呼んだ。多くの企業が学校や村を訪ね、支援の輪が広がり、村の将来を大きく発展させるコンピュータ関係の情報産業進出も計画されるようになった。進出予定企業、コンピュータ会社等の優れた技術導入による効果的学習方法も取り入れられ、来春の卒業生を受入れる準備も進んでいる。

村は新たな村づくりの気運に満ち、賢治の銀河鉄道をイメージした運動公園やコンピュータソフトウェアの企業公園、新しい街並構想などの夢が具体化されつつある。一方、学校は、質的な充実の時を迎え対処を迫られているが、分校という制約の中のきびしい現実もある。佐々木村長は、「先生方が息切れしない内に」と、独立校の実現に意欲的である。すでに、新校舎建設は着手され、きびしい現実に向かって運動がすすめられている。

銀河鉄道に乗って、トンネルを抜けると、新しい二十一世紀のすばらしい村が展開する日の近いことを願う。

(おしきり いく・遠野高校宮守分校非常勤講師)

# 発言

## 博覧会ってなんだろう

飯田しづえ

大阪鶴見緑地で開かれている「国際化と緑の博覧会」(花の万博)が半年間の会期の折り返し点を迎えたのを機に、日経新聞社が、花博に出展している計二百十三の企業団体、地方自治体、海外参加国を対象に、アンケート調査を実施した(有効回答百四十四)。その結果、好調な入場動向を反映して、出展者の九五%が「花博は成功する」と判断しており、会期末までの総入場者も協会目標の二千万人を上回り二千四百方に達するとする回答が多かった。

ただ花博会場の構成については、「花と緑」がわきに追いやられ、企業パビリオンばかりが中心となった、園芸博とは言えない、などと批判が多く出た。「自然と人間の共生」というテーマが表現出来ているか、との設問にも四割強が「表現出来ていない」と回答、特に庭園出展を中心とした自治体の間で否定的な見方が六割近くに上った。

開場直後四月二日のウォーターライド転落事故以来相ついだトラブルの原因としては、「準備期間の不足」「人員管理体

制上の問題」「安全意識の希薄さ」をあげる出展者が多かった。花博開催の効果では、「大阪のイメージアップにつながる」が八割、「関西のイメージアップにつながる」が六割に上った。しかし国際的アピール度では、効果ありとする出展者四割にとどまっており、今後の課題となりそうだと報道されている。企業の考える成果とは「企業文化のPR」「企業の知名度を上げる」「自治体のイメージ向上」「観光客を地元へ誘致する」が九割、外国の考える成果も「自国の知名度を上げる」「自国の観光客を誘致する」であり、「花と緑が附属的装飾としてしか扱われていない」「国際園芸博としての会場構成とは言えない」などの批判も多く、花と緑が主役になっていない現状を出展者主催者側が認めている結果が出た。「自然破壊をなくそう」という人を増やすは一四・六%しかなかった。

会場の鶴見緑地は、第二次世界大戦の時大阪防空緑地として大阪市が取得した所であり、当時すでに大阪が空襲で火の

海になることが予測されていたのである。そして建物はたてないで一部は公園になり、低地帯なのでごみすて場として使われていた土地で、古い地図には「錯雑地」と記入されている湿地帯であった。

一九七〇年の大阪万博は「人類の進歩と調和」というテーマであったが、万博工事と同時に「万博に原子の灯を」と敦賀原発の突貫工事が行われた。会長石坂泰三(東芝)、副会長芦原良重(関西電力)、会場には電気事業連合会の電力館があり、原子力の平和利用の宣伝が行われ電気企業の多くが出展した。七〇年万博の狙いは原子力発電の推進にあった。この時も大きわざであったが、太陽の塔を中心とする園内の日本庭園、日本民芸館、国際児童文学館、国際美術館、民族博物館等は現在も残されており、当時植えられた樹々も二〇年経って緑深くなり、市民の遊覧の地となっている。これは所在地が大阪の北部山手の方であったのと、現在よりは自然に近い植樹等がされた結果だと思われる。花博のように植木鉢をならべたのとはちがう。現在はホテル業界がタイアップしてツアーを組んでいるが、その当時豊中市の家庭は、全国の親類、知人が家族づれで万博見物に来て泊まってゆくの各家庭のゴミの量が大量に増えて、それまで週一回の清掃車が週二回になり、市民としてはかねて望んでいた週二回の実現を喜んだが、市の清掃費は大変な増加となった。当時私は豊

中市の議員をしていたので覚えている。

万博の時もこれに反対する人たちが大阪城公園で反博覧会を三日間行い、原子力発電反対のデーターの発表をしたりした。今回も光のフアンタジー電力館の前で、原発反対のデモやうたとおどり等が行われた。また花ということで美人コンテストが行われようとしたことに対して、多くの女性団体が反対の意志表示をして、大阪府・大阪市はコンテストには協賛しないことになった。

大阪の有名な通天閣は、明治時代の内国観業博覧会を記念してパリのエッフェル塔をモデルにしたと言われ、高さ七一メートル、当時は日本一高い塔で私の幼児期の思い出にある。戦前はライオンはみがきの広告電飾があった。一九二七年、吉本興業が五万七千円で塔を買い、ライオンはみがきの広告料は年間一万八千円であったという。戦時中空襲の目標にもなるということで解体することになり、一九四三年四天王寺管長の引導によって、大阪市長、陸軍幹部の人も参加して解体式をしたとのこと。現在のものは一九五六年十月完成、高さは一〇三メートル、日立OAシステムとエレクトロニクスの日という電飾看板、花の万博という横看板もついていた塔の下には坂田三吉の王将記念碑が建っている。

大阪の人はまつりが好きらしいが、博覧会とは結局だれのため、何のためのものなのだろう？

発

言

## 原発で地域はよみがえった？

木下 雅子

日本列島の真中あたり、日本海につき出た能登半島。

この半島のど真中に、原子力発電所（北陸電力）の計画が出されたのは一九六七年、今から二十三年前のことです。それまでこの海沿いの町（羽咋郡志賀町）は美しい海山にかこまれて平和そのものでした。

私はこの志賀町の隣町に住みながら、二十年近くもねばり強く反対運動を続けてきた地元漁民の苦悩に無関心のまま、教師（家庭科担当）をやっていたのです。つまり食品添加物の恐怖などと、のん気な授業を続けてきたのです。

ところが、一九八六年四月に突然起きたソ連の原発事故、これは大きな衝撃でした。一番のショックは、あの規模の事故がもしこの志賀原発で起きたら、私の家（13 km）や職場（20 km）は、即立ちのきのど真中に入ること。つまり立ちのきを拒否して住み続けたら数年間に80パーセント以上が死亡する地域であるということです。でも動かなければほとんど情報は手に入りません。つまり地元の75パーセントの人々が読んでいる地方新聞は、なぜかこの種のニュースを全く報道

せず、「これからのエネルギーには安全で経済的な原子力発電しかない」という記事だけが大きく載るばかりなのです。テレビも同じく「原子力発電は安全を第一に考えて設計されています」などという電力会社のコマーシャルがニュース番組の直後に流れるくらいですから――。反対運動の動きなどを、隣の町どころか同じ町内の住民すら知らされてこなかったのです。

こんな能登も、少しずつ情報が届くようになってくると、変化のきざしが見えてきました。時を同じくして「原発いらぬ」という全国的な動きも全国レベルのニュースで知らされました。

こんな動きにあせりを覚えてか、電力会社は第二次公開ヒアリングを二か月も早め、ひき続き一九八七年末には準備工事と称して事実上建設にとりかかってしまったのです。

これには私もだまってじっとしていることができません。女友達五人で相談しました。「電力会社のトップと県知事に会いに行こう。その日までに署名を集められるだけ集めよ



う」という、今にして思えば無謀な計画です。一か月後、連絡をしておいた日に、二千九百人の署名を持って、仕事を休んで出かけました。まず北電。入念にチェックされ、パチリパチリと手配用の写真をとられました。その後は社長どころか課長クラスの若い男が二人出て来て、「質問には答えるつもりはありません！ 署名は受け取ることはできません！」と何を言ってもシャットアウト。「約束の30分をすぎました」と追い出されてしまいました。「原発の推進には地元住民の声を充分に聞いて慎重に事を運ぶつもりです」という北陸電力のことは信じてきた私は大きなショックを受けました。

午後はその足で石川県庁へ行きました。当然のことながらきちんと手続きをふんで知事へ面会を申し入れてあったのに、現れたのは電源立地対策室長です。「私は着任して間もないので今日は皆さんのお話を聞いて勉強させてもらいます」をくり返すばかりで、幼な子をおぶって真剣に不安を訴える女性たちから目をそらし、うす笑いを浮かべながら「私は国の安全基準を信じています」。

この日の様子はめずらしくテレビが取材して、ニュースとして流しました。この出会いや報道がきっかけとなって、今まで地道に反対してきた市民グループが「もっと大きく輪を広げよう」と呼応してきました。富山、福井からも力強い手がさしのべられ、集まった署名は四か月あまりで十万をこえ

ました。ここで気になったことは、地元石川の署名が少なく一割にも満たないということでした。

けれどもこの署名も県知事は代理に受け取らせ、その日は大勢の私服刑事と機動隊のもののお出迎え。怒った一人を逮捕するというさわぎに発展してしまつたのです。翌日の地元紙は当局のネライどおり、この逮捕劇だけをクローズアップして報道しました。反対する人たちは過激でこわい人たちだよという宣伝にうまく利用される一コマでした。

この署名は結果的に電力会社や県当局にたいしたインパクトをも与えないで幕をおろしましたが、この時の出合いが各地にいくつもの市民サークルを作り出して、それぞれ地元根をおろしてゆく役割を果たしていきました。

けれども原発建設の工事は着々と進み、今では四十パーセントができて二年後の試運転をめざしています。この六月の末に、原発の町（志賀町）の町長がガンで死亡しました。これに伴う選挙は数日後告示され、反原発をかかげて地元寺の住職、海恵（かいえ）氏が保守の二人と戦いました。しかし、その結果はさんざんで有効得票数の2割をとるのがやっとなという結末でした。

地縁血縁がっちり固まつたこの町の人々に、原発工事関係に伴う利権が加わって、命を守る訴えは、浸透していかないので。原発の危険を訴えるピラを私が手渡そうとする

手を引っこめたり、今さらどうなるものでもないでしょうと投げやりにつぶやく人が多くいます。現金収入の乏しい過疎の町にとつて、「明日の命より、今日の食いぶち」を選んでしまうのです。この現実には日本列島総リゾート化が進む辺境の町に共通している悲しい現実なのでしょう。

幸いなことにこの選挙の中から、若い町民の新しい芽生えが生まれてきました。「二十六日考」という月に一度の集まりに若い人も加わり、熱っぽく希望を語りはじめました。この人たちの姿を見ていると、私もなぜか元気が出てくるのです。

発

言

## ふるさと創生資金のてんまつ

——ふるさとは誰のもの?——

芦谷 美鈴

先日、洋服ダンスを整理していると、数えるほどしか袖を通していない服が何着もあることに気付いた。私は、着るのを忘れるほどの衣装持ちではないのである。一方、色褪せるほど着て、ポロポロになっている服もある。値段に関係ないことに気付く。前者の新品ごとの服は、他人からいただいた物。他人からのプレゼントだから、あれこれ工夫をして、着ようと試みるが、今いちピンとこない。高価そうだから、何度も挑戦してみるが、どう工夫して着ても「私らしくない」。他人からいただいた物、他人にあげるわけにもいかず、また、洋服ダンス行き。ところが、後者のポロ一連隊は、「あの時、欲しくてたまらなかつたけれど、お金がなくてな

かなか買えず、三回目に行つてやっと買った服だわ。あの店のあのマネキンが着ていた服」「あの店のバーゲンで汗だくになって、他の客ととりっこになった服だわ」等々、買った時の様子を目に浮かべるほどの品々。そんなふうに服を整理しながら、鳥取県の発行している「ふるさとづくり事例集39の一億円物語」を読んでピンとこなかつたわけがピン!!

一九八九年度「ふるさとづくり一億円」事業の鳥取県内市町村事業決定までのプロセス、決定事業概要等が冊子にまとめられている。突然、降つてわいた一億円、各市町村の慌て方が分かる。急拠審議会を作つたり、町民にアンケートを取つたり……。なにしろ、欲しいと言つたわけでもないお金を

いただけるんだもの、ごもつともです。

事例を紹介すると、我が用瀬町、一億円をどう使うか——住民アンケートや職員提案により、「私が町長だったらこれだ」の多数の意見やアイデアを参考に、議会や総合計画審議会等で内容を検討した結果、町が従来より地域振興の核として取り組んできた流しびなに関連した整備を、一層推進すること、町の活性化を図るべく、「流しびなの里整備事業」と銘打って取り組む。「流しびなの里整備事業」は、「観光物産センター建設」「修景整備」「駐車場整備」の事業。今回、計画する事業の経費は、ふるさと創生一億円をベースとして、総額三億円程度を必要とし、一九九二年三月の流しびなをめどに完成を予定。ちなみに、各市町村は、「人づくり・まちづくり」「青少年の森・市民交流の森建設用地購入」「緑と文化のまちづくり推進協議会設置・フォーラム・コンサート・漫画展・芸術祭」「屋外彫刻ロード整備」「人材育成事業」「国庁の館建設事業」「温泉基礎調査・ポーリング」「文化財整備」「総合公園整備事業」等々似たようなもの。一応ソフト面も考慮はしたものの、やはり、整備事業・〇〇館建設のハード面が目立つ。

例えば、図書館一つ建設するにも、十年位前から、住民の「図書館が欲しい欲しい」の欲求があり、住民会議ができ、行政側に交渉し、要求し、建てる、そんな図書館運動（私な

んか、十年前位から、一つの図書館建設に、身銭を切って先進地の図書館を見学に行き、それらを設計した人や、館長を呼んで講演してもらい、こんな本を入れて欲しいのリストを作り、そりやもう大変なこと）と、要求の声もない所へポツと「図書館建てるぞ」の号令でできる図書館とじゃ、中身も愛着も違う。それこそ最初の服の話と一緒にやない？

第一、軍事費がアップし、福祉が削られ、消費税の怒りのさ中、遊んでいる金があるみたいに一億円バラまかれたって、それらの怒りを押えるあめ玉にしかとれない私は、屈折しているのかな？

この冊子に目を通し痛感したこと。各審議会の写真が沢山掲載されているが、まあ、女の顔の見えないこと。世の中女が半分いて、この県にも半分いたんじゃないか？ 女の排除される審議会の審議で決定した内容等、一見どんな名案でも、きつと落とし穴があるに違いない。世の中半分は女、半分は女達が使うのだから、絶対女の視点が欠けていることの問題点が後ででてくると思う。

それは、男社会が築いてきた、今の日本の現状を見ても明らかだ。合成洗剤で河川を汚し、山をきりきざみ、農薬を空からふりまき、原発は今日にも事故をおこすかもしれない。

そんな危険と隣り合わせの世の中はもうごめん。女たちよ、静かでもいいからノンと言い行動をおこそう!!

発

言

## ふるさと創生資金のてんまつ

姉帯美和子

### ■罪滅ぼしか、一億円

『ふるさと創生資金のてんまつ』というタイトルに、しばらく呆然としてしまった。竹下元首相が一億円を花咲か爺さんのごとく全自治体にばらまいた、ということは知っていたけれど、じゃあ自分が住んでいる札幌はと考えると、何に使うのか全く知らなかったし、ろくに関心も持っていなかったというのが実態だったからだ。

そもそも、ふるさととは何だろう。広辞苑によると、①古くなり荒れ果てた土地。昔、都などのあった土地。②自分が生まれた土地。③かつて住んだことのある土地。また、なじみの深い土地、とある。

国策に翻弄され、炭鉱の閉山や離農、国鉄の分割民営化などでふるさとを離れることを余儀なくされた人々や、どんどん過疎化が進む町や村を見ていると、竹下サンは自分たちの悪政によってさびれ荒れ果ててしまったふるさとに罪滅しのもりで一億円を配ったわけか、と変に納得してしまふ。

しかし、一方で地域を崩壊させ、その一方でふるさとを建

て直せというのは、何と矛盾した話だろう。しかも、それらに使われるのは、すべてみんなの税金なのだ。

### ■一億円消化のための事業

創建一二〇年余、一六七万都市にまで巨大化した札幌は、なんと北海道の人口の約四分の一が集中している。国民健康保険料の赤字、一人当たりの老人医療費、老人ホーム数、老人病院数、それらすべてが日本一という札幌には、病気になるってお年寄りが全道各地から入院や入所のために訪れ、長年暮らしたまちから住民票が移される。また、ふるさとを離れることを余儀なくされた人々が、仕事を求めて北海道の「首都」札幌にやって来る。学生時代からふるさとを離れ、そのまま札幌や本州に住み着いてしまった人の何と多いことか。札幌市がこの一億円を何に使うのか、知っている人はまずいない。少なくともわれわれ一般市民は全く知らなかった。市役所の職員で自治研究に関わっている知人に聞いたら、「確か、北方デザイン賞の基金じゃなかったかなあ」という。全くの初耳。「一度、『広報さっぽろ』に載った気がするけ

ど」ともいう。月に一度ポストに投げ込まれる広報には、パラ目を通してはいるんだけど、やっぱりきちんと読まなくちゃなあ、と後悔、後悔。

札幌市の場合、一九九一年度に初めて開催する「札幌国際デザイン賞」の運営費として一億円を積み立てた、そうだ。こんなイベントについても、だれも知らない。北海道がまとめた資料によると、この事業の概略は「世界北方のデザイン振興、市民ライフ（市民生活と言わないところがおかしい）の質的向上、デザイン産業の振興に寄与することを狙いとしており、優秀作品はまちづくりに反映させる」とある。

国際都市SAPPROをめざす札幌市は、国際という言葉にめっぼう弱い。このイベントも、国際という冠をつけただけの思いつきイベントと言われても仕方がないだろうと思う。きつと派手に宣伝をして、それなりに大きなレセプションなどが行われるのだろう。広告代理店や一部企業を喜ばせるだけに終わりそうな気がして、どうも納得がいかない。

しかし、この苦しまぎれのアイデアは札幌だけではない。だいたいにおいて、一億円くらいの金をばらまくのに用途を限定するのがまずいと思うのだ。だから、どこを見ても同じような事業になってしまっている。とても裕福とは言えない自治体財政でありながら、思うように使えない金、と言うのはどう考えてもナンセンスだ。

北海道の場合、一九九〇年三月三十一日現在でも、二二市町村のうち、六市町村が未確定となっている。確定した自治体でも、人材育成事業のための基金や、公園などの整備と、どこも似たり寄ったりである。

### ■そろそろ自治について考えようよ

北海道では、地域が元気になる試みが結構行われている。道内の二四の村が集まって開かれる『北海道むらこん』。過疎化や後継者不足に悩んでいた村が「心の過疎を吹き飛ばせ」を合言葉にネットワークし、断然元気になっている。

来年は統一地方選挙。札幌では今、二〇年続いた保守市政が刷新されようという時に、保守系の助役出の後継者に社会党までが相乗りしそうな気配だ。身近なはずの市政が市民には伝わらず、市町候補も密室で決められようとしているのだ。「よくあることさ」とシラケてみるのは簡単だけど、そこを変えていかないといくら市民運動をしたってまちを変えていけるはずはない。そんな思いで、私たちは『そろそろ地方自治を考える市民フォーラム』を始めた。自分のまちが今どうなっているのか、自分のまちをどんなふうにしたいか、みんなで考えていこうよというのが趣旨である。

もしかしたら、北海道むらこんやこのフォーラムこそ、あふるさと創生資金の使い道にふさわしいのかもしれない。ああ、あの〇・一％でいいから、欲しいなあ。

発

言

## 市民のエネルギーを引き出す

### — 行動するたかまつ女性会議 —

岡内 須美子

今、高松には最後の大プロジェクト、高松港頭地区再開発計画がある。瀬戸大橋の開通によって廃止となった宇高連絡船の港を埋め立て、駅前一带(約40ha)を再開発しようというものである。これまで運輸省・香川県・高松市・JRなど関係機関がいろいろなゾーンに区分し近代的な施設を配置する青写真を描いてきた。

このような計画に対して生活する者として、高松の将来を左右するこの地域に何を求め、どうあって欲しいか考えている女性のグループがある。

六月の最終土曜日の午後、彼女たちの手による市民アンケートをもとにした報告会が市役所の会議室で開催された。主催は「たかまつ女性会議OG会」の有志メンバーのグループである。

「たかまつ女性会議」は五年前、生活者の視点から、のぞましいまちづくりについて、研究・討議する機関として市民生活課内に設置された。

二十代と七十代と幅広い年齢層、そして主婦・会社員・教師・ジャーナリストなど多種多様な女性たち四十人によって構成されており、固定化をさけるため毎年メンバーの半数が交代する。

また普通の審議会と違って、いわゆるたき台がなく、それぞれのメンバーがグループにわかれて自由に議論し、調査・研究し、その結果を市長に報告することになっている。報酬はない。この活動に対して行政側は可能な範囲で情報を提供し援助している。

時には対立するようなこともあるが、より正確な情報によって相互理解を深めることにより、行政と市民の緊張関係を保ち、効率、形式主義の弊害を少しでも排除しようという狙いである。

まちづくりをテーマに選んだグループは、公衆トイレ、派出所の現状に驚き、写真を提示して市長にアピールした。地下通路に対してはごく自然に車を地下に望んだ。そして駐輪

場に関しては対策のイタチごっこに対し、自転車と人や商店街との共存方法を検討した。この一連の活動がOG会の中ですすめられた結果として今回の再開発もテーマとなった。

さらに、普通の市民が都市計画に関する情報を得るのは着工後のため、意見が言えないこともわかったのである。今度こそ早い時期に可能な限り自分たちの考えを発言し、少しでも取り入れてもらいたいとの願いがあった。

とはいえ、これまで都市問題をテーマとしたイベントを開くのは特別なグループが利害の關係する市民であったので、「なぜそういうことをするのか?」「何か利害でもあるのか?」とずい分聞かれたそう。逆に毎日生活する市民が自分たちのまちの将来像を考えることがなぜ日常的でないと映るのか、この反応がおもしろかったともいう。

結果としては、集まった人々は、自分たちの意見を出す場があることに一応の評価をしたり、この結果がどう反映されるのか問いただしたり、女性のパワーに驚くなど、反響は大きかった。

意見を集約すれば、欲しい施設はたくさんあるが、どうしても必要なものはあまりなく、縁とやすらぎの場となつてしまふよう。やっつてよかったけれど、また重い課題を背負ってしまったと感じたようだった。

OG会の活動は他にもあり、ひとつづくり部会ではメンバー

の一人でもある地方演劇家をバックアップしてミュージカルを上演する計画が進んでいる。これらの活動は完全に組織化してしまわないうところがミソで、テーマによって集団が自由に活動できるよう申し合わせている。もっとも理想通りにはいかずに多少のトラブルもあったが、試行錯誤はまだ続くであろう。

私は創設以来三年間を行政側からの担当者として、その後二年間を部外者として関わっているわけだが、いろいろなメンバーとの刺激的出会いと、まちづくりへの動機づけができたあと、OGとしてどのように行動できるかが問われているところであろう。

女性会議でどんな成果があったか、これらの報告書(第一期〜第IV期)によって何が変わったかとずい分執拗に聞かれたものだが、あえて言うならば、市民(特に女性)に元気が出てきたことをあげたい。関心を持つ人が増えたことによりいろいろな分野での女性の出席が多くなったように思う。

また、何か変わる可能性があるということが市民に伝わった点でも効果は大きかったのではないかと思っている。

彼女たちにエールを送りつつ、あせることはないが、あきらめずに活動を続けて欲しいと願っている。そして同じことを自分自身にも言い聞かせている。

(高松市職員)

# 学習の主人公たち

## 下町に自然を 見つける

東京都江戸川区立新田小学校

2年3組の子どもたち

自然の中でいっぱい遊んだり、見つけてきた自然を友達に紹介したりする授業をずっと続けています。子供たちのノートには、その記録が、絵と共に生き生きと表現されています。時には親をも巻き込み、夢中にさせます。子供たちは自然を見つけ、私はそれを生活につなげていきます。子供たちの鋭い感覚にはっとさせられることが多く、彼らは私自身の感性をも育ててくれ、季節の変化を敏感に感じとる子ども、大人（親、教師）のつながりがいつのまにかできています。（紙面の都合で絵は省略しました）

鈴木まき子

りみたいなあじがしました。

伸之助

◆一月二十二日 きのおおかあさんとおとうとふたりでおつかいに行くときとりは二わいました。にしかさいのえきのちかくで。よしくんのようにふくのいろとおんなじでした。

央

◆二月一日 きょう、さいとうくんたちと、五年生と、かまくらをつくりました。ぼくは、とちゅうでさむくておへやにかいってきてしまった、ようふくがぬれたから、ストーブでかわかしました。

浩

◆二月二十日（こうていのみかんの木の）みかんをにのみたら（みのにおいをかいてみたら）いいにおいでした。たべたかったです。

康修

◆一月六日 五ごうとうのまえのはじつこのへんでハコベをみつけました。ちいさくてしろい花もさいっていました。あした七草がゆにいられてもらいます。とってきたものは、あとナズナと、ハハコグサと、コオニタビラコ。

あとの三つも七草がゆにいられてもらいます。

優介

◆一月八日 いとことごはんをたべに行くとき、いっかくじゅうをみました。ひだりのほしはこいぬぎ、みぎがわがおっおんぎ、したがおっおいぬぎ。

彰

◆一月十六日 きょう、がっこうのかえりみち、あやちゃんとうきをたべてみたら、こお

美那子

◆二月二十一日 きょうこうていのジャングルジムのところのつじのところ、どくだみのたねをみつけました。さいしよは、なにかなおもって、せんせいにきくと、どくだみのたねがいいました。ぼくはさいしよは、虫のうんだやつかなとおもいました。たくやくんとよしくんとぼくで見つけまし



た。へんなひげみたいなのがはえていました。せんせい「これで一ばんのり」っていいました。ぼくがみた中でいっかいもみたことがありません。

詩織

◆三月六日 ほりえこうえんで、のびるをみつめました。あじがちよつとからくつておいしかったです。たべるところがしろくつて、くきがむらさきのもあつたし、ふつうのしろつとかわつたところがないかたしかめたら、くろくちやいろのやつがありました。(おひげみたいだねっこのことね)せんせいが四月になったら、たまねぎみたいなのができていいました。四月がたのしみです。

美香

◆三月六日 (下ングリからそだてたコナラの)はっぱが、ぜんぶとれちゃったから、かれちゃったのかなとおもったら、もりひとくんがきゆうしよくのじかんに、「上のほうにめがでてきているよ」つてゆつておしえてくれたから、かれないんだとおもってあんしんしました。ふゆだからはっぱがとれていたたけなんですわ。

◆三月十一日 日よう日に、つくしを、一ごうとうのうらのところできつぱいとりました。つくしの花がさいているのがありました。つくしの花からこながでてきました。いろはしろでした。

盛仁

◆四月九日 わたしは、のびるをいっぱいとりました。とつていたら、いっぱいとりすぎて、ミミズが出てきました。のびるのみどりのかわもたべました。そしたら、すごいからかったです。

惠理

◆四月九日 のびるをみつけたら、たべるところがねっこのほうだったんだね。わたしはわかりませんでした。みかちゃんは、「みそにつければおいしいよ」つていったよ。

麻美

◆四月十八日 つつじをとつてみつをすつてみたら、とてもあまくておいしかったです。みつは、つつじのうしろのほうからです。

光広

◆四月二十三日 きょう、がくどうのちかくにこぶしのきをみつめました。(花の)まんなかにぶつづつしたのがありました。くさの

穂高

においでした。(はなみずきと後でわかる) 麻紀

◆五月七日 ほりえこうえんの、にせあかしあに、ヒヨドリがいました。一年生のときに、かたのところにフンをつけたヒヨドリでした。でも、かわいかったです。

裕二

◆五月七日 ほりえこうえんにきました。それでくろいみのやつがはなになっていました。それはにせあかしあでした。ふくろに水を入れて、しろつめくさを入れて、にせあかしあをいれて、オランダミミナグサを入れました。つめたくてきもちよかったです。

悌久

◆五月十四日 ちがやをみつめました。おひげにしてあそびました。

亜希

◆五月十六日 かたつむりのいろをしているとりを学校でみつめました。なんかこわい目をしていました。十ぶんぐらいたつたらうごいて、むこうの木にとんでいきました。くちばしがとんがってませんでした。

綾子

◆五月十六日 あげはのようちゆうを見てみたら、大きくなっていました。まえよりも

ごく大きくなっていました。あしもありました。うちもいっぱいありました。

裕加理

◆五月二十二日 きよ年十月に、かきのたねをいえのまえにうえました。ずつとめが出なかったのに、きゅうにめが出てはつばがさいて、二十センチぐらいにのびました。

昇

◆六月六日 てんとうむしの、ようちゅうと、さなぎと、てんとうむしをみつめました。

伸也

◆六月六日 きょう学校ののうえんのうしろのほうで、ひるがおをみつめました。花のにおいをかんでみたらいいにおいがしました。

理美

◆六月六日 へびいちごもいろいろなものをつめました。たべてみたら少しすっぱかったです。でもおいしかったです。あと、つゆくさもみしました。まだそめていません。へらおおばこもみつめました。にわけきしょうのみがみどりでした。やまもももみつけたけど、ゆうすけくんにあげました。

由喜

◆六月七日 きょう、がっこうのあじさいのきのちかくで、(とりのすのなかに、ヒヨド

リ) ひなににているのがいました。とかげ(かなへび)をたべていました。

正志

◆六月十一日 きょう、あのさなぎ(から)あげはがうまれました。さいとうくんがこんちゅうの本を見たら、くるあげはでした。よしきくんの手がすきでした。いきなりさいとうくんの手がすきになりました。先生がきて、みんなでえをかきました。

晴美

◆六月十四日 きょう、こなすびをみつめました。たねみたいのをみつめました。花はこしかさいていませんでした。

早千

◆六月二十八日 ひびのくんとさちで、すずめがのようちゅうをみつめました。やまももの木の下にいました。おしりのちよつと上のところに、つのみたいなのがありました。三十日にびんを見てみたら、ようちゅうがうごきませんでした。(七月に羽化した。)

亜樹

◆六月二十九日 学どろの近くのどろろのほうで、いいにおいのする花を見つけた。

その花はつるつるしていました。すごいにおいにおいでした。おかあさんにきいたら「くち

なしだよ」って言ってました。ア리가花にくっついていました。

純一

◆七月十八日 バッタに草をあげてみたら、バッタがすこし草をたべたの。のこりのはっぱのさがぎざぎざのあとがあった。口からてんとうむしみたいにくさいへんなものを出した。くさいにおいだった。バッタの先のつのをさわってみた。もういつかいさわったら、ぴんとまつすぐになった。おもしろいバッタだった。

さやか

◆七月十八日 左こん川にいかまきりとばつたをみつめました。バッタがちやいろとかみどりのもいました。かまきりがバッタをたべるかとしんはいです。

弥生

◆七月十八日 きょう、こおろぎをみつめました。おすでした。ちよつかく(しよつかく)がきれていました。そこからおれんじのちがでていました。かわいそうだったから、学校のツツジのところにがしました。

# 学習の主人公たち

## 郷土料理って

### おもしろい？

—兵庫県立明石高校

一年の女生徒たち

明石は瀬戸内の新鮮なおいしい魚に恵まれている。こ  
こでも若者の魚離れ現象が。そこで、明石市内の各校で  
は、明石お魚普及協会の協力で、魚料理講習会を毎年行  
っている。講習会に来て下さった魚屋さんの紹介で、干  
しだこを作って40年という常本さんに、干しだこの実演  
をしていただいた。おもしろい郷土料理の旅・明石編の  
メニューは、たこめし、きゅうりのごまみそあえ、みそ  
汁、生徒の感想を紹介します。

西本和代

◆はじめ先生が「明石の郷土料理をつくる」  
と言ったとき、たこめしをつくるのかと思っ  
た。たこめしなんて明石に住んでこの方十二  
年、みたことも聞いたこともなかった。たこ  
の頭にご飯をつめるのだとウワサもなかった。  
いかめしはそうらしい。「そんなん食べるん  
いやし」と思っていたら、案外普通でよかつ  
た。調理実習ではじめてたこめしを見た

◆「明日、学校でたこ飯作るねん」といつた  
ら、「さすが明石の高校！」といわれた（う  
ちは神戸市です）。学校で作ったらとてもお  
いしくてきて、おかわりをしている人もい  
た。家にもって帰って食べてもらうと、みん  
な上手にできていると喜んで喜んで食べてく  
れた。あの無気味な干しダコがこんなにおい

しくなるなんてすごい！

◆今回の調理実習は超和風ですね。おみそ汁  
は苦手で、今まで具を食べるぐらいだったけ  
ど、今回は香りがよくて全部たいらげてしま  
いました。手作りの明高みそは、なかなか  
いいなと思いました。豆腐も弾力があって、  
なんだかともうれしかったです。

◆炊飯器じゃなくて、文化鍋でご飯を炊いた  
けど、おいしく炊けた。ふだん家であまり包  
丁を使わないので、きゅうりは上手に切れな  
かった。ごまみそあえは酢の物よりもおいし  
かった。豆腐がしっかりしていておいしいな  
と思っていたら、国産無農薬大豆、天然にが  
り使用の豆腐だった。

◆最初、郷土料理ってなんだろうと思いまし  
た。このごろは、明石は、たこめしやら、い  
かなごということがわかりました。いかなご  
などは、ある時期には毎日のように食卓に並  
びます。郷土料理というのは、なんとなく古  
くさいというか、貧乏みたいな感じだったけ  
ど、いつも食事の時、身近にあって、それ  
で、かかせない料理だと思います。

◆私の通っていた中学校は給食だったので  
が、月に一度、郷土料理の日というのがあ  
ります。変わった野菜の煮つけとかたくさん

食べました。その時は、日本料理よりも洋食に移りしてたんですけど、今思えば、郷土料理もいいですね。もっと味わうべきだったなあ。ちなみに、うちはおばあちゃんがいる作ってくれます。ゆずみそとかつくしの煮たのとか。

◆明石の魚の棚においてあるたこ。まだ、生きていて、いれ物からはみ出して動いているたこを見て、すごい気もち悪いと思いました。特に足のぶつぶつとか。こんなのを最初に食べた人は、すごいなあと思っていました。調理実習で使う干しだこを手にした時は、すめめみたいなのにおいがし、火にあぶるともつといいにおいがしました。たこめしなんて、むずかしくて時間内にでき上がるのかなと思っていたけれど、作ってみるとわりと簡単に出来ました。中に入っているたこはなかなか歯ごたえがあつておいしかったです。今、日本はどんどん食べるものが洋風化していると授業で習ったし、それについてのビデオも見ました（NHK特集「外国人からみた日本食」）。そして体にいいものは、あつさりした日本食で、それが今、見直されていると、健康のためにも、毎日食べている日本料理を大切にしながら、いろんな地方のめず

しい郷土料理を作つて食べてみるのもいいなあと思いました。干しだこがもうちよつと安かつたらしいのになあとも思いました。

◆私たちの住んでいる明石の名物はたいとたこ。魚の棚に行けばあたり前のように並んでいるということ。先日の実習はたこめしを作つた。私ははじめ、あのにゅつとした生のままの足をゆでてから入れるのだと思つていたが違つたのがっかりした。干物のたこは生のたこより、はるかに目方が軽かつた。先生が高いたこなので班に1/4ずつ配つたがあんまりけちつてほしくなかつた。やつぱりもつとたこが入つていた方がおいしいのではと思う。

◆欲をいうと、もつとたくさんたこが入つていれればいいのになあと思ひました。たこめしといつてもたこだけじゃ少しさみしいので、今回のように、ごぼう、人参、こんにやくを入れば栄養のバランスもとれていいと思ひました。授業の時、新聞の切りぬきを読んだけど、こんな郷土料理はもつと他の地方の人たちにも食べてもらいたいし、「明石にはこんな料理があるねんで」と自慢したくなりました。それに干しだこも、明石の近くが作つていないから、なんかとても私たちが

得をしているように思つてしまいました。でもそのたこも、だんだん少なくなつてきて、今では一枚五百円〜二千円もする位だからとても残念です。

◆たこめしはたこが高かつたわりには、ふつうのたきこみご飯とかわからないような気がしました。でも、シーフード風味のたきこみご飯はめずらしいので、まあいいかつて気分です。明石の郷土料理をやつたから今度は兵庫県の中で違う所のをやつてみたい気がします。（芦屋の方とか……金持ちは何を食べているのかetc）

◆先日作つたたこ飯、家にもつて帰ると家族に喜ばれました。郷土料理をもつと知つていきたいと思つた。洋食の方がみえがいいので、調理実習という肉類などを想像していたのですが、先生のいつていた日本食のよさなどは、母が私にいつも言うことと一緒にびつくりしました。無農薬の野菜を共同購入したり、添加物のあるものを使わない、冷凍食品を買わないというのは私が小さい頃からそうやっています。この前、「明石のとれたてのえびよ」と母が買ってきたのは小さなパックで四百五十円も。いかに外国産や冷凍の工

しかったです。

◆家の近所でもよく干しだこを作っていて、その近くは猫がうじやうじやる。何で!?

◆そして、実習前におつてみると、特になにをおいをしていた。猫がよつてくるくらいだから味は……と思いつつ食べると思つたとおり「Very good!」たこめしの実習は前からすごく楽しみにしていたから、ずつと母に言つてた。実習の日家を出る前に母は作り方覚えてきてよといつた。やっぱり明石人。ふつうの実習の時は何も言わなかつたけど、たこめしになると興味をもつようだ。タッパーに入れて家に持つて帰ると、みんなおいしいといつていた。新鮮なたこから作つたから、こんなにも評判がいいんだと思つた。明石は海も近いし、新鮮でおいしい魚が手に入るまちなのですごく好きです。

◆私の家は引越しばかりしているので、引越し先の郷土料理を知る前にまた次の所に引越してしまふこともありました。……明石にきて六月ごろだったと思うけど、学校帰りに物干しざおにかわかした、授業でみたみたいになべチャーとなつたやつが六、七コ干してあるのを初めてみた時は、なんだかおかしくて笑いそうになつた。

◆家でも郷土料理とか作つてもらつたことがなかつた。よく駅弁とかで郷土料理を売っているけど、明石では、たこめしを売っているのかなと思つて、学校帰りにさがしてみると駅の近くでたこめしを見つけた。

◆郷土料理つて何かなつてワクワクさせたのに、たこめしだったので、なんだ、ただのごはんか、ばかにしていた。でも、つくつてみると、たのしくなつてきて、文句をいつたわりにおいしかった。調理実習つて今の時代、おかしを作ることはかり目にやきついで、実際のところ、郷土料理や和風の料理は、すごくしようもないと思つていた。でも、こういうご飯類などをやってくれる所、あまりないと思つた。明石の料理で私ができるもの、たこめしつて大きな声でいえるようにしたいと思う、家で工夫して、おいしさやみた目を考えて作り、将来明石を離れてもたこめしをおいしく作りたいと思つた。

◆最初干しだこを見た時は驚いた。たこの本当の姿を初めて見たような気がした。スーパーでは足だけとかしか売つてないので、あなたこを見た時は、やけにリアルだった。たこつていうのは、なんとなく間がぬけているような気がする。たこめしはなつかしい味とい

う感じだった。

◆祖父が地元なので、毎年、たこを干して、母がたこめしを作つてくれる。でも自分で作つたのははじめてだった。今まで郷土料理だといふ風感じて食べたことはなかつた、たこがそんなに高いものだと知らなかつた。これからは、よくかみしめて食べたいと思う。

◆たこめしを作つてみて、私の好物でもある柿の葉ずしを思い出した。母の里である和歌山へ行くとき毎日のように作つてもらうので、これも郷土料理であることを忘れていた。海から離れた山の中で、新鮮な魚を食べるのはむずかしい。だからくさりにくい柿の葉ずしを作りだしたのだろう。明石で干しだこが作られたのは、よくとれすぎた時、くさらないようにと作られたそう。こうなると、たこめしが作りだされたのも柿の葉ずしも理由は同じ。自分の土地でよくとれるものを利用して考え出されたのだ。郷土料理はすばらしいものだと思う。それは、その土地の人々の思いが深く伝わってくるからでもあると思う。

◆先生がよく自然のものを使おうとしているのが、とてもすごいと思つています。(よもぎもち、桜もち、野草茶、梅シロップ、etc)一番よかつたのは、たこめしでした。

ビデオの中でも「外国人からみた日本食」は本当に考えさせられました。もともとご飯大好き日本食の私ですが、改めて日本食のバランスのよさを思い知りました。たくさん出まわっているスナック菓子や清涼飲料水にまけていたするめやコンブが、少しふえだして、なんだかうれしい私です。

◆家庭科でいろいろ習って「へー」とうなずくばかりだった。たこめしなんて全く知らなかった。やっぱりその土地土地でいろんな料理があるんだな、おもしろいなって思った。最近のヤングたちは、あまりご飯物を食べずに、洋食ばかり食べているので、ぜひぜひ郷土料理を食べてほしいな。先生がこの前、学校給食にもとり入れられてるよって聞いていた。いろんな地方の郷土料理を食べたいノ駅弁なんてけっこうそれっぽいですよ。改めて郷土料理のよさを家庭科の学習を通して知った。「Love 郷土料理」という気分です。

◆私は郷土料理に関していえば、たこなら漁師をたたえたい。漁師の人々の苦勞がわかってこそ、おいしいものを初めておいしいと言えると思う。何気なく食べていたら何もわかんないと思う。

◆明石駅の近くでたこやきを食べている時

は、ここに住んでよかったと思います。このおいしいたこが、わたしたちが年をとっても食べられるように、もっとたこを海を大事にしてほしいです。

◆サークルか何かで、お年寄りと若い人で郷土料理を作ったりするのいいと思います。お年寄りから郷土料理に関するエピソードなどが聞けて、より関心が深まるし、お年寄りの話し相手にもなるので、ぜひ実現してほしいと思います。

#### へたご飯の作り方

材料 干しだこ 中位(100〜120グラム)  
一枚 米五カップ 水五・五カップ コンブ適量  
つけ汁(しょう油五〇cc 酒五〇cc みりん大さじ一)

#### 作り方

①米は炊く三〇分前に洗い、水を切っておく。  
②干しだこは火であぶり、熱いうちにハサミで〇・五cm幅くらいに切り、つけ汁に漬けておく。

③炊飯器に①と水、②とコンブを入れ、よくかき混ぜて炊く。

④十分に蒸してから、よくかき混ぜ、茶碗に盛りつける。(紅しょうが、木の芽、青じそ、のり等、季節や好みにより天盛りにしてもよい)  
\*学校では、ひと皿に干しだこを二分の一枚、ごぼう、人参、こんにゃくの干切り各一〇〇グラムを加え、塩を少々補い、たきこみ御飯風にした。

この他、淡路島のちよぼ汁、明石のたいめし、茎わかめのつくだ煮など地元の料理の紹介。父母や祖父母の郷土料理の紹介など話題が楽しく広がった。

90・6・5付朝日新聞「修学旅行の中学生京料理にそっぽをむき、ハンバーガー買いこむ」の記事を生徒と読んだ。その時の反応から、不安を覚えながらの実習だが、予想外の好評。ただ、We8・9月号「学習の主人公たち」の「小学生と消費者教育」の小学校での食品添加物の実践から、小学生でも、こんなに社会に目を向けられるのかと驚きつつ我が身を恥じた。まず、ここから出発しよう。明石の海や水、輸入水産物のこと、地域のお年寄りとの交流など、いろんな課題と可能性を生徒が示してくれた。

'90We夏季フォーラム、「アジア・子ども・人権」に参加し、いろんな示唆をいただいた。「自分にとっかかりのいい所から入っている」「地球規模で考え、地域で行動せよ」のことばのように、郷土食からはじまって、社会や世界にも目をむける授業を組んでいきたいな。アドバイスをお願いします。

## 『生命とくらしをいとおしむ』

—家庭科新時代へのまなざし—

半田たつ子著 (国土社 1339円)

石山 常子

今回は出版が二年前と少し古いが、学校教育の教科の一つである家庭科を真剣にとりあげた表記の本を紹介することとした。「家庭科なんて、ウン十年前に習っただけで、今は何も関係ない」と思われる方もおられるかも知れないが、そう決めてしまう前に読んでいただきたい。それだけの面白さを持った内容である。

まず、若い人の結婚観・家庭観をレポートし、著者の家庭の状況・共働きの歴史を紹介し、臨教審の「家庭」の定義、現在起きている「浮浪者」の殺傷事件や小説「積木くずし」にみられるような実際の事例をあげ、生きていくことの充足感の不足や、命をいとおしむことの希薄さを示す。

科学技術の進歩は、人間に百歳以上の寿命と食糧の増産、公害の減少、家事や工場労働はロボットがとってかわり、と良い面ばかりが強調されてきたが、果してそうだろうか。家電製品や家事の省力化には科学技術の進歩は役立ってきたが、反面、人間の喪失・自然や環境の破壊・人間の寿命がのびた結果、高齢化が孤老や家族間の複雑な問題を生んでいる。科学技術の進歩で人工授精が可能になってきたが、雑菌が入り命をおとす患者。技術が高度になればなる程、一般の人たちとはかわりがなくなってきた、議論の圏外に置かれてしまう。そうならないように科学技術を生活と地続きのところに位置づけることが教育の課題である

と思うと著者は述べている。

現在の家庭科の授業に関する生徒達の批判で多いものは、どうして女子だけが学習させられるのか、家事・裁縫が主な内容だが、婦人雑誌をみればわかる内容ばかりで、特に学校で勉強しなくてはならないという理由はない。従って進学試験とは関係ないので軽視されている等あげられる。そこで著者は、こういう状態になった経過を明治時代からたどり、静岡県立御殿場高校をはじめいろいろな小・中・高校での家庭科の授業風景や内容を紹介する。

最後に、家庭科とは子ども達が「生活の主権者」として「男女ともに生活的自立ができる」ように知識と技術を習得させる学科とするのがよいと著者はしめくくっている。著者の体験や生いたちをまじえ、適当にやわらかく、適当に表や資料を添えている構成の仕方は一般向きの書き方としてうまい。それにしても高校二年生の結婚観・家庭像の作文に、「—私と夫は新婚の時、『新婚さんいらっしやい』と、花の新婚コンピューター作戦」と、『アイラブ爆笑クリニック』に出演する。数年後、『二時のワイドショー』のスタジオ参加。私は神田川料理道場の先生と一緒に「大根ちゃんも、ちよつとの工夫でこのうまさ」というのが夢」というのがあった。興味深いと思いませんか？

(日本女子大学図書館友の会 会報'90・7 No.65より転載)

# 新しい 家庭科を 創るために

小学校では

## 子どもたちの食事の周辺 (一)

一日の生活の流れの中で

夕食を中心に

東京都世田谷区立弦巻小学校

村田 汀子

### 一、子どもたちの食卓

子どもたちの食事の周辺が気にかかりはじめてもう何年になるだろうか。

「面倒なことは余りしたくない」という子どもたちが多くなったように思う。取りかかってみると、仕事の持つ面白さや気づいていくのだが……。このような子どもたちを生みだしている背景に、家庭の食卓周辺の事情もあるのではないかと気にかかる。豊富な食料に囲まれながら偏った食事内容という栄養の問題に加えて、性格形成、生活行動など子どもを人間として発達させていくことをむしろ妨げているものがそこにあるように感じられる。

社会の変化につれての家庭の機能・家族のありようの変化は急激で著しい。食生活について言えば、「家庭の台所・食卓」へ入り込んできた「社会の側の台所・食卓」に明け渡している「仕事」や「情景」——インスタント食品・調理済み食品などの利用、外食、個食・孤食、家族の会話や団欒の減少などは、家庭の機能を低下させ、家族のつながりを弱めているのではないか。

子どもたちの「生活時間」の中で家族との団欒の時間と場をどこに見い出せばよいのか、指導のてがかりを求めて一日の生活の流れを調査した時（一九八七年世田谷五校）、団欒以前のこととして浮かび上がってきたのがこの問題である。

「夕食の準備・夕食・後片付け」の生活行動を「夕食の準備







図1-1 男 家族4人(父, 母, 弟)

夕食	日曜日	月曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日	
準備	○ 常配り	○ 常配り	○ 常配り	○ 常配り	○ ごはんつぎ	○ 常配り	
献立	ごはん 木魚うどん 青あめ つけもの	ごはん 味噌汁(わかめ、豆腐) 新巻炒め	ごはん 味噌汁(わかめ、豆腐) とろろ キャベツのせんざり	焼大豆 味噌汁(わかめ)	ごはん 味噌汁 きんぎょ	ごはん 味噌汁(豆腐、揚げ) 天ぷら お好み焼き(ばら餅)	ごはん 味噌汁(豆腐、えのめ) きんぎょ
備と	○	父欠	父欠	父欠	父欠	○	
片付け	○ おさらさげ	○ おさらさげ	○ おさらさげ	○ おさらさげ	○ おさらさげ	○ おさらさげ	

図1-2 女 家族4人(父, 母, 妹)

夕食	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
準備	X 読書	X 読書	X 読書	X 読ていた	X 読書	X 読ていた
献立	魚いものころがし いなりすし マッシュ わかめの味噌汁 ピスタチオ	ごはん きんぎょ 豆腐	味噌汁 味噌汁(大根)	チャーハン 味噌汁(あさり)	味噌汁 味噌汁(わかめ)	ごはん 味噌汁(豆腐、大根) コロッケ 青魚
備と	父欠	父欠	父欠		一人	父母欠
片付け	X 読書	X 読書	X 読書	X 読書	X 読書	X テレビ

環境ではなくなっていると憂えている。

## 2 夕食についての親の考え方(B校)

◎ 家族が揃う努力をされていますか

努力している 50%

特に努力していない 50%

◎ 夕食の準備や片付けの決まった仕事を持たせていますか

○ 受け持たせている 29%

・ 家族の一員としての自覚と思いやりを育てる

・ 役に立っているという気持ちを持たせたい

・ 家事のやりかたを覚えて欲しい

○ 受け持たせていない 26%

・ つい自分でやってしまう

・ 自分でやったほうが疲れず、面倒がない

・ 小さい時の躰を今反省している、動かない

・ 男の子だから

・ まだ必要を感じていない

○ 出来るだけやらせている 45%

・ 自分の気持ちに余裕があるとき手伝って貰う

・ 子どもの手が空いている時は手伝ってくれる

・ 決めた仕事しかしないので決めない

・ 台所が狭いため

・具合の悪い時などしてくれるので、毎日強いては頼まない

◎家族が揃って食事をしたり、家族が協力して食事の支度をする事についてどう思われますか

ア 大切なことだと思います。私の家の場合母親だけが女性で、父親と男三人の兄弟ですが、準備と後かたづけも食事の流れの一部だと思いますし、それに家族で参加することは当然と私は考えています。男性は余りそう考えたくはないようです。

イ 食事の時間が人間共通時間の唯一のものであり(風呂と)、家族のコミュニケーションの最大のものであると思います。

食事のしたくも母親一人に任せておくのではなく、伝承とすることもあるので、どう思うかではなく当然のことであるとと思っています。小六の子供が留守でも小二の子供が手伝うし二人いれば二人共が手伝うのです。

ウ とても食事をする事は、家族ならずとも、人間同士の絆を深める最良の方法の一つだと思いますから、家族そろっての食事は常に心がけられていいことだと思います。

個食・孤食は子供にさせたくありませんね。

子供が小さいときには、手伝ってもらおうとかえって時間がかかって大変でしたが、小学校中学校ともなると実際の

大きな助けとなり、本人に対しても非常に大切な家庭教育の一つであると思います。

父親も何らかの形で協力することにより、男女を問わず、自然な形で助け合うことを身につけていってほしいと思います。

エ 各自の帰宅後食事をして、別に仕方がないことだと思います。

夫婦と子供一人〜二人位は可能だと思いますが、多人数の時は無理です。

それより一人部屋で食わず、居間で皆がテレビをみたり本を読んだりしている所で各々夕食を食べることは、それで又、会話は自然に生まれますので、そろって食事はあまりこだわりません。

### 3 アンケート調査の結果についての反応

この父母向けのアンケート調査の結果の数値(五校の平均)と当校の全意見についての父母の感想は次のようであった。

●「ウ」の意見が大賛成です。全てが凝縮されていると思います。

中に女の子だから……とか専業主婦だから……と云々あるのは、近ごろ新聞などでも討論されておりますが、その

ような考えの方がいらっしやるのがまだまだ残念です。全体に手伝いや外食等について努力したり考えていらっしやる方が多く、安心いたしました。

もともと手伝いを、(へ心から、自分から)するよう指導して欲しいと思います。中で「男の子だから受け持たせていない」という方にはあきれてしまいました。

●パートタイマーとして仕事をやるようになって二年余り、現在一番頭のいたい問題が、夕食の時間です。一日おきの仕事ですが、仕事のある日の帰宅時間はかなり遅くなるので空腹と疲労を抱えてどんなに急いで夕食の支度をして、子供二人はもうすでに殆ど満腹状態。

学校から帰宅した時が空腹のピークらしく、誰も止めないのを良いことに手当たり次第食べて空腹を満たすというようなサイクルが続き、仕事を続けるかどうか迷うこともありました。しかし幸いなことに、仕事にでない日は定刻の夕食時間が守られるので、それでカバーしています。

子どもたちにも少し食事の手伝いに参加させ、協力して作り上げていく楽しさを味わうということが、我が家のこれからの課題といえます。

●模索する気持ちはみんな持っているが、現実はなかなか厳しいということでしょうか。飾らぬ本音の部分に、現代の社会の縮図たる家庭の姿が浮彫りになっているようです。

これからは、(エ)のような割り切り方も案外大事かもしれないと感じました。

●うちは、子供と私と二人きり。そして私の仕事も極めて時間が不規則なので、夕食を作らないどころか家にいないこともずいぶんあります。そういう時は、友達の家で食べたり、近所のレストランや定食屋さんに行き行って食べたり、出前を取ったりしています。又、渋谷や六本木あたりまで出てこさせて、いっしょに食べて帰ったりすることもあります。また家に帰ってきていても、する仕事があつて食事を作る時間がなかったり、疲れて作る気がなくなつて出前を取ったり食べに行ったりすることもよくある。

家で食事を作って食べるの方がめづらしく、そういう時は何か特別行事みたいなくらいです。だから子供はすごく喜ぶし、私も母親としての役割を果たしているという満足と安心感がありとても落ちつけます。

こういう状態が決していいことだとは思っていませんが、いっしょに食事をするだけだが、あるいはそれがすごく大切な親子のつながりを築くものだとは思いません。

朝も子供は、自分で起きて朝食を一人で食べて出て行き私はいつも寝ています。又早朝から仕事で、子供が起きたらもう私は出かけているということも少なくありません。何日も顔をあわさないこともあります。私が子供が寝てか

ら帰ってきたりしますので。  
親子の絆とかコミュニケーションは、もっともっと根本的な深いところにあると思います。

子どもたちの夕食の食卓の周辺がその後変わっていったかどうかを追うことはあえてしなかった。しかし、アンケート調査の持つ意義について感動をもって考えさせられ、これか

らの家庭科の学習の一つのあり方を示唆するものともなった。  
さて、これらの調査から浮彫りにされた子どもたちの現実に対して、私たちは何ができるのか、どんな学習を組み立てればいいのか難しい課題にとりくむことになった。

(以下次号)

## ひと

〈広がる運動  
広がる人の輪〉の

中村英之さん



「広がる運動、広がる人の輪」の中村英之さん。つい先頃、古川文月さんと「同居宣言」をしたばかりの彼に、Weの夏季フォーラムの『夫婦別姓・婚外子差別をめぐって』分科会の打ち合わせの空き時間にインタビュー。  
61年生まれ。神戸出身。末っ子として「溺愛」されて育つ。小・中学校の頃はおとなしくて、いじめられがち。高校時代以降、そこ

から逃れたくて、何事にも当事者にならないようにしたこと、物事を斜に構えてみるようになってしまった、と。

学生時代近代史を専攻していたことから、就職後すぐに、天皇制反対の運動へ。家父長制への嫌悪があったのは、父親が、問答無用の怖い存在であり、母親を「差別」していたのを見ていたからかもしれない、と。

女性差別を含め、差別の問題には関心があったが、そのことと、現実の対個人との関係において対等な関係を結べるということは全く別のことであることに気づかされたのは、吉武輝子の『愛すれど孤独』を読んでから。その本を手渡してくれ、幾度もその違いをつきつけ、問いかけてくれた古川さんの紹介で

「夫婦別姓」の運動に出会う。

We兵庫の会との出会いは、三、四年前。天皇制の運動の「男の論理」に飽きてきての参加だったが、最初は、物事がなかなか決まらない進行にイライラ。が、そのうち、慣れてくると、自分がいかに男の論理に染まっていたかを思い知るようになる。『Weの会』の人たちや、『結婚改姓を考える会』の人たちの、やさしき、柔軟さにふれるなかで、「こうあらねばならない」と自らを縛り、他人の多様性も認めようとしなかった自分が、だんだんにほぐれていくのを感じつつ今に至る。『夫婦別姓』の運動は、自分にとって、どれだけ他人の多様な価値観を認めることができるかの試金石、と。

(稲邑)

# 新しい 家庭科を 創るために

高等学校では

## 定時制の生徒と地域

●新潟県立栃尾高等学校（定時制）

小野塚 サチ子

はじめに

私は現在、新潟県立栃尾高等学校定時制に勤務しています。三部制の定時制高校で、一・二部は昼間、三部は夜間です。昼間部は一週間交替で午前と午後四時間づつ授業をうけます。繊維関係の企業に就職した生徒のために、その勤務形態に合わせたシステムですが、現在は繊維関係に就職している生徒も少なくなりました。

生徒数は全校で一六〇名、教職員数二三名という小さい学校です。生徒も教員も一・二・三部に分かれており、私のいる二部は教師七名生徒数五七名です。昼間定時制ということ

で最近では通学範囲も拡大し、全日制高校から再入学の生徒や転入の生徒も多く、問題を抱える者も増加しています。

本校は四年前より「家庭一般」四単位必修の共学を一・二年生で履修しています。一年生はなかなか落ちつかず、短時間集中させるのに一苦労しています。被服・食物・保育選択も学年によりますが、男子の履修が多いところもあります。現在三年生の被服選択は男子五名女子二名が履修し、刺子や編物をしながら自分の仕事のこと親のこと将来のこと趣味のことなど話し、楽しくやっています。男子のほうにうまい子がいいます。

実技を伴う教科は、手を動かしものを創り出せる喜びもあり、熱心にはしていますが、家庭一般となるとこちらの授業内

容の精選不足と力量不足で、なかなか「生徒も深まった」という授業展開ができません。

そんななかで「地域をよみがえらせる」のテーマを聞き、少し考えていることがあったので安請合いました。その結果、締切間近になり苦しんでいます。

## 生徒にとって「地域とは」

栃尾市は人口三万人。繊維産業中心の町です。「水とみどり」と繊維の町」がキャッチフレーズの豊かな環境にあります。全日制高校が二校あり、卒業後地元を離れる生徒も多いようです。地元の企業もあり、人手不足なのだが、待遇や賃金に差があるのか市外に出て行く者も多いようです。市でも「若者を引きつける魅力のある町に」と体育施設や文化施設の充実を図っていますが、なかなか効は奏していません。

定時制の生徒のほうが現職を継続したり市内に再就職したりで定着する率は高いようです。彼らに聞いてみても、「卒業後は地元に残りたい」と考える者が大多数です。理由を聞くと、「都会は人が多くていやだ」「知らない人ばかりのところはおもしろくない。不安だ」「一人で生活する自信がない」などといえます。

男子生徒の一番の関心である車も、都会で一人で暮らして

も持てないという気持もあるし、友人との人間関係をつくるのが苦手な者もおり、新しいところに出ていくのは不安もあるのでしょうか。卒業後、地元に残ったとしても、彼らなりに先をみて、「遊べるうちは遊ばなくて」と、遊びに車に精を出します。

そんな彼らにとって「地域」とは、将来ここに暮らす場所です。親も友人もいるし、家もある。少しハデに遊びすぎると御近所の目もある「口うるさい場所」でもあるようです。

しかし、授業の中で市や県の実情を示すデータを提示して環境・社会福祉・食糧などを話すと、集中しよく聞いてくれました。生徒にとっても「地域」は生活する場であり、くらしやすいか否かという問題は関心をもたずにはおられません。

## 「地域」を授業の中に

新潟県高等学校教職員組合では、十年前に「共学家庭一般」の指導計画や資料を作成し、授業で活用してきました。その中には地域性を柱にした取り上げ方も含まれていましたが、全体として「地域を日本や世界の問題と関連でとらえてゆこう」という視点はありませんでした（今年度からは教研で指導計画を再検討することになっています）。地域とかげ離れた生活やくらしはありません。地域で足元をみつめ、将



來の「共に生きる場」を考えるという柱が、家庭一般では大  
切になるのではないでしょうか。

地域を知り、地域ときり結び、地域をよみがえらせるとい  
う授業を力まないで行うのはむづかしい点が多くあると思  
います。その中で、豪雪地ではあるが、水はきれいで自然に恵  
まれた環境と、人情の厚いこの地で、いろんな人間が共に生  
き、支えあつて暮らすには、各自が地域をどう考え主体的に  
生活をみつめ創り出していくか。そしてこの場から日本や世  
界との関連でとらえかえし、生活の課題として生徒自身が力  
をどうつけていくかが「地域をよみがえらす」大きな力にな  
るものと思います。

これは言うのは簡単ですが、地縁血縁の強い狭い地域で生  
徒自身が将来展望をもつて行動に移すのは、至難なことだと  
思います。

さしあたり授業の中で取り上げる予定のものです。(一学期  
の授業に入れようと計画していたのですが、そこまで進まず  
今回は特活の中で話しました。二学期に続きを授業に入れま  
す)。

家庭一般「環境と生活」で、「農を語る」をテーマに、地  
元の人を呼び一時間話を聞きました。

専業農業従事者を育成する学校を卒業され、十五年間稲作

り、養蚕、冬は出稼ぎをされて現在兼業農家にならざるをえ  
なかつた方で、「地域に深く根をおろして」生きている人で  
す。農業に誇りをもち、トツトツとした語り口に生徒も引き  
つけられました。当日「コシヒカリ」の苗と成長した株、ま  
ゆを作る直前の蚕をもつてきて下さいました。

稲や蚕の成育過程をわかりやすく話された後、稲も蚕も人  
間のために実をつけたり糸を引いたりするのはない。その  
動植物の種の保存のためである。それを人間が利用させても  
らっているにすぎない、人間も自然の中の一部分である。人  
間は自然と共存し、自然はそれを受け入れてくれている。人  
は稲の実の米を食べ、そのカスを便として体外に排出してい  
る。人間は便という汚らしいものとして嫌うが、自然の中  
では土地を肥やすものとして受け入れてくれている。自然の中  
の動植物の存在に意味のないものはない。小さいのも大き  
いのも自然の中で生きている。最近人間は、自然を超えられ  
るとひとり錯覚しているのではないか。休耕田は一年ほつと  
けば木が生える。自然はそれほど力がある。自然と共存する  
ことは、人間の都合のよいようにだけ自然環境を変えること  
ではない、というものでした。

一人の普通の農民の「自然観」や「環境」に対する思い  
に、生徒の集中ぶりは私の授業などよりずっと深いものがあ  
りました。二学期は食生活のところでもう一度来てもらおうつ

もりです。

もう一回は「共に生きる」で、「若者と地域」というところで、市内の若者の交流の場を広げようと活動しているグループの方をお願いしました。市内には若者向けの施設や設備も少なく交流の場もないと、市内在住の20代の若者のレクリエーションや交流の場を設けたり、市内の施設でチャリティの会を催し援助しているという会です。

当日は「高校生として地域での若者の場をどう考えているか」などについて、積極的に生徒のほうに質問され、意見交換の場にしたと思うておられたようです。栃尾市は「高生生の眼からみて魅力的か」「ここで生活したいか」「生活するとしたらどこをどうしたら暮らしやすいと思うか」など、生徒と年齢の差の小さい若者の普段着の問いかけに、生徒はにぎやかではあったが楽しそうに答えていました。

「労働条件をもっとよくするべきだ」「刺激がなくておもしろくない」「店が少なくて暮らしにくい」などと発言していました。来てくれた方も「自分たちの後に引きついでくれる高校生と語りたい」と精力的に話してくださったようです。

本校の全日・定時制に長く勤務しているのにもかかわらず、地域ときりむすぶ授業を提起しえなかつた私にとつても、地域で自分の場をもち生きている人の話はおもしろいもので

した。

## 今後の課題

家庭科という教科では特に、足元の生活を直視し、それを生活課題として解決する方法を考えるという問題解決学習を、もっと開かれた学校の中で、生活技術的な改善法でなく、社会的矛盾を正視しながらの問題のたて方をする必要があると思つていきます。

さて今後の課題ですが、一、授業の中のどの部分に整理し系統的に入れるのか。二、他教科との有機的つながりをどうもつか。特に暮らしや生活に関わる環境・健康・食糧・福祉などは、社会・理科・保健体育など他教科と関連のある分野です。各教科の視点から、「地域」の実態を教材化し、連携して行く方向をもたねばならないと考えています。

小規模な学校で小まわりのきくところで、他教科の人と話し合いをもち、来年度からの授業に「地域」を重点とした取り組みをして行きたいと考えています。

## ●新しい家庭科を 創るために

# 地域の教育資源を活かす

●上越教育大学

渡辺 彩子

当地新潟県上越市は何年かごとに大雪に見舞われる。

現在では道路除雪がよくされるので生活用品の入手にも不自由することはないが、秋が深まると人々は冬の準備を始める。自家製の漬物、野菜・米や燃料のまとめ買い、家の雪囲いなど、ずらっと干した大根や庭木の雪囲いは冬の風物詩で、四季のメリハリを感じる。大都市から地方に移り住んで地域という言葉に実感をもった。その原因は、これらの伝統的な生活文化、地元の人の方言、地域の規模が一市民にとつてとらえやすい範囲であること、諸施設・行楽地が身近にあり、地域に顔見知りの人が大勢住んでいるためなどである。これらが、自分で直接ふれることのできるものであることが、「市民としての私」を意識させてくれる。

### 一、地域と教育

今、司馬遼太郎の原作「翔ぶが如く」がテレビで放映されているが、それを見ると近代日本が明治維新でいかに性急に中央集権化を進めてきたかがわかる。さらに近年は、産業構造の変化により、地域の地縁社会が崩れた。今、農村社会は第二種兼業農家が多くなり、勤労者である新しい転入者も増え、都市社会と変わらない様相を呈してきたため、これらが區別せずに「地域社会」として論じられるようになった。<sup>(1)</sup>「地域」にはさまざまな概念があるが、一般には、日常生活圏の空間的範囲と、そこでの何らかのまとまりをもった社会を意味する。

なぜ、今「地域」なのか。かつての運命共同体的地域が衰退した後、公害、居住水準の劣化、犯罪など、地域の環境悪化を防ぐためには共通の利害を持つ住民が共に働きかけなければならなくなり、新しい地域社会の編成が必要となってきたのである。教育においては、次の三つの意味があると考えらる。

### ① 地域によるイメージの形成とパーソナリティ

それぞれの地域にはそれぞれのイメージがあるのはなぜか。加藤秀俊<sup>(2)</sup>は地域と生活の問題を地域のイメージの点から取りあげているが、これは地域の教育性にも関わることである。

藤岡喜愛<sup>(3)</sup>によれば、人間はイメージ・タンクであり、これまでに生活し経験したことを心身の両面で、無意識にイメージとして自己の中に蓄え、それによって想像力を働かせ、現在の行動をしている。イメージには、地理的・空間的イメージ、世界の内容についてのイメージ、社会と人間関係のイメージ、仕事のイメージ、自己に関するイメージ、歴史性・伝記性のイメージ、イメージのイメージがある。社会と人間関係のイメージは世界の内容の一部であるが、まわりにいる人たちのヒトとなり、社会の仕組み、制度、規則、習慣、価値観など、日常最も意識される部分のイメージである。

従って、身近な地域での生活経験は、地域に共通のパーソナリティ特性や生活意識、地域の人間関係や組織に基づいたパーソナリティなどを形成し、人の成長に教育的役割を果たすといえる。

### ② 地域の教育資源

かつて地域は生活全般にわたって個人に拘束力をもった反面、地域が個人を「われわれの子供」として、教育し訓練する力をもっていた。しかし、地域の衰退により、学校が教育を一手に引き受ける形となった。家庭も教育の場としての基盤がもろくなり、学校はいじめ・登校拒否等々の問題を抱え、改めて地域の教育力の回復が必要といわれるようになった。先ず、学校が地域を教育資源として活用し、地域ぐるみで教育をすることが打開の方法であろう。

地域の教育資源は、(ア)教材をつくるための資源 (イ)地域のさまざまな人的資源 (ウ)教育や学習のための場、の三つのカテゴリーに分けられる。

### ③ リアリティのある教育と地域への愛着育成

教材としての地域は、学習に生活基盤としてのリアリティをもたせることができ、生活全体と関連する生き方にかかわる学習となる可能性がある。情報化社会が進み、子供に直接

の生活体験が少なくなるにつれて、生きた教材はますます意味をもつであろう。

地球環境問題が危機感をもってクローズアップされている。現代は一つの地域、一つの国で起こったことが世界中に影響を及ぼす時代である。地球規模で想像力を働かせなければならぬが、その想像力も、身近な地域への愛着、地域ゆい所が失われていく危機感や惜しむ気持といった自己内にあるイメージから生まれてくるのではないか。環境問題は、今、社会の責任だけでなく、個人の生活意識にも大きく関わるものとなっている。

## 二、家庭科教育と地域

家庭科にとってなぜ「地域」かという論議はこれまでになされてきたし、教育実践もある。しかし「地域」が、家庭科教育に根づいているとはいえない。一つの例として、積雪期の生活に関する内容を家庭科でどのくらい取り上げているかという調査では、少しでも取りあげているのは小学校四・パーセント、中学校二・五パーセント、高校四二・パーセントで、特に中学校では家庭科以外の教科でも少ないことから、中学校教育は画一的な傾向を持っていると思われる。

### ①個人と地域社会の接点

家庭科は人間の生活を対象としており、生活は、人と自然

的・社会的環境との相互作用から成る。生活を何のために行うかは個人の意思決定に基くべきであるが、その資料としての情報の収集・選択に於いては、行動が周囲に及ぼす影響についても考えなくてはならない。日常生活で個人は、家族や近隣社会との関係を円滑にする行動を選択する積み重ねで、ある決まった生活意識、地域住民としての規範をもつようになる。家庭科教育では、この生活意識がどのようなものであるか、どうしてできてきたか等について考えさせる必要がある。そして、個人の自主性を尊重しながら、地域住民として住みやすい環境をつくるためのルールや、協力態勢を築き民主的な関係をつくる能力の育成が、これからますます重要になると考える。

### ②地域の教材化のしかた

家庭科の内容は生活を対象にしているので、当然地域と密接に関係しているように考えられるが、実際の授業では、そのような実感は少ないのではないか。

現実の生活は、家庭の事情や地域性、地域格差などを背負って生きてさまざまである。それなのに、衣食住生活をバラバラに、予め定まった内容のものを、その部分だけ切りとって教材にもつてくるから、現実味のないものになって、家庭科学習への関心を失うのではないか。

食事が栄養摂取のためだけでなく、着装が保健衛生

のためだけでないように、本来、生活行為は複合的な機能をもっている。複雑な行為の意味や、新たに説明された行為のしくみ等を取りあげることが、子供にとっても知的好奇心を抱き、現実的で実践と結びつけやすいと思われる。

地域教材を考える一つの方法は、生活をなるべく現実に即した、生の形で取り出す。例えば、「日常着の製作」という題材の時に、日常着の製作にすぐさまもっていくのではなく、日常着の「本当の」実態にふれ、何を着ているのか、どのように着ているか、着方についてどんな関心をもっているのか等について取りあげる。日頃、Tシャツとジーンズ、あるいはトレーナーでほとんどを過ごしている中学生にとつては、学校で製作する日常着は生活と程遠いものとなりかねない。日常着に関心が高まってくれば、生徒は製作も楽しみになり、その学習の本来の目的もわからう。教師も生徒の技術的困難を考慮しながらも、生徒の希望を生かしたものを作るように努めるであろう。このように現実に即した教材は、散漫になったり、基礎・基本からずれていくように見えるかもしれない。しかし、基礎・基本は何か、家庭科学習の中心になるものは何か、については生徒が学習している姿からも考えなくてはならない。

地域の教材化のもう一つの方法は、地域の生活課題を取り上げることである。食生活や住生活、特に後者は地域性が大きい。

きい。地域性に基く共通の課題の特色や原理、問題点、問題解決の方法などについて学習する。これも生きた教材を見せやすく、強い学習の動機づけになるであろう。

地域の教材化が計られていない理由として、前記の調査では(1)特に教えることを考えなかった。(2)時間が足りない(3)教科書にない(4)家庭科以外で教えられる(5)学習指導要領にないなどがあげられた。地域を教材化するには、教師自身が地域の生活課題に敏感でなければならぬ。また、学習内容をその中から把握できる力が必要である。

### 三、地域の教材化の例

上越の場合を例に、積雪地であり、農家を含む地方小都市での題材例をあげてみる。アンケート調査やヒアリング、書物、生活経験などから考えた。(一)内は主な内容である。

#### ①自然環境に関連するもの

- 1 生活歳時記(一年間の季節毎の家庭の仕事。それらの段取りや方法、費用、労力など。実際に行ってみる)
- 2 冬の衣服やスキーウェアの選び方(体の代謝機能と衣服による調節のしかた。衣服材料の性質、新素材の商品テスト結果の見方)

- 3 雪に強い住居(耐雪住宅、融雪方法、除雪のしかた、住宅まわりの安全、雪囲いにもみるひものしぼり方)

- 4 冬の過ごし方（冬の健康管理―衣食住に関して、冬の生活時間と時間の使い方）
- 5 夏を涼しく（多湿地域の住居、染色やマクラメ編みによるのれん作り）

②地域の伝統文化に関連するもの

- 1 漬物づくりと食品貯蔵方法（食塩の働き、雪による低温貯蔵、住居内の貯蔵場所）
- 2 町屋の住まい方（町屋の歴史、構造、家族と近隣の生活）
- 3 雁木、明治の洋館保存と町の景観（美しい町、特色ある町）
- 4 郷土料理（行事や産物との関係、のっぺ汁、ちまき）
- 5 冬を暖かく（キルティングのベスト・ちゃんちゃんこ）
- 6 便利な風呂敷（結び方、意匠、染色、ししゅう）

③現在の生活の変化に影響を与えるもの

- 1 レンタルビデオ（子供の遊び今昔、レンタルのしくみ）
- 2 食材・ファーストフード・ファミリレストラン（食生活の外部化と影響）
- 3 通信販売（既製服の選び方、カタログの見方、通信販売のしくみ）
- 4 スーパーマーケット（価格の構成、地域の産物の流通）
- 5 安全な食品（野菜づくり、味噌づくりを通して）
- 6 上越の水資源（水の用途、水質汚染）
- 7 家族構成の変化、老人世帯の増加（家族とは、家族周期）

地域を教材化するには、地域の教育資源のリストアップ

と、資料の収集・作成、そして現地に行ったり足を使うことが必要となる。大変だが、学校全体で作ったり、仲間と協力して、教材の元を地域のどこかにストックしたいものである。

教材だけでなく、指導方法も、地域の人を訪ねたり招いたり、人材を活用し、見学・実地調査、聞きとり調査など、場としての地域を活用して学習活動を多様化することができ

る。これまで地域教材例を考える時、伝統的文化に偏りがちになったが、若い人が興味をもてるものに構成することと、教材としての意義をよく研究する必要があることを感じた。

註

(1) 鳥越皓之「地域の構造」『地域生活の社会学』世界思想社、一九八三年

(2) 加藤秀俊「地域と生活」放送大学教材、一九八七年

(3) 藤岡喜愛「イメージと人間」日本放送出版協会一九七四年

(4) 新井郁男「学校教育と地域社会」ぎょうせい一九八四年

(5) 村山淑子「家庭科教育について」『豪雪地帯における家庭生活の実態と教育に関する総合的研究』上越教育大学生活・健康系家庭科（研究報告書）一九八八年

## 家庭科の男女共修と共学を考える会

### 京都府教委を訪問、要望書を手渡す

金森順子・菅原充子氏らが中心になって  
るみだしの会の活動は、これまでも紹介して  
きたが、京都の家庭科男女共修実現の大黒柱  
だった森幸枝氏を招いて、学習会を開いた。

森氏は「新学習指導要領が高校では四年後  
に実施されるわけだが、移行措置に関して、  
男子に家庭一般を必修させる場合は、男女共  
に体育は9単位を下らないようにせよ、と言  
っている（現在は女子7単位、男子11単位で  
その差4単位が女子の家庭一般に当てられて  
いる）。体育が9単位に縛られると、移行期  
間中、家庭一般を男女必修にするには、2単  
位しか生み出せないことになる。

しかし、文部省は、新学習指導要領実施の  
際には、男女共4単位と明言しているのだけ  
ら、現段階ではできるだけ早く、2単位であ  
っても男女共修に踏み切ることが必要」と強

調された。

そのためには、現場の努力はもちろんのこ  
とだが、学校の外から府教委、県教委に働き  
かけること。また、親の立場で、現場の教師  
に積極的に意見を述べたり、要望を出してい  
くことが大きな力になる。あらゆる機会を見  
つけて積極的な提言をしていくことが重要、  
とも話された。

参加者23名のうち、家庭科関係者は10名。  
年齢幅は20代前半から50代後半まで、男性2  
名。活発なフリーストーキングの中で、4単位  
共修家庭科でどんなことができる、どんなこ  
とをしたいか、については左の通りだった。

- ・ 受験体制に風穴をあける
- ・ 男性の視点、女性の視点をぶつつけあう
- ・ 受験に對抗してでなく、教師の生きざまで  
向かう

- ・ 日常的なことが地球規模の問題と結びつ  
ていることを知る

- ・ 技術を通して生活文化を受けつぎ、大きな  
視野がもてるように

- ・ 生活者としての視野を広げる

- ・ 家庭の中から社会を見ていく

- ・ 環境問題を子供のときから考えさせる

- ・ 性の問題

- ・ 保健生理的な面からの学習

- ・ 水汚染の問題

このあと、金森・菅原・圓尾豊子の三氏は  
要望書を持って京都府教委学校教育課を訪問  
し「人間として生きていく上で、家庭科を男  
女共に学んでほしいという素朴な願いをもつ  
て、母親の立場から勉強会を重ねています」  
と話を切り出した。学校教育課長は会議中で  
主管が応待したが「奥さんたち」の主旨は、  
私共も同じように願っていること。要望書と  
ともに課長に伝えます」とのこと。満足はで  
きないが、はじめての府教委訪問に、30分位  
時間をとってもらえ、まずはよかつたと思  
をもった。その後、昨年誕生した「女性政策  
課」を訪れ、要望書のコピーを渡した。要望  
書の全文は左記の通り。



## 要 望 書

私たちは、一九九四年より実施される高校家庭科男女共修を歓迎し、学校教育の中で、男女が共に生活の自立と両性の対等な関係を学ぶために、家庭科こそがその学びの場となることを心よりねがう市民のグループです。

最近、新聞の報道等によりますと、新学習要領実施のための移行期間に今年より入ったと聞きます。京都府は、家庭科男女共修については、すでに府立高校で十数年の実績があ

り、全国的にも先進県であることをうれしく思っていますが、現在女子四単位必修のところを二単位男女共修と聞きます。

四年後には四単位男女共修になることを考えるなら、移行期間に入った今年から残り二単位の男女共修を是非実施されるよう要望いたします。

又、聞くところによりますと、近年I類の男女共修をやめた府立高校が増え、新設校では女子のみの家庭科が多いということですがこれは時代に逆行し、受験学力偏重をますま

す促すものであり、看過することはできません。少なくとも今までの実践を否定するような指導はされませんように、切に要望いたします。

一九九〇年六月二八日

家庭科の共修と共学を考える会

金森順子 圓尾豊子 菅原充子

以上、同会つうしんNo.8から紹介。各地でこのような動きが生まれれば、歴史の歯車は私たちの願う方向に回るだろう。(半田)

## '90夏フォーラムを終えて

かつて私は、学校行事の実行委員になることは大好きで、その際、いかにしてイベントに自分のアイデアを君臨させるかに情熱を燃やし、目の下にクマができるほど裏方として苦勞をし、当日は、いかにも疲れた様子を印象づけ、より多くのねぎらいの言葉をうけて終わる、というようなことをやった事があります。ここに、一参加者として楽しむ「私」はいません。よく考えてみれば、疲れるだけだし、ねぎらってくれる方だってあいさつ程度であつたり、かえって恐縮させてしまつたりで、素直に場を共有できにくくなります。

私はちかごろ、この教訓を生かすのが非常に上手になりました(自画自賛のごじらと呼んで下さい)。私の場合、未熟者の特権で、自分の手に余ることを1から10までテーブルに投げ出し、できる方に分けただけだったのでした。コレに関しては△△さん、コレに強いのは○○さん、コレは私でもできる、と分担しながらも、誰もが当日を楽しみにし、どこにどんな参加をしようか思いをふくらませられるムードがありました。本番は、参加者の持ち味発揮にある程度お任せしておけば自然なフォーラムが出来上がるんだから…と。そしたらホントに素敵に2泊3日になりました。

よくよく見ていけば、大変な作業に苦しんだ場面もあったし、子ども担当のように、びったりとそこにいないとダメな係もありました。けれど、ご本人たちは、笑顔で「良かったワ」と言ってくれたので感動しました!!

参加者がつくるWeのフォーラムです。今回は、会員の多い地域、少ない地域にかかわらず開催地を決めることのできる可能性への、大きなヒントを残した'90夏季フォーラムだったと思います。

どうもありがとうございましたノ また来年♡  
(若竹稜子)

# 荒野のバラ

## 地域再生の試み

(その1)

—「足もとを掘れ！」  
そこに泉が湧く！」

●元熊本市立中学校社会科教諭

田中裕一

### 1 故郷の喪失

今は昔、文部省唱歌には、日本の今は喪われた原風景が歌われていた。そこには当時の自然と人生があった。洗濯物が干してある長屋を描くだけが「生活画」ではないし、自然の中に深く錘をおろした生活を抜きに花鳥風月を詠じた訳でもない。

高野辰之が作詞・岡野貞一が作曲した「朧月夜」の、「菜の花畑に入日薄れ 見渡す山の端霞深し 春風そよ吹く空を見れば 夕月かかりてにおい淡し」の風景は、蕪村が「菜の花や月は東に日は西に」と詠んださながらの風景の延長上に

ある。だが、「里わの火影」も「森の色」も「蛙のなくね」も「かねの音」も、菜の花畑とともに抹殺されてしまった。しかし、どうして歴史的な田園的生活空間が経済的に非効率で、工業的・都市型生活空間のみが「現実的」なのであるのか。

ゴルフ場やリゾート開発がニーズをみたすというのは、巨大資本やそれと癒着した政策の「内需拡大」幻想の欺瞞である。テトラポットで固めた「ウォーターフロント」、「横断道路」や東京湾岸の「ダンプ街道」、醜怪な丹下ビル（都庁、琵琶湖湾岸のビルを見よ！）や、対抗する黒川ビル（大阪府庁）がどうして健康で、「白波の騒ぐ磯辺の松原に 煙たなびく苦屋」の、古今調「浦の苦屋の秋の夕暮」にも通じる自然海岸や海の健康な労働を抹殺することが「現代的」なのか。「夏は来ぬ」の「卯の花（ウツギ）」の匂う垣根にほととぎす」が来鳴く頃や、「あふち（IIセンダン） 散る川べの宿」なども、作者佐々木信綱好みの万葉集のアレンジそのものの原風景だが、その多くは喪失してしまった。

「さら さるる びる ぼる どぶる ぼん ぼちゃん」と豊かに表現された児童詩を、川の流れは「さらさらでなくてはならぬ」と国語教科書から抹殺した野暮な教科書調査官がいた。それなのに「さらさら流」れる「春の小川」も、「岸

のすみれやレンゲの花」とともに、この高野・岡野コンビの歌った渋谷区代々木五丁目を流れた宇田川支流河骨川こうぼねの現在は暗渠となり、小田急線参宮橋駅と代々木八幡駅間の歌碑を残すのみとなった。

浮世絵の「五十三次」や「江戸百景」を現在地点で確かめて見るとよい。そこに現代の日本人が何を得、何を失ったのか、その損益が克明に浮かび上がるだろう。「ふるさと」を歌わせた熊本の先生が、小学生にきいた、『うさぎおいし』ってどんなこと、「瞬とまどった生徒が答えた、「うさぎの肉がおいしいんだよ」。今度は教師がとまどった。「じゃ『かの山』は、今度はたくさんの生徒が言った。「ヤブ蚊がいっぱい」。兎狩りの話を「昔はねえ」と始めると、一斉に「殺すの？ かわりそう」と手のつけようのない「ふるさと」だった。だが、それでいて、現代の自然や人間の組織的な殺し方はどうだろう。

白秋は「からたちのそばで泣いたよ みんなみんなやさしかったよ」と歌った。だがカラタチなんぞとつくの昔に消えた。「枳かたちのうまら（ハイバラ、トゲ）刈りそけ倉たてむ」と万葉にあるから、昔から開発を妨げる植物だったかもしれない。だが今、白秋の世界はどう変わったか。「ブロッコリの蔭で泣いたよ みんなみんな冷たかったよ」といじめの構図さえほの見える。「ふるさととは遠きにありて思ふもの」どこ

ろか、故郷喪失がわれわれの地域再生への闘いの起点とさえなるのであろう。

## 2 地域の転落

「ふるさと創生」は政府でも言い、市町村に一億円の大盤ぶるまいもする。だがその本家であった竹下元首相の出身地の島根では、中海淡水化計画が執拗な住民運動によって阻まれたのである。和歌山県田辺湾の天神崎における最も先見的なナショナル・トラスト運動も、三島・沼津・清水二市一町をコンビナートから守る住民運動も、臼杵市風成区の海を守る女たちの運動も、極めて厳しくはあったが、画期的な地域を守る闘いであった。皮肉なことに、今日「地域開発」や「リゾート開発」と闘うことが、地域の自然と、人間の生活と権利を保障することになるという教訓が、こういった先進的な予防闘争によって証明されている。だが、それとても新しい状況での絶えざる対応を要求されているのである。

一方、そのような地域保全の危機意識や運動のない所で、一度破壊された地域の既存公害の深刻さは計り知れないものがある。水俣病がその象徴であろうが、そこで失われたものは、人間の生命・幸福・生活・共同体・人間性のすべてにわたる尊厳の破壊であって、現在の日本の行政・経済のもと

で、その全面的再生は至難のわざと言えよう。

われわれは、ここでまず地域概念を定立する必要がある。地域についての行政・経済・産業・文化・住民を、その草の根から民主的に形成することなしに、地域再生は不可能であろう。

今は亡き上原専祿先生が、「地域の地域性を抹殺して、それを一つの地方にしてしま」う、「地域というものを、中央から見た一地方に転落させようとしている」と、現在の日本を鋭く批判された処から私たちは出発しなければならぬように思う（上原専祿著作集第十四卷三二二頁参照）。

ひと昔前は「中央直結」でないと予算もつかないと言い、今「ふるさと創生」を言い「住民直結」を言う地方議員たちの無定見にほんろうされ、文部官僚や地方教育行政の中の偏狭な「民族の歴史と伝統」なるナショナルリズムが蘇えると、それは「郷土教育」となっていく。

そこでは、地域の歴史的な自然や文化や共同体を破壊しているものが何者であるかには目もくれず、それと闘う人々を黙殺し、中央直結の「先人の偉業」か、せいぜいの「お国自慢」が語られ、またしても異端排除の「郷土愛」に帰すのである。

私は、地域が破壊される前に、破壊されてはならない地域

の自然や社会や共同体の価値の認識が必要と思う。その価値観の形成こそ、地域の学校教育や社会教育の重大な使命なのであって、この思想の形成なしに、住民自治の保障はありえないように思う。地域住民の価値観形成が行われない所では、「金」と「権力」と「快適さ」が地域を売り渡し、完膚なきまでに地域を破壊しつくすことになるろう。

大分新産都の二期工事の時、住民がその阻止にすわりこんだ。住友化学のスマチオン工程爆発事故による住民緊急避難や、新日鉄等による大気汚染から三佐・家島地区の強制移転を味わった住民の必死の自衛であった。

この住民たちに対峙して、約三百名近くの大学生たちが現れた。彼らは地元の三大学の学生であり、企業側からやとわられていた。住民に、正直にも彼らは答えたのである。「金をもらってアルバイトとわり切った」「そっちが金を出すならやとわれてもいい」と。彼らは受験勉強を学んだろうが、地域住民の守るべき価値観、この世には金銭にかえ難いものがあることを、まるで学んでいなかったのである。破壊されたといっても、再生が必要といっても、その「何が」や「何を」が見えていないから、地域の守るべきものが何もないのである。テストあって教育なし、管理あって教育なし、とはこのような状態なのである。

### 3 「足もとを掘れ！」

そこに泉が湧く！」

さて、では今私たちに何ができるのか、地域再生の前に、地域の価値の発見が必要だし、他地域に学ぶことも必要だし、そのプロセスでの自分の生活や行動の見直しや変革が必要だろう。かくして私たちが取り組んだのは、地域の環境教育としての教材の発掘と構成であった。この地域の環境教育プランは、決して中央に従属する地方のローカルティックでも、お国自慢でも「郷土教育」でもなく、地域自民自治のための環境教育であり、それは世界―日本―地域を結ぶ課題化意識を軸とするものであった。

一九七二年、国連世界環境会議がストックホルムで開催され、それを受けた形で、トビリシで環境教育会議が開かれた。その流れの一環として、一九八〇年、ヨーロッパ環境教育会議がスイスのベルンで開催された。日本から福島要一（学術会議）、本谷勲（農工大）、藤岡貞彦（一橋大）、福島達夫（福祉大）ら八名の人々が参加したのだが、私もその末席を汚す俸せに恵まれた。国連のユネッパやユネスコが後援だったのだが、この会議で私は大変大きなヒントを得たように思う。

イギリスのドラマアのアウトドアエデュケーションの提案

が、日本のいわゆる「野外教育」とかなり異質なものであり、それが当地で熱烈な支持を得ていること、ノルウェーの環境教育計画が、学校の各学年段階で整然たるカリキュラムに組まれていることに驚きの目を見張った。テーマには低学年から、通学路・四季などと始まり、土壌・水・資源からアールコール・ドラッグの類まで学年別に組まれていた。さて、そこで私たちの地域で何ができるのかを考え、実践に移してみることにした。

地域カリキュラムの作成、修学旅行の改変、民芸の学習、地域研究機関との協力、クラブ・PTA活動の再生、地域教材の整備、授業内容や方法の改変……等々、それは掘るほどに豊かな泉となっていくた。

これから、その幾つかの実際に触れていこうと思う。地域再生の妙薬は中央の施策にあるのではなく足もとにある。自然や人間の生きている地域は、まだどこにでもあるし、間にあるいもするだろう。ただそれが見えているかいらないか、が問題なのである。

「足もとを掘れ！　そこに泉が湧く！」<sup>\*</sup>

\* ニーチェ詩集『たわむれ・たくらみ・しかえし』中の「ひるまぜに」の一節、宮本憲一教授も沖縄教研の講演でこれを引用された。

# 家族と家庭科

## 占領期の家族領域——総括

酒井はるみ

GHQ/CIEの行った教育改革は、軍国主義・超国家主義を排除して、民主主義にもとづく新しい教育制度と教育内容を實現するものであった。家事・裁縫科を廃止して家庭科を新設したこと自体がこの改革の産物なのであるが、家庭科にも、科学化、民主主義化、国際化という三つの特徴が認められる。

ここでいう国際化とは、アメリカの家庭科の影響を強く受け、また一部導入して新しい家庭科が発出したことを意味している。戦前の家庭科的教科が国家主義・国粹主義で固められていたことからすると、国際化は家庭科にとって一大衝撃であり、そのことだけでも一八〇度の転換だった。

ところが、実に不思議なことだが、その後四十年の家庭科の歩みにおいて、国際的な影響を受けたことはほとんど全く

なかった。この四十年は、ひたすら国粹化、この表現が悪ければ、国内の教育実践の蓄積を通して、日本型家庭科に純化する過程だったのである。占領期の国際化は、家庭科の歴史のなかでは、類例のない特徴であった。科学化、民主主義化については、すでにみてきたところである。ここでは家庭と民主主義化について若干視点をかえてまとめておきたいと思う。

これまで、中学・高校の学習指導要領や教科書を検討してきたが、その結果、中学校レベルと高校レベルで、家族のとりえ方に質的な違いのあることがみいだされた。そして占領期を通してこの違いが解消されることはなかった、それはつぎのようにまとめられよう。

〈中学校〉47年文部省著作『家庭』では、親子四人の核家族で、団らん、むつまじさなど家族の和や、みんなで力をあわせて働くことの重要性を強調した。また父もぼくも血洗いやくつ下のつくろいをして、主婦の台所からの解放をめざし、活動的な主婦像を鮮明にしていた。しかし、家族の成員一人一人に目をむけ、男女の本質的平等をみるような家族観は認められなかった。民法改正(47年)後の49年には七冊の教科書が刊行されたが、そのうち少なくとも二冊には新時代の家族モデルである核家族に代わって直系家族が登場している。

前記『家庭』の修正増補版は、本文から「ぼく」が消え、

父は家のことはせず、母と私（女子）が家事を行うという厳密な性別分業にもどったといえる。そこでは、主婦の過重な台所仕事への配慮はなくなっている。手芸や読書をする母親は活動的女性像の後退である。これは女子家庭科への軌道修正であったといえそうだ。一方、楽しい家庭や家族の和は強調された。

ある教科書は、家庭を乗り合い船にたとえている。家族を運命共同体とみているためで、むしろ前近代的家族像に依拠したものである。他の二冊は47年『家庭』をモデルにした教科書である。例外的に民主主義や新憲法をふまえた新しい男女のあり方や家族のあり方をとらえようとしている教科書もあるが、総じて家族の和の強調が中心で、民法改正後も全く変わっていない。

このような家族観は川島武宣のいう「民衆の家族制度」を思い出させる。「家」的家族から支配・服従の関係をとり去れば、江戸時代の民衆が営んでいたような楽しい家庭になるという考え方をしているのではないかと思わせるものがある。そこにすでに近代が見落されている。結局中学校では近代家族観は提示されたことがなく、「家」的な家族関係の否定という段階にとどまったといっても過言ではあるまい。

〈高等学校〉49年刊行の最初の教科書、中川らの『家族』では、家族は時代とともに変わってきたこと、自由で本質的に

平等な独立した個人による婚姻、夫婦には性別分業はあるが身分的差別はなく、協力して生活を営む、夫婦の基礎はお互いの愛情と尊敬だととらえている。近代社会のこのような家族観を改正民法の紹介を通して示したのである。

つづく三冊の教科書のいずれも、上記のような特徴を失うことはなく、中学校の場合ほど教科書間に大きな差はなかった。だが、これらの教科書は理会を語ることが多すぎた。そこで具体的な内容を補充したものが『家庭科教育ハンドブック』であった。

中学校の家族観は近代家族の入口に立ったまま停止してしまつたのに対し、高校の家族観は、占領下の日本の社会が選択した、民主主義の家族制度をとり入れたという意味で、時代をとらえていたということになる。

当時と異なり、小・中・高と継続的に家族学習をすることが教科のシステムとなりつつある現在、その視角や内容の豊かさからみて、49年の高校「家族」課目の設置を、家族領域の原点としたという思いが筆者にはつよい。

ただし、近代社会は家族においても個人を重視するが、高校段階でも、個人をとらえることにおいて成功していたといえなかつたのである。

## 遊ぶ大学生

そのココロは



(カット 井田裕子)

## 大学生たちと歩く 小沢牧子

「いかすダイガク天国——『遊々』勉強、日本の学生」という見出しの記事が、先日の朝日新聞に載っていた。

日本の大学生が大学で授業や実験などに費やす時間はアメリカの学生の半分程度、自宅や図書館での勉強時間にいたっては四分の一以下……などなど。就職情報誌を出している学生援護会が、日米大学生の意識や生活を比較調査した資料からである(90年7月14日付)。大学の内側から、この調査結果がどう見えるかな、と考えてみた。ほんとうは当の学生たちのことを聞いてみたかったのだが、今回はあいにく夏休み中でそれが果たせない。そういえばわが家にもひとり大学

生の息子がいたなあと気づくのだが、彼も遊びやアルバイトで忙しく、なかなか会えない有様だ。私なりの見え方をつづってみよう。

日本社会のなかで、大学生の四年間という年月は、たしかに特別なもののようだ。働きすぎなくては安心できない仕事中毒社会と、そのミニチュア版としての学校競争社会。頑張りと忍耐の道場に身をさらすような長い年月のなかに、ぽっかりとお休み処が現れるという感じなのかもしれない。大学は、競争が激化してしまった日本社会において、いつのまにかそんな役割を、若者・子どもの側から付与されてあるような気がする。水泳選手が、長い潜水のあとに水面で息をつく瞬間のように。

小学一年生の親である友人が言っていた。うちの子がこんなこと言うのよ、やっぱリショックだったな、と。「おかあさん、ボクまだ学校に半年しか行ってないけど、もう疲れちゃった。これからまだずーっと六年生まで学校へ行くんでしょう? そうしてそれから中学校もあるんでしょう? その先にもずーっと学校や会社があるんでしょう? そうしてボク、ずーっとずーっと、おじいさんになるまで休めないんだよね」

一年生にして、これから生きてゆく時代を正確に看取っているせりふに、親ならずとも思わずたじろがされるものがある



るけれど、「うん、でもちよつと途中にお休みがあるかもしれないよ。大学行ったらね」とでもつい言ってやりたくなってしまう私の本音がある。

大学で教える仕事をしている者として、ほんとうはそんなことを言っただけではない。同世代の若者の  $\frac{2}{3}$  は、好むと好まざるとにかかわらず働いているのだ。私とて、学生たちに勉強してもらいたい気持はいっぱいにかかっている。ゼミの夏合宿の打ち合わせをしながら、遊び時間をたっぷり取りたい学生たちと、発表や討論の時間を少しでも増やそうとする私の思惑とがぶつかりあう。「せっかくの合宿だもの、がっちりやろうよ」という私に、「先生は欲張りすぎなんですよ」と、ゼミ運営をになう四年生の声がとんでくる。

そこで私は考える。大学へ迎りつくまでの彼らの自由のなさや忙しさ。『まあ、人間どこかでぶらぶらしなければ、やっ行ってないからなあ』と。大学生はよく遊ぶ、というけれど、その実、遊びかただつて決して上手ではない（と私は思う）。そしてそのことを彼ら自身こそよく知っているのだ。何といつても子ども時代に十分遊んできていない。仲間たちとうまく遊ぶには、体験・実績がものを言うけれど、その実力は正直のところ、まだまだ貧困だという感じを私は持つてしまう。

西ドイツに二年間ほど暮らしたことがある。息子たちが小

学生の頃だ。学校は、小・中・高校とも全部午後一時まで。教師たちもみな一時すぎには帰って、学校は空っぽになる。長い午後を、子どもたちはたっぷり、ぶらぶらし、遊び、スポーツに興じる。だから、仲間との関係づくりの實力は、時間をかけてじっくりと蓄えられる。エネルギーを溜めた状態で大学生活を始めるから、学問への好奇心や集中力は、おのずから日本の学生とは違っているのだらう。彼らの討論する力量の大きさに、私は驚かされたものだ。

冒頭に引いた調査によれば、「大学生活で最も重要なことはなにか」という問いに、日本の大学生の多くが「友人とのつきあい」48%をあげ、アメリカの学生では「講義・ゼミ・実験」50%が筆頭だったという。これもよくわかる。人間関係の作りかた持ちかたに自信がなく、そのテーマに大きく気を取られている人が多いように思う。いかにも人とのつき合いが不足しているそれまでの年月だったのだ。ぎこちなさ不自由さに圧倒されるようにして、学生生活を開始する多くの一年生たち。そして、ああ人の関係ってこんなものなんだねと納得し、ときには風格のようなものをかいま見せて大学と別れてゆく卒業生たち。勉強より先にまず埋めるべき課題があるのだな、と察しながらも、私は「ものをじっくり考え討論することも、なかなかの味なんだよ」というメッセージと仕掛けを、どこの場からでもしつこく送りつづけていく。

# 男性学への契機

## 魔男の宅急便

男という不快

諸橋泰樹

井上輝子さんは女性学の趣旨を、《女性の存在を全体として把握すること、女性にかかわるさまざまな事象を女性の眼でとらえ返すこと》と位置づけ、「女らしさ」の心理や態度、女性の生活や活動や教育されるプロセス、つまり社会が期待しその通念を女性自らが内面化してゆく性役割や、性役割ステレオタイプが女性にもたらす諸問題について解を求めることが「中心的課題」であると述べている。（「へ女の視座」をつくる）『講座女性学4―女の目で見る』。相対化による、自己の拘束状態からの解放、ということが学問の役目・動機である由をぼくは連載で述べたが、その営為をおこなう主体のありか、すなわちどこから見るのか（＝視座）ということ、営為の上のとても大切な点だ。となると、「男もすなる女

性学”は、男性の視座から女性を対象化し「女性にかかわるさまざまな事象を男性の眼でとらえること」と、ヘンなことになってしまう。これならば、これまでにごんごんやられてきたことではないか？

社会学、マスコミ研究の中でも、女性とメディアをなかたちとして、女性学の領域で仕事をすることの多いぼくが、女性から必ず訊ねられる言葉、

——どうして、男性なのに女性学をやっているのですか？  
という問いには、男性が自らの性ではない対象をどうやって主題化かつ対象化しうるのかという女性としての疑問と、（もし純粹に学問の対象として女性を扱おうなどという不純？な動機でないとしたら）この男の女性学をやる主体的・個人的動機は何なのかという、知的かつ女性に固有の重要な興味が含まれているように思え、真摯で切実な響きがある。そしてそういう時、女性問題は男性問題だから、というようなよく聞く科白セリフでは、質問者もぼくも納得できない緊張感がある。  
アメリカで女性学の男性研究者から男性学が現れ、日本でも、性科学者の渡辺恒夫さんから男性規範からの性別越境ジェンダー・クロスを提唱する男性学の必要性がいわれて久しい。女性学の成立なくしてあり得なかった男性学であるのだから当然といえども当然であるが、井上さんのひそみにならって、男性が女性を研究するのでなく、自分自身を研究すること、と置き替えれ

ば、なかなか含意のある定義となる。男性存在をまるごととらえ、「男らしさ」の心理や態度、意識の社会的文化的あるいは歴史的要請や規範、教育、発達過程、男性自らがそれらを内面化してゆくプロセス等を男性自身がとらえ、生ずる諸問題を解決すること。ことは、自明とされていた既存の人間Ⅱ男性の歴史、事象を、男性自らが対象化・相対化し、自己反省の材料として読み換えとらえ直すのだから、女性が女性自身や男性をとらえることよりも、この作業は難しいといふべきかもしれない。

——あなたはちつとも変わらないしわかっていない。家事なんか、わたしの御気嫌とりにやってくれなくていいのよ。彼女の家でこまめに働くほくに対してそう言う彼女に、そんなつもりではないんだがなと思いつつも、しかしその指摘のいくばくかの正しさも否定できない部分がある。世論は、両性の役割分業に対し流動化ないし相互乗り入れを支持する方向にあり、また実践する男性も着実に増えているが、こういった「ものわかりのよさ」は、自分にてらしてみると、実は「対」であることを逃れられない、「対」の相手から捨てられないための、半ば無意識的な防衛策なのではないか、と思える節もあるのだから仕末に悪い。

「男はフェミニストになれるか?」の感想として、男性パネリ

ストについて中野冬美さんが述べていた次のようなことが、多くの女性に共有されていることと思われ気になっている。彼女は、参加者の男たちが男性に対する視線・実践をもたず顔が体が女性やフェミニストの方に向いてしまっており、かつ《言外に「ボクは『女性問題』に積極的に関わっているんだゾ」という意識がみえみえ》なことを喝破する。そして男性パネリストたちが自らのことを、自分たちは男らしくなく、社会の「落ちこぼれ」としての地位を余儀なくされていたが、フェミニストが自分らを認めてくれた、と語る発言から《一挙に了解》する。彼らがフェミニストたちの方を向き、近づく（今春、金井淑子さんが東京の女性学研究会の研究交流会で使ったチームは、男たちのフェミニズムへの「すり寄り」であった）のは、《彼らの損なわれた自尊心を回復させる》ため、私たちがその《役割を担わされていたのだ》と《9月例会の感想》『VOICE OF WOMEN』No 106。ほくに対し、「御機嫌とり」なんかで「共業」をしなくて結構、自己変革が問われていることに全然気づいていない（「変わらない」）、と批判するのも、そういうことなのだろう。男たちはフェミニズムの方を向いてさえ、女性を道具的に、そして「慰安」のために利用するのだろうか。「味方」のような顔をする前に、ほくたちにはやるべきことがある筈だ。

# 私の朝鮮史

岡 百合子



いま日本の子どもたちに、日本の歴史上有名な人物を一人あげよと言ったら誰をあげるだろう。豊臣秀吉の名をあげる子が多いのではなからうか。

朝鮮や韓国でそのような問いを試みれば、多分、李舜臣<sup>イ・スンシン</sup>という答が多く帰ってくるだろうと思われる。朝鮮史上燦然と輝く愛国、救国の英雄の名だが、この李舜臣が、その秀吉の侵略に抗して戦った將軍であることを考えると、ほろ苦い思いと共に、朝鮮と日本の歴史の間に横たわるもろもろの葛藤を考えずにはいられない。そしてまた、秀吉のエピソードの数々は知っていても、李舜臣の名は知らない日本の子どもが多いことにも、思いを及ぼさずにはいられない。

**シン** 李舜臣はすぐれた武人であった。だが文官優位の李朝にあつて、党派に属さず上官におもねることをしな  
**ス舜** い武者骨、李舜臣は、いつも不遇な状態におかれていた。

**イ李** そこへ一五九二年、李朝二百年の太平の夢が突如破られる。秀吉の朝鮮侵略がはじまり、無防備の朝鮮は

あれよという間に都まで占領され、王は逃げだすという危機を迎えた。

このとき、李舜臣の活躍がはじまるのだ。彼は、このことあるを予想してコツコツと海軍強化に努力していた。

「亀甲船」建造もその一つである。船の上を鉄板で覆い、その上に鉄の槍をうめこんで敵がのりこめないように工夫した船だ。この船の威力と、複雑な潮の流れを巧みに利用しての李舜臣の戦術がの朝鮮水軍の大勝利をもたらした。

日本軍は補給線を断たれて苦戦におちいる。この戦術をのちに東郷平八郎が激賞し、日本海軍の戦術論にとり入れたというのは有名な話だが、歴史とは皮肉なものである。

一たんの講和は破れ、秀吉軍は再び侵略した。その間李舜臣はまた上官にねたまれ、謀られて罪人の身に落されていた。しかし水軍が潰滅状態になると、あわてた王は彼に戦線に復帰するよう要請する。彼はわずかに残った十三隻の船を駆使して再び大戦果をあげたのだった。だが、秀吉が死に、撤退する日本軍を追撃する最後の戦いで、敵の弾丸は船の司令塔に立つ彼の体を射ちぬいた。最愛の息子をも捧げたあとの、壮烈な死であった。

生前は剛毅実直に生きて何の報いをも受けなかった李舜臣。いま、各地に立つ「忠武公」李舜臣の銅像は、胃の下のその炯々たる眼で、いったい何を見つめているのだろうか。

# 食べもの文化史

石川尚子

## くらしと食事

## 行事食

指折り数えて待っていたハレの日のごちそうのことなど、つい忘れてしまうほど今私たちは飽食の日々にどっぷりつかっている。しかし、かつての暮らしには、四季おりおりの行事とそれに連なる食べものがあつた。

それらは、農作業を中心とする労働のめやすであつたり、人の一生のふしめであつたり、自然の風物や季節の移ろいを感じとる催しであつたりした。そしてその時の食べものには、土地の産物や季節の食品が実に巧みに取り入れられており、しかも日常食とは異なる特別な意味がこめられていた。資料にみられるような年中行事食の合間には、おまつり、婚礼、法事、葬式など、人寄せの機会が時々あつて、一定の献立に従つて料理が供されたものである。

これらの行事や食べものづくりには、人それぞれの役割があつて、子供といえどもけっこうな働きをしていた。教育というのは、このように、仕事を通し、人とのふれあいを通

多摩水田地帯の年間の食生活暦

行事	晴れ日(行事日)
1日 元日	おせち料理
3日 3日とろ	白米のちりめ
4日 芋の種のみきつ	お神酒、おせち料理
7日 七草	七草粥
10日 菫日待ち	白米、けいちん汁
11日 磯開き	鱈もちの雑煮、しるこ
14日 まつ玉飾り	まよ五のお餅え
15日 小正月	小豆かゆ
16日 羽子振り	お供えの雑煮
20日 えべつ減	鯛、おこわ、煮しめ
24日 初不動	おこわ
1, 15日 農休み	小豆飯
3日 福分	白米飯、煮しめ
4日 初午	おこわ、野菜の煮しめ
28日 お節句のもち焼	煮しめ
1日 農休み	小豆飯
3日 焼の節句	小豆飯、煮しめ、汁湯
15日 梅若さま、農休み	花ごきだんご、小豆飯
15日 雛祭	ぼたもち、朝餅だんご
1日 農休み	小豆飯
6日 李さま	ぼたもち、だんごなど
8日 花祭り	甘茶
15日 芋山崎の花見、農休み	酒、焼いた地蔵
28日 鹿しい	
1日 農休み	小豆飯
5日 端午の節句	かしわしら、おこわ、野菜の煮しめ
15日 農休み	小豆飯
1日 農休み	小豆飯
6日 百開き	おこわ、野菜めしめ
15日 農休み	小豆飯
1日 農休み	小豆飯
7日 七夕さま	小豆飯
15日 お盆さま	そうめん、酒まんじゅう
1日 農休み	小豆飯
15日 農休み	小豆飯
1日 農休み	小豆飯
8日 八幡さまお祭り	小豆飯
8-10日 彼岸	小豆飯、野菜の煮しめ
1日 農休み	ぼたもち、朝餅だんご
15日 お月見	小豆飯
11-15日 お十夜	月見だんご
1日 農休み	小豆飯
15日 七五三の祝	おこわ、焼強つきの煮、煮しめ
1日 川祭り、農休み	ぼたもち
15日 大佛祭	煮しめだんご
23日 冬至	かぼちゃの甘煮
28日 もち焼	お餅、めしめ
31日 年越	年越そば

日本の食生活全集⑩ 東京の食事より

して身につけてゆくものではあるまいか。行事のなかにはユーモアあふれるものもある。私が住んでいる地域には九月一日に生姜節句という行事があつた。この日、嫁を里がえりさせる姑が「しようがない嫁だ」と、生姜をたくさん持たせてやれば、実家では「見逃して下さい」とみのお返しに持たせたとか。ギスギスしていたとみられがちな嫁姑の關係が、とてもステキに思えてくる。

行事食は、たくまずして食べもの教育をしていた側面と、日々の暮らしにゆとりと喜びを与える側面があつたと思う。行事食の精神と形は、子供たちにこれからも伝えてゆきたい食べもの文化のひとつといえよう。

## 明るい長寿社会はやきものづくりで

——東くるめ市民自由大学陶芸教室——

〈加藤照子〉

高齢化社会は「おんなの問題」といわれますが、ベッドタウンのわがまち東久留米では、男性問題の方がより深刻にみえます。定年後何もしなければ一年でボケるといいます。粗大ゴミとかいわれないうで地域で暮らすにはどうしたらいいか；「高齢化社会を自分の問題として考える会」では、設立以来そのことをさまざまに訴えてきました。市民自由大学陶芸教室はその一つです。85年スタート以来多くの人が出入りして現在は35名。その中約10名が定年（予備軍も）男性です。長年鍛えた技能は作品に見事に反映され、グループの活性化にも寄与しています。今まで企業論理で生かされた分、これからは自分の思うように生きたい；そういう気持をうけとめる地域基盤は未熟です。陶芸教室は五年たった今、障害者や、老人ホームの方々のやきものづくりに奉仕もして、いきいきと活動しています。「明日は我が身」「一日でも多く、人間らしく豊かに生きたい」新しい出発点に立った人々の底に流れるこういう気持を大切にしたい。安易にカルチャーセンターなどに流れてしまわぬよう、地域でしっかり受けとめる仕掛けを多岐・多彩に、というのが活動の行政へのコンセプトです。男性問題は、明るい長寿社会を拓くカギなのですから。

〈連絡先〉 〒203 東京都東久留米市学園町2-18-10

加藤方 ☎0424 (22) 6723

## 自己紹介のうぶぐりイキイキ

### 地域雑誌「武蔵野から」編集室

〈野口由紀子〉

子育て中の主婦たちの、情報交換など、おしゃべりから始まった小金井のタウン誌は、五年後、多摩・武蔵野をエリアとした広域の地域雑誌となり、この秋通算九年目に入ります。スタッフの常勤四名は主婦。背後は数十人の、私たちが助っ人と呼ぶ協力者によって支えられています。出身地も経歴も、職業も、キャリアも、実にまちまちの集まりです。

地域雑誌は地域の媒体メディアそのものだから、私たちの仕事の第一は、この雑誌をより多くの人に知ってもらう、参加してもらう、活用してもらうことです。

地域に開かれた媒体だから、一つの価値観や主張を貫くものではなく、異った意見や主張が交差します。考え方や生き方が違う人も、男も女も、老も若も、地域と時代を共有しているのだから。

女性チームだから男性たちの助言や協力が貴重です。素人集団だったから、地域に住むプロたちの手助けが大きな力になりました。企業と商店からの広告は印刷費に回りますが、この雑誌への一つの評価点です。町に常に新しい風を立てながら、十年目に向けて今、仕事おこしに取り組んでいます。

〈連絡先〉 〒184 東京都小金井市本町5-7-16

☎0423 (85) 7025

'82年の教育課程改訂にむけて その2

生徒には、主体性や判断力を身につけさせると言いながら、その生徒を育てる教師の活動現場に、「日の丸」「君が代」をはじめとする法的拘束力の強制は、真に豊かな教育内容を保障するものではない。

具体的な課程表作りをはじめたのは、'81年度になってからだだったと記憶する。各教科ごとに、教育課程表の試案を作るのである。人さまの科のことはわからないなどと言ってられない。逆に、人さまの科だから思い切って削ることができるといえる。それを各教科による代表者に持ち寄り、原案を作っていく。すでに討論したことをふまえ、総単位数<sup>31</sup>でおさまるように、それぞれの科で考えようという方法は、他の科のことも勉強しないとできない作業である。職場内に、共通認識を育てるのには、存外このようなやり方がよいのかもしれない。

予算案を作るのに、各科から要求されたものを全部集計すれば、総額は簡単にオーバーする。総額をふまえて、何とか枠の中でおさまるように、全員で作れば、お互に譲りあうこともあるというのと同じである。

そんなこんな作業のなかで、商業科だけなら、共学の家庭科は導入できそうな見通しがついた。進学校で大規模校とあれば、全部が一斉にできなくても、商業科から手はじめてやるという方法もあるかと思いはじめていた。ところが、商業科の先生の方から、「商業科だけやるのはおかしい。やらないのなら両方の科ともやらない。やるのなら普通科もできないと、学校の中に差別が生ずる」という、共学反対論者からの強硬意見が現れた。

よく考えてみると、この差別論理はもったものようである。どこがおかしいのだが、あまりにも強い意見であったために、それではもう一度考えなおすことにしよう……というようなことになった。結果としては、商業科の共学成立でチヨンにならなくてよかったのだが、職員会議は、このようなことの連続であった。

「共学の家庭科なんかやっていて、この学校の進学率が落ちたら、先生は（私のこと）どのような責任をとるのですか」というすぐまればかたもした。

# 19歳の日記

金森土岐

## 「自由」

社長がいる  
専務がいる  
部長がいて、課長がいる  
そして私たちがいる  
いつも偉そうにしている部長が  
専務の前では  
まるでコメツキパッタのようだ  
いつもピリピリしている課長が  
酒を飲むとゲラゲラ笑う  
社内の誰にも敬語を使い  
課長にお茶を入れてる私たちは  
どこに行っても変わらない  
表も裏も何もない  
誰かの上に立つことも  
誰かをどなりつけることも  
そうされることはあったとしても

やりたいとも思わない

何て自由なんだろう

一番力のない者が

一番発言力を持たない者が

きつと一番自由であり

きつと一番人間らしく考え

人を傷付け、どなりつけ

数十万の月給取るなら

考え、悩み笑いながらの

十万の給料の方がいい

私は今、自由だと思う

言われた事をやるだけでも

一日九時間以上会社にいるも

“会社”というひとつの世界を

眺め、冷やかす

考えることができるのだから

資本主義のどまんなか

今の日本の主流に乗って

私は金を稼いでいる

私の視野の限界まで

今の会社を見つめたら、

私を感じるこのできる全てを

今ある場所から吸収できたら

その時会社を辞めるだろう

私なりに楽しみながら

私なりに感じながら

会社の人間を観つめながら

毎日を送り、

企業の中に身をおきつつも

そこで“自由”を感じているから

幸せだなあと

充実してるなあと思えるのだろう

明日もがんばらなきゃと

考えることができるのだろう

心にいつも余裕があつて

心にいつも空間のある

そんな生活を失いたくない



## 教育塔を考える会 (1)

戦前は、靖国神社に戦死して祀られることが「日本男子」ととって最高の榮譽とされていきました。そしてその榮譽をうけた人を「顕彰」しようとかちここに建てられた靖国神社の村落地域版のひとつが、箕面の忠魂碑です。そして「お国のために死ぬ」将来の軍人を再生産しよう、教育の世界でも「靖国」をつくりました。これが「教育塔」です。

「教育塔」というのは、大阪城公園の一角にある、花崗岩でできた高さ三十メートルもある異様な建造物です。もともとは一九三四年の室戸台風の際に、大阪の学校児童多数が犠牲になったため建てられたとされていますが、実際には、毎年「教育勅語発布記念日」である十月三十日に行われる「教育祭」で、その前で、帝国教育会会長が挨拶していたように、「教育報國の殿堂、教育招魂社」、つまり教育界の靖国神社であったわけです。

戦前、そのような侵略戦争の象徴的存在であった「教育塔・教育祭」が、じつは戦後も引き続き、こともあろうに「教え子を戦場に送るな」の日教

# 広がる運動

■中村英之

# 広がる人の輪

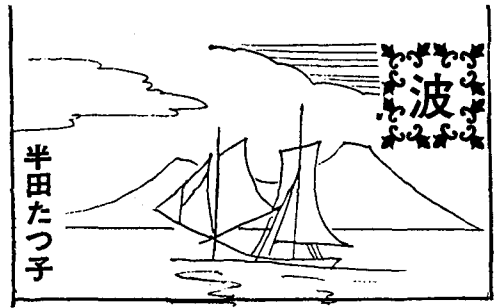
組の手によって維持・管理され、また十月三十日に神道様式で、毎年行われ続けてきたのでした。

大阪の教職員のなかでもこの「教育塔・教育祭」の本来のいわれを知る者は非常に少なく、もちろんぼく自身全然知りませんでした。「箕面忠魂碑違憲訴訟を支援する会」がこの塔の問題点に気付き、一九八一年、それまで残されていた「英霊を慰め：英霊の名を永世に伝え：祭祀を継承」という、侵略戦争にたいする何の反省もない「教育塔説明板」を書き改めることを要求するまで戦後三十年以上もそのままだったのです。

同時に、「教育塔心銘」には「咸一其徳」（みなその徳を一にせよ）という「教育勅語」の結語が刻まれたままであったものを書き改めさせることができました。しかし、最も重大な問題のひとつである「教育塔」レリーフが、「教育勅語」を校長先生らしき人が読み、児童生徒が頭を垂れてそれを聞いているという許しがたいものであるのにそれをそのままにしており、「教育祭」はあいかわらず十月三十日にやるので、大阪の教職員が問題をとらえていないことに腹をたて、「教育塔を考える会」を結成したわけです。

## 桜の樹

—病院の日々の中で—



三階の病室から見下す中庭に、桜の老樹が三本、ゆったりと展べた枝葉は、直径三、四十メートルの緑陰をつくる。祖父らしい銀髪の人を乗せた車椅子を押す少女の、のびやかな足が見え隠れする。白衣の人が二人、すれちがいきざまに挨拶をして葉影に消える——夫が幽冥境をさまよってから一週間の後、最重症患者の部屋からこの個室に移った。ストレッチャーに寝たまま、中庭を二度散歩？したことを「命の洗たくをした」と喜び、うわごとにも「庭に連れて行ってほしい」と眩

いていた彼。窓辺に佇むことができたなら、どんな声を挙げるだろうか。それがかなわぬ彼の傍で、見事な樹を飽かず眺めていた。

食物が咽喉を通らなくなったのが七月六日、肺炎を併発し、右肺がまっ白になったのが七月二十日、あっとい間に危篤状態になった。七月半ばから病院に泊まり込んだ私は、病室をホームに世と没交渉でくらししてきた。

救急車で入院した大学病院から、Weの読者の杉山信子さん他にすすめられ、入江一恵さんにお力ぞえをいただいて、ようやくここ東京衛生病院に転院することができた。「検査、検査で病名をつきとめ、データがそろえば大学病院の使命は終わった。最新まで看取るのは、どこか別の病院で」と放り出した前の病院から見れば、ここはまさに天国だ。

病院は、セブンスデー・アドベンチスト教団による宗教法人。職員の多くは、神と人とに奉仕する決心をしたキリスト教徒。毎朝礼拝の後、仕事を始める。主治医は敬虔なクリスチャン。看護婦さんたちも、意識のない病人に「半田さあ」と呼びかけ「血圧、計らせていただきます」「注射、チェックします」「ごめんなさい」と声をかけ、「ありがとうございました」で終わる。同教団が開設した

三育学院短大の看護学科の三年生の実習ぶりも献身的だった。どういう教育がこういう人たちを育てたのか知りたい、と思うほどに。

学院の一年生が看護婦の仕事を知るために見学・実習に来ていた。彼女たちにとって、病篤い夫の症状は衝撃だったらしい。いつも傍にいる私も印象的だったようで、何人もの学生さんが日誌に書いたという。カンファレンスの時、一人が「半田さんのために祈りたい」と言い出し、皆すぐ同意してくす玉を作った。翌日、引率の先生が数人の学生さんともにくす玉を持ち、祈禱を申し出られた。見えない、聞こえない夫の手を握り、一人続いてもう一人、「天のお父様」に切々と祈ってくれた。顔を上げると、ベッドを囲んだ学生さんは皆涙ぐんでいた。

こういう日々を送っていると、たまに家に帰った時のテレビの浅薄なこと。NHKスベシャル番組すら「ソソってはならぬ」と人を馳り立てるだけの番組に見え、「まあ、朝日新聞のこのレイアウト、まるでオモチャ箱ね」と思ってしまう。フォーラムも、十月号のテーマも、すべて遠く、「あつしとはかわりぬのねえ世界」になりかけていた。

「四月には、この窓いっぱい、桜でピンクに

なるんですよ」と看護婦さんが言う。「ここに来て十年になります。桜はその間にも育ちましたね。病院もよく手入れしてますから。昭和四年にこの病院はできたんですが、その頃にもう桜はあったんでしょね。いつ植えたのか、立て札にでも書いておけばいいのにね」と掃除の方が言う。うっとり、樹に見とれていると、聞こえてくる言葉があった。

「薔薇色に匂う春の夕ぐれを、空色の洋服を着た愛らしい少女が一人、スーツケースをさげて静かに野辺の小路を歩いていた。武蔵野のほとりである」。

私の少女の頃のバイブル。十回は読み直して、そらんずることができる『紫苑の園』、冒頭の一節だ。日本の少女小説界に、全く新しいジャンルを開拓するはずだったが、惜しくも夭折した松田瓊子さんの著作。この病院の雰囲気は、彼女の世界に通じている。それは私の心の中にそっととおしんできた柔い芝生。そこに想う私に「地域をよみがえらす」文章なんて書けるわけがない。自分で立てたテーマがそらぞらしく、困惑していた私。けれど、その私を、一冊の本が救った。延藤延弘著『まちづくり読本』（晶文社）である。「こんな町に住みたいナ」の副題をつけ

たこの本は、日本17都市、海外の2都市のまちづくりを紹介しているのだが、実にユニークで夢にあふれている。著者は熊本大学工学部教授。本誌にも書いていただき、以来Wの読者でもある。住民の側からのまちづくりやコーポラティブ住宅づくりの声があれば、東に西にどこにでも出かけて考えを話してきた。こうして全国のまちづくり、住まいづくりにかかわった体験が中身である。「まえがきにかえて」を「物語のあるまちづくりへ」としているように、地域に内在し、住民層がいただく固有の価値に着眼し、それを高めること、地域に生きることの何に価値をおくのか、その「こころづくり」を志向する。

前著『こんな家に住みたいナ』同様に、世界のすぐれた絵本を取り上げ、その投げかけるイメージに触発されながら、まちづくりの現場に踏み込み、町に生きることの意味を問う。「プラムおじさん」のいる町として、神戸市真野地区を、「ゼロ弾きゴーシユ」たちの家として、京都「ユークート」を取り上げる、というように。

熊本県鏡町では、著者に町の魅力を問われて、町役場の人自ら「ほんとうーになーいもないんです」と答えたという。著者は住民参

加でまちづくり絵本を作るしかけをする。一年半かけて地域の個性を色濃く出した「くすのきは見ていた」を制作するプロセスの中で、人々はわが町の歴史を再発見し、まちづくりの意識を高揚し、絆を強める。そこに社会教育の新しいスタイルも生まれた。

終章は、東京・世田谷区でまちづくりリレーイベントの一環として「絵地図と記録でまちづくりに参加しよう」コンクールを行ったことを紹介。そこで浮彫りにされた視点は、示唆に富む。子ども部門の「絵地図大賞」に輝いたのが「布で作った成城駅から児童館まで」で、この作品が本のカバーを飾る。

絵本から生まれるイメージと、現実のプロジェクトをつないだ著者の手法は、病院の個室で閉塞状況にあった私の心をパアツと広げてくれた。来年の桜の季節には、病院を訪れ花吹雪にわが身をさらしたい。桜の淵源をたどってみる気が生まれるかもしれない。その前に秋には、千葉の山の中にあるという三青学院短大を訪ねてみよう。『まちづくり絵本』で紹介されている地域を、私の目で見える旅もしたい。その後には、「地域をよみがえらせる」文章を、確かな筆致で書いてみよう――と。

## 編集者への手紙

### — 教育実習の体験から —

星 名 綾

二週間の教育実習を終えました。期間は短いものでしたが、そこで感じ、学んだことは非常にたくさんあったと思います。具体的に言葉にできないものもあるのですが、実習に行く前にはなかった何かが、自分の中に生じたというような手応えを感じています。

実習は出身校の高校でやらせていただき、授業は一年生だけを担当し、「食品の安全性」に関するところをやりました。実習でやる課題はかなり早いうちに教えていただいていたので、関係の本や資料は気がついた時に読んだり集めたりしていました。学習指導案も前月の中旬すぎには大筋ができるところまで準備ができ、準備に費せた期間の長さからすると、大部ゆとりをもって実習に臨めたはずな

のですが、実際に始まってみると、日々教材研究で手一杯になってしまいました。

まず「安全性」というものを、どのように位置づけて導入したらよいかで困りました。食品の価値を決める要素の一つとして「安全性」があることを伝え、安全性が損われたらどうなるか、ということを質問しながら入ってみました。そのあと食中毒に入るの、そのことの関連で、お弁当をめぐる身近な食品の衛生的な扱いにおける安全をとりあげました。それから食中毒にすすみ、食中毒を原因別にみていくことで、食品を有害化し、健康を脅かす要因の全体像をつかませ、原因によっては食品「公害」ともなることに触れられました。食品公害のところ、食品添加物が原因

とされることもあるとして、大まかに食品添加物の話をして、第一週目は終りました。

この時は生徒の実態をほとんど把握していないこともあって、特に初めにやったクラスでは、私の感覚で授業をしてしまいました。話し方から「こちらはわかってているが……」というふうを受けとれてしまうという批評をいただきました。知っていることと教えることは違うことを痛感しました。これは授業をする技術的な問題だけかと思っていましたが、何度か回数を重ねていくうちに、私が自分自身の問題としてとらえていなくて、単に集めた情報を処理していたにすぎなかったことに気づきました。また食物学科で学ぶのが当然という形で、あれこれ考える間もなく知識だけを得てしまっていたこともあり、とりあえず一つの事実として、こちらで持っている知識を伝えるけれど、そこからもう一歩踏み込むことができませんでした。

日常の食生活に関してはほとんど母親まかせ、という生徒が多い中で、食品の衛生的な扱いについて、どうやって目を向けさせたらいいか：難しい……と思いました。食品公害のような社会的に大きく取り上げられているものについては、特に公害事件のことをどう扱

つたらよいか、最後まで悩みました。水俣病、森永ヒ素ミルク事件、カネミ油症…など、こういうことがあったという事実は、私も生徒も程度の差はあるかもしれないけれど、知っています。被害を受け、今も何らかの後遺

症で悩む人々の思いは私の想像の及ばないものだ。まだまだ私の知らない部分の方が多い…そう思うと、生徒の前に話している自分は、本当はその資格なんてないのでは…と、つい問うてしまいました。同じ授業を四クラスやったのですが、最後のクラスで、私なりに考え感じたことを少しですが言ってみました。事実に関係した具体的な資料を何も使っていないかったので、生徒はとらえにくかったかもしれない、と反省しています。

二週目は「食品添加物」を中心にして「安全」についての全体的なまとめをする、という流れでやりました。食品添加物に関しては気にする人としらない人として、親の姿勢の影響を受けていました。私自身の食品添加物についての考え方を話してから本論に入りました。身近な食品添加物をピックアップし、あげられたものを分類し、どのような目的で使用されているか、ということから始めました。何かの目的で使われても、使用禁止にな

つたものもあるところから、安全性に入りました。安全性という点、農薬・放射能・動物の飼料など、関係するものは次々とあります。授業では紹介にとどめました。

目的があつて使われているし、今日の食生活では、食品添加物のない食品を得ることがほうが難しい。また安全かどうか、現時点ではわからないことのほうが多い。このような現状の中で、どうしたらよいか。どう食品と向き合っていくか。そんなことを、少し時間をとって考えてもらいました。自ら意見を言う生徒はいないので、こちらから指名することになりました。「避ける」「いろいろとやって確かめてみる」「消費者運動をする」「あきらめる」など、いろいろな意見がありました。

食品の安全性、特に食品添加物については初めから危険性のみを強調せず、私自身の考えを押しつけないよう、中間的な立場でやろうとしました。最初は「よくない」という点を中心に授業すればいい、と考えたのですが、これでは行き詰ってしまうことがわかりました。安全性が問われるのは何故か、安全が疑問視されていても、どうして三百種以上の食品添加物が認められているのか…など、広く考えていかななくてはならない、と思いま

した。授業の中で、こうすればよい、とか絶対にこうでなくてはならない、というような模範解答はなく、私自身の考えはこうなんだけど、ということをも、一つの問題提起の形でまとめにかえました。

安全性と一口に言っても、含まれる問題は広く、食品そのものをとりあげて、あれこれ考えるほかに、今日の食物を囲む環境…どのように生産されているのか、流通はどうなのか、経済は？ 輸入食品はふえているけれど、気候・風土との関係を思う時、食物を経済性だけで考えていいのだろうか。環境汚染との関係は？ などいろいろなものが見えてきました。しかし、二回の授業で全てを話すことは、時間的にも不可能だし、收拾がつかなくなるので、一部を触れるにとどめました。いたずらに不安感をかりたてないよう注意して話しましたが、これは難しかったです。

また、正しい知識をもって対処してほしいと思うのですが、情報が多すぎる今日、何が正しくて何が誤りなのか、とてもわかりにくいし、割り切れないものが多い。このような中では、どうしたらよいか、教材研究をしながらずつと考えました。「食べる」という行為は、人間が昔から行ってきた生きる上で

最も大切な営みであり、生命と深い関係をもつ。今、安全性について考えるのは、「食」が生命と密接な関係にあること。過去にはなかった化学合成品の添加物・薬剤・農薬などと、直接口にしなくても何らかの形で体に入れている合成洗剤や合成樹脂など、今は安全であるという保証のもとに使用されていても、それが本当に人間の体に合ったものであるかどうかは、私たちが実験台になっているのではないか……このことをふまえると、〇〇は安全、××は有害としてすませるのでなく、長く広い目で見たいかねばならないと思う、という二つのことをまとめて言いました。

あと、食べるという行為は、体をつくるという点で栄養ということを考えるけれど、食文化という言葉があるくらい、文化的な面も含んでいることにも触れたいと思ったのですが、あまりいろいろ盛り込むと私自身が混乱してしまいそうなので、この点は深入りしませんでした。

授業をするのは、本当に難しかったです。既成事実をこちらの持っている知識で伝えるだけなら楽なのかもしれません。そこからもう一步踏み込んで、生徒にも授業を通して生活について関心をもってもらいたい、目を向け

てほしいと思うと、授業をすることがとても重いなあ……と感じたこともありましたが、二週間で合計八回、授業を持ちましたが、この授業を通して、私は何を伝えたいのか……ということ、事あるごとに自問していました。

半田先生が、家庭科教育法の最初の授業で話された「観・学・術」のこと。実習に出て以前よりもはつきり実感しました。中でも、「観」を練ることは決して容易ではなかったけれど、でもその重たさや大変さが、不思議なことにも楽しくもありました。教材研究をしてこのテーマで私は何を教えるのか……と、自分でもなせ……と思うくらい悩みました。でもそのおかげで、いろいろなものが見えてきました。それは私にとって、大切な経験だった、と今思っています。

家庭科教育法の講義を受けて、この教科のもつ豊かさに驚きました。実際に教壇に立ってみて、またその深さというか広さに驚いてしまいました。研究授業のときは、授業を担当したクラスの担任の先生三人と、時間の都合のつく先生二人と、計五人の先生が見て下さいました。全員家庭科とは無縁の男の先生方でしたが、批評をうかがったところ「内容については専門外なので何も言えないけれ

ど、身近な事柄が問題として提起されていいですね」とおっしゃって下さいました。大学の家政学部の中でも、家庭科の教職なんて……という声を耳にしていたので、このひと言は、とてもうれしかったです。授業そのものは、終わってみると反省点が山のように出てきてしまったのですが……。

実習に行った高校は、だいたい全員が進学希望という学校で、授業をすることは、先生方にとっても、実習生にとっても、比較的やりやすいということでした。いろいろ言っても聞くときは聞いてくれるので……。私の場合は、女子しか授業のときは見ていないのですが、何だかとてもおとなしいな、という印象を受けました。家庭科だけではない、とあとでわかったのですが。皆の気持ちをこちらに向けるのは、難しいと痛感しました。

実習期間の二週間を経て、考えが変わらなかったこと、家庭科という教科にさらに魅かれたこと……などから、教員採用試験を受ける決心をしました。勉強のほうは十分と言えず不安なのですが、がんばりたいと思います。

教育実習で体験したこと——私の初めての社会勉強でした——今後の生活に活かしていきたい、と思っています。（日本女子大学・四年）

# 泉

★★★★★★

この頁はあなたと私の情報交換の場。小さなスペースですが、ご利用ください。

## ◆お話しとビデオ上映のお知らせ

- 『わたしのからだよ!』子どもを性的虐待から守るための、田上時子さんのお話しとビデオ
- ・パネラー 丸本百合子(産婦人科)・三井マリ子(都議)・山本直英(「人間と性」教育研究所所長)
- ・司会 富沢よし子(子どもの人権を考える会)
- ・日時 九月二十二日(土) p.m. 一時三十分～四時三十分
- ・場所 阿佐谷地域区民センター 第四・五会議室(JR阿佐ヶ谷駅南口より三分)
- ・資料代 五百円
- ・問合先 まじよりでい ☎03-318-5860
- ・子どもの人権を考える会 ☎03-399-4107

## ◆ウイメンズ・フォーラム'90

日本の男たちはいま?—語らう男たちと—

- ・日時 十月六日(土) p.m. 一時半～四時半
- ・場所 日本YWCA
- ・内容 マスコミの場の男たち
- ・司会 松田敏子
- ・講師 鹿嶋敬(日本経済新聞記者—長く女性・家庭欄を担当) 諸橋泰樹(日本新聞協会研究委嘱研究員・成城大学大学院生)
- ・参加費(資料代) 千円
- ・問合先 日本婦人問題懇話会 〒151東京都渋谷区上原一—四十七—四 金子ビル302号 ☎03-463-9252

## ◆日本臨床心理学会総会

- ・日時 十月二十六日(金) a.m. 十時開会・二時(七) p.m. 五時閉会
- ・場所 京都会館 ☎075-771-6051
- ・内容 分科会(フェミニズムから心理療法をどうとらえるか) 河野貴代美・小沢牧子 他(二十六日 p.m. 一時～五時) など
- 全体会(地域で「共に生きる」・その光と影—地域医療・福祉の現場から) 大谷強 他(二十七日 a.m. 十時～五時)
- どなたもご自由にご参加下さい。
- ・参加費 二千円(全期間)
- ・問合先 同学会 ☎0473-72-0141

## ◆東京ウイメンズプラザ(仮称) シンボルマーク募集のお知らせ

東京都は'92年度に、東京ウイメンズプラザを開設する予定です。ウイメンズプラザは女性の平等と共同参加の豊かで平和な社会の実現をめざす活動の拠点として、あらゆる都民に開かれた出会いとふれあいの広場です。

- ・応募資格 東京に在住・在勤・在学の方(プロ・アマを問わない)。
- ・募集期間 '90年九月三十日まで(十月一日到着分まで受付)

- ・問合先 東京都千代田区丸の内三丁目八番一号 東京都生活文化局婦人青少年部婦人計画課 ☎03-212-5111(代)内24-633

## ◆ビデオ『世界人権宣言』

◎世界人権宣言四十周年を記念して、世界十四か国、四十人の一流アニメーション作家が協力して製作。

- ・十六ミリカラー・二十一分・定価二十万円
- ・日本語版制作 アムネスティ・インターナショナル日本支部(新宿区西早稲田二—三—二十二第三山武ビル ☎03-203-1050)
- ・販売 遊学舎(文京区本郷二—三十一—二 ☎03-812-4155)

## わたくしから

あなたに



◆八、九合併号で大仏レアさんが健康保険証の中で三年生の長男が六年生の長女より上に記載され、娘さんが怒っているという投書がされました。私の所にもいくつかこの問題が持ち込まれ、解決した人の例もありますので、是非一度皆様も保険証をごらんになった上で担当者に働きかけて下さい。

私の所に健康保険証や選挙の投票用紙の家族の名前の並べ方で相談がくるようになりましたのは、出席簿の男女の並べ方について問題提起をした時からです。男女ミックスの出席簿に対する多くの方々賛成が得られる中で、保険証や投票用紙の問題も浮かび上がってきました。

私が開きましたものは港区、豊島区、川口市で男の子が年下でも姉より前に記載されているということでした。国民健康保険証のこ

とです。それで豊島区に住む私の友人の佐藤礼子さんはさっそく区役所へ行き、生年月日順に変えてもらったとのことでした。

この理由はコンピュータで男がⅠ、女がⅡと操作されているためにできたものです。ですから、それをやめさせ、生まれた順にするのは簡単であり、どこでもやってもらいたいことです。出席簿も男をⅠと考え女をⅡと考えてきたので、男の子のあとに女の子がくるようになったのです。これでは女の子はいつまでたつても「第二の性」です。

大仏さんはすぐ企業の保険証担当者に電話をして変えてもらうようにして下さい。そしてその人が納得いかないようでしたら、是非私たちの作った『さようならボーイフアースト、男女別出席簿を考える』を購入して、時代の動きを知ってもらって下さい。

私の知人の川口市の医師もこれを改めさせる運動に取組んでいます。学校の出席簿も一日も早く男女ミックスにするよう御提案下さい。今年の四月から男女ミックスにした学校がいくつかありますが、来年にむけて検討中の学校はたくさんあります。パンフレット(一冊五百円)は私宛に申込んで下さればすぐお送り致します。

〈連絡先〉 〒359 所沢市中新井一八九七

二 ☎〇四二九一四二一七五六〇

(中嶋 里美)

◆八・九月号で、健康保険証のことを書いたお手紙が目にとまりました。手前みそかな、とは思ったのですが、何かの参考になればと昨年私が取材した北日本新聞(富山県をエリアとする地方紙です)の記事を送ります。

高岡市の斉藤正美さんが、国民健康保険証の被保険者記載に、生まれたばかりの弟が先にのっていることを、長女の麻由ちゃん(八つ)にたずねられて困惑したことを記事にしたことがきっかけで、高岡市は、性別にかかわらず出生順に改めることにした、という内容です。その後富山市も改善の方針に変えたそうなんです。こんな動きが広まればいいな、と思います。(高岡・牧野陽子)

◆先日「中学技術・家庭科教諭グループ『情報基礎』の『トラの巻』作成」という記事を見ました。「えっ、これが家庭科?」と驚いています。「情報基礎」というお勉強には、家庭や人間生活など、家庭科の精神が盛り込めるものでしょうか。



教育部外者の私ですが、どうもかけ離れているように思えるのです。そして、この学習は、男の子に真の家庭科をやり過ぎさせるばかりか、「家庭科の時間」が、会社人間の地下作りに利用されてしまうように感じます。そうではないのでしょうか。

(福井・橋本チエ子)

◆今年の一年生は人なつっこく、おもしろいです。九月末の文化祭もある程度意識しつつ住環境の研究をすすめています。ハンディキヤップのある人にとつての町づくりとか、校内の環境、公園や緑地、ゴミの問題などです。先日、生徒に誘われて、身障者用具の工房「アトリエ森と木」の高木さんを訪ねました。学校から自転車で生徒六人と、まるでサイクリングを楽しんだような……。

以前光野有次さんの『生きるための道具づくり』という本を読んで、私も興味をもっていたので、生徒の誘いによるこんでついでに行ったのでした。たとえば脳性マヒの子どものために、その子の椅子を何日もかけて作り、すわってもらえなくて、何度も何度もつくくり直した話とか、高木さん自身の生き方の話――中学時代、丸刈り強制に反発し、登校拒否。

夜間中学・高校に通ったことなど、この仕事を始めたきつかけや、今の教育のこと、家庭科のこと、いろんな話をするのができました。いやな成績つけに追われている時期に、わざわざ出かけるというのは面倒くさいという気持ちもあつたのですが、行ってみてよかったです。やっぱりいろんな人に出会って話ができるというのは、とても素敵なことですね。

また別のグループは、車いすの人にとつて今の町はどうなのか。車いすの人に聞か、一緒に町を歩いてみたいと言っていました。で、私はあちこち問い合わせ「おおさか行動する障害者応援センター」にお問い合わせしました。車いすの押し方、階段の上り方、段差がある時どうするかなど、実際自分が車いすに乗ってみたり、押ししたり、いろんな経験をさせてもらいました。電動車いすにも乗りました。

私にとつても初めての経験でした。これから駅などで車いすの方が困っておられたら、積極的にお手伝いできそうです。脳性マヒの人と話をする経験も、今まであまりなかったものですから、緊張してしまつて……。これからは、もう少し日常におつきあひしてい

けたらいいな、と思いました。

生徒の付き添いというより、私のほうが生徒につれて行つてもらつたような、そんな感じがしなくてもありませんが、楽しいひとときでした。  
(大阪・浅井由利子)

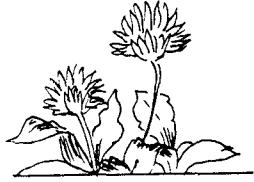
◆八・九月号では古沢氏の「大衆消費社会の不幸」がよかったです。さて、次は私のひとりごとです。

We 読んでいて、時々困るのです。カタカナが多い!! 子どもに聞いたりすると、そんな日本語やと言われますけれど……。インテリでないとWeは読めないのかな……。とひがんでしまうことあるヨ。

八・九月号を例にあげるとインテンシブ、コンセプト、レトリック、チーム、パースペクティブ、シフト、テリトリー、パーツ、ドメスティック、マジヨリティー等、知らないほうが時代遅れでおかしいのかな? でも私の周囲のおばさんは知らないと言ってるし。やつぱりWeは、大学のインテリさんの本なのか……。と、自分の不勉強を棚に上げて、ひどくひがんでみたり……。オバタリアンのひとりごとでした。

(京都・稲葉桂子)

## Weの 読者会だより



〈兵庫Weの会〉

◆五月三日、一時から五時まで、神戸学生青年センターで。テーマは「働き方を変えよう」参加者は二十六名。三月二十五日のWe関西春のつどいの二次会で、男も家事・育児に参加しようとする、今のような働き方はできない。どこからどう変えられるか、といった話になり時間ぎれ。今日はそこを掘り下げた話そう、ということになりました。

メンバーの金森順子さん（民間企業で三十年余り働き続けて）と、吉田清彦さん（年収百万円の生活で見えてきたこと）にレポートしてもらい、参加者で話し合いました。

新聞で紹介されたのを見て、テーマに興味を持ち、来られた方が五人もおられました。神戸大の朴木佳緒留さんは、労働に関心があり、今までペーパーリングが多かったか

ら、いろんな人の生の声にふれたいと思って参加したと。

いつも言っておられることを気楽にしゃべって下さったのでいい、と思っていたのに、きっちりしたレジメを作り、今まで自分がどうやって楽しく働いてこられたのかふり返るいい機会になった、と金森さん。金森さんを知っているつもりのも、かくして今日の金森さんを築き上げてこられたのかと、より深く理解できました。

吉田さんとの労働観の違いなど、対比がどうしても、こういう二人が共にいるWeの会っておもしろいなと。正当派というか、中から変えようとするか、ゲリラ的に多様な労働あり方を探していこうとするか、このあたり考えさせられました。（西本和代）

◆七月八日（日）、神戸学生青年センターで「働き方を変えようPartⅡ」。教師にとっては忙しい時期。参加者十二名と少なかったのですが、その分中身の濃い内容でした。

ヤマケンこと山本謙吉さんと、神戸新聞記者の相川康子さんにフレッシユなところを話していたきました。チャーリーが遅れてきたので、ヤマケン一人で自作自演、初公開の「働くこと歌」を歌ってから話してくれまし

た。働くということは叱られること、子どもにほえみかけること、話しあいをする、お茶を飲むこと。大学をやめる時、けじめをつけないと指導を受け、今でもその大学に出かけて交流を持っている。自然食品の八百屋さんをやめた時、話しあいをしなかったの、相手に何も伝わらなかったことが悔やまれる。現在は本屋さんで働く、フリーアルバイターであるが、子どもたちにほえみながら仕事をしている。時間を拘束されるのがイヤだから、正業につくことは考えず、月六万円ぐらいで生活している、と。

相川さんは、仕事の中でやりたいことをやる生き方を選ぼうと新聞記者になって四年目。昨年二月職場結婚し、通称使用。彼は地方勤務のため別居結婚中。女性記者の比率は三％、神戸新聞では現在十二名。そのうち既婚四名、子もちは一名という。

最初、女性だからいつでも辞められると思いついた仕事ができる、と、さらりと言ったことが吉田清彦さんと同姓の高校教師相川さんにひっかかり、そのことで質問や話し合いが続く。主婦論争にも発展。専業主婦の岸本さん、場違いかしらと言いがらも、経済的・精神的に自立をめざして準備中。まずは友達

をたくさんもつこと、情報を得ることとWeの会にも参加しました、と。兵庫の会は教師が多いので、岸本さんの存在は貴重です。

会の後、We100号記念の索引づくりについて話し合いました。大阪の浅井さんからは100号記念Weフレンドシップ・キルト作りが提案されています。

〈西本和代〉  
〈We大阪の会〉

◆五月二十日(日)、千里公民館にて。今回は大阪市外国人教育研究協議会事務局の杉谷依子さんに話していただきました。

私は、市内の小学校に勤めて十五年になりますが、クラスには必ず二、三名の在日韓国・朝鮮人の子供たちがいました。自分の国籍をうちあげることもなく、本名も名乗っていない。それがあたりまえのようになっていくことの不自然さに多くの教師は無関心できました。日々の忙しさに流されているのです。前々回の講師の小柳伸顕さんから『教師は、きちんと在日韓国・朝鮮人問題に取り組んでほしい』と言われた時、一瞬うなづいてしまいました。「今あるすべての外国人問題は、われわれ日本人がきちんと在日韓国・朝鮮人問題に対処してこなかったから起きているのだ」とも言われました。

杉谷さんは、その小柳さんの言葉をうけるように、「共に生きるために今、日本人が何をすべきか」ということを話したい、と始めてくださいました。まずスライドを二十分ほど映され、朝鮮半島の人々の文化・歴史にふれ説明してくださいました。

歴史の受けとめ方の両国の違いを具体的に話されるの聞き、自分たちにできることは何だろうかと考えました。「肩肘張ればしんどい。まず知ることから始めればよい。音楽、料理、小説等、何からでもよい」と、大阪でも在日韓国・朝鮮人の多く住む鶴橋の市場を歩いて、見て、感じてくればよいのではとの提案に、Weの仲間と、そして同じ学校の仲間と行ってみようと思いました。

杉谷さんの話は興味深く、いつのまにか刻の五時になってしまいました。最後に話された「私たちは、しんどい時にも言っていかなばならない。日頃世話になっている人にも、おかしいと思つたら」と……声をあげることの大切さを、経験談をまじえ話される姿に、この人の生き方を見せられたように思いました。次回は兵庫の会と合同で、九月九日(環境(ゴミ処理問題)についてやる予定です。

(北川好美)

〈We東久留米の会〉

◆実は、私はこの読書会に参加しているというより傍聴に行っているようなもので、皆さんのお話を聞くだけで精一杯というところだと思います。そのため、このまま続けていくことに少々心苦しさを覚えていました。

ところが、昨年三月に福島に引越された西内さん、六月号の読者会だよりで「We福島の会」いよいよ活動開始の報告が載っていてうれしくなりました。また、私のような劣等生をも励まして下さる瀬戸井さんの心の広さに感謝して、もう少しがんばってみようと思っておしているとところです。続けていればまた今年引越された大岩さん、山中さんともこのページで再会できるかもしれません。楽しみにしています。

さて、六月二日(土)の例会も出席者は四名と少なかつたものの、新たに田中さんが参加して下さいました。仕事を終えて途中から来られた木村さんのいつもながらのパワフルなお話で、六月号テーマの家庭生活、とくに親子の問題へと話が進みました。頭ではわかっていても、子供を目の前にすると感情的になりとことん追いつめてしまうことがあるのと。私も同様で子供の寝顔を見ては反省して

います。芹沢俊介氏の「子どもが背負う家庭・家族」のイノセンスの解体という概念が興味深いと瀬戸井さんのご指摘。「超エロ的家族において子供は単独者として対等に扱われる」との部分に、私自身子供をあまりにもつき離して見ていたのではと考えさせられました。あるがままの子供を受け入れ、イノセンスの解体、つまり「子供が親から与えられた生、身体、性、家族を自分のものと受けとめなおす」ときに、しっかりと子供と向き合いたいと思いました。

それから、私たちのメンバーの子供の通っている小学校では四年生の時に知能テストが実施されています。この功罪、必要性などよく見つけていきたいと瀬戸井さんより提案がありました。  
(川住広子)

問合先 瀬戸井厚子 0424-72-6206

### 〈We 福島の会〉

◆五月十日、西内みなみさん宅で三名が参加して読書会が行われた。まず、身近な者の死に対する思いが語られた。そして、大人にとっても子供にとっても死が遠いもの、希薄なものになっているのは私たち自身が声に出して子供に伝えていないからではないだろうか、と。

核家族が進んでいる、小学校低学年では出生からの自分史を取り上げられているがそれ以前のことや死については触れられていない、生き物を飼うことさえ難しくなっている、商品化された「生」と「死」の氾濫……様ざまな背景はあるけれども、死んだ者たちから受け継いだ知恵や彼らの生き方、魅力を話し聞かせてこなかったことに気づいた。私たちは彼らの思いも引き受けていかななくてはならないのかも知れない。

ところで、わが家は転勤族である。前住地で下の娘が通っていた幼稚園では障害を持つ子が各クラスに何人かいて、子どもたちは丸ごと相手を認めてかわっていた。飼っていた犬が死んだ時は一人ひとりはその冷たい体をなで、歌を歌ってお別れをしたそうだ。また、上の子は車椅子の友人と同級で多くの経験を見せてもらった。けれど悲しいことに、みんな同じに、違うものは排除へと「世間」は眼をぎらつかせている。「人は人、私は私」と言う上の子は変わり者視されているようだ。相手の人格を尊重してつき合うことができるようになってきたと親バカな私は喜んでいるのだが。

◆六月十四日、We 読者会を開きました。我が

娘はやつとハイハイできたばかりですから、まだ他人事の気がしますが、毎回話題となる福島の学校教育について驚きあきれてしまします。

例えば近所の小学校では職員室に入る際、「失礼します」ではダメで、「〇年〇組〇〇子、〇〇の用件で入ります」と言い、教頭先生の「入ってよし！」の許可で初めて入室できます。また、学校で朝晩運動着に着替えさせる割には、更衣室を持っている小中学校が少ないことなど日ごろ疑問に思っていることが次々と出ました。

読者会も三回め、この辺で何かしたいと思い始めた矢先、耳よりなニュースです。「荒野のバラ」の田中裕一先生が八月に福島に来られるとか。We 読者会で先生をお招きしてイベントをしようという話になりました。

六月号の「家庭生活」特集についてはWeの中身からずいぶんわき道にそれました。ついで我が家の家庭生活報告になってしまったのです。福島では、昔ながらに祖父母と同居している家庭が多く、子供の家庭環境は安定しているように見えます。前述の教頭先生は、離婚や単身赴任を「欠陥家庭」と表現したほどです。  
(神戸優香里)

◆七月六日、(金)、瀬戸井さんのお宅に泊めてもらって東久留米の会に参加した時、福島丸刈り・体罰・金権体質に「エーッ、ウッッー信じられない！」と言われ、その世界に私は今暮らしているのだなあと改めて思いました。かの地から引越して一年半、「慣れたでしょ？」と問われるたびに「ええ」と答えながらも(慣れたくないなあ)とつぶやいている私。

持ち前の好奇心をフルに發揮して、保育園、PTA、婦人問題懇談会、卵の会(有機農法研究会)、親子劇場等々、様々な場所に顔を出してはみたものの、女が集まる場所には女しか来ない、そして、「講師」という職場には男だらけという住み分けが、ごとになされている土地柄に啞然としています。

七月十日(火)、飯岡宅で持たれた福島の会でも七月号を手にながら、ゴミ問題、ゴルフ場問題等が東久留米の会では話題になったことをつげると、「福島では原発に始まって原発に終わるという感じだよね」とことの深刻さに重苦しくなりました。

先日、消費者団体懇談会の主催する「福島のゴミ問題を考える」という集いに参加してきましたが、牛乳パックをどう集めるかとい

う相談や最後には一人一人の心がけが問題で学校教育でも指導してほしいという話になっていきました。「なんか変だなあ」と思って「パックに入った牛乳は買わないほうがいいと思うし、私たちが欲しいのは安全な中身であって危険な入れ物や過剰包装は要らないと言っていく運動が必要じゃないか」と発言したものの、よそ者がわけの分からないことを言っているといういつもの固い雰囲気には押しただけでした。(うんざり：)

何から始めたらいいのやら気の遠くなりそうなくらい問題が山積みです。とりあえずは八月に田中裕一さんをお迎えして、「環境問題を授業する」をさせていただき、これを機会に子どもの人権と親の教育権の問題についていねいに考えていきたいと思っています。

ここでは、何かが起こってもそれが表面化する事が本当に少ないのです。気がついた者が、自分の生き方をかけて問題提起していく以外に状況を変えていく手立ては無さそうです。福島の会がその基盤になりつつあるように思い、また、そうりたいと願っています。(西内みなみ 0245-46-7516)

◆六月二十二日に高橋弘子氏(シユタイナー)

〈We市川の会〉

研究所)を迎えて幼児教育についての講演会を行いました。ちょっとした思いつきで講演会をやるうとしたのですが、賛同者がいて協力する人があらわれ、カンパが集まり、バザーに参加して資金をかせぎ……二か月あまりの間に実現してしまいました。大人だけで五十六名の参加者があり、子づれの講演会と銘うったので子供は二十名以上。びっくりするぐらいの人数でした。

七歳までの人間教育と題して、テレビやファミコンによるゆがみの指摘や、土台づくりとしての幼児期間の大切さを説くお話でした。マイクが途中で使えなくてききとりにくかったり、準備不足でもたついたりと順調な進行ではない点反省は多いのですが、とにかくにも無事終了することができてホッとしています。なによりも市川の会の人たちの協力には感謝しています。早速のカンパや後援を得るために時間をさいて下さったり、仕事を休んで会場で本を展示してくれたりなど、Weっていいなと改めて思いました。本も売れ、Weの宣伝にもなったと思いますが、少しは広げられたでしょうか。これからも機会があったらやってみたいと考えています。

(横山れいこ)

# 十字路



〈神奈川県〉人間味と自由の  
学舎にーのむぎOCS高等  
部(朝日7/14)

これまでの学校の枠にと  
られない、人間味あふれ  
る自由な学習を目指そうと  
いうユニークな「学校」が  
川崎市麻生区に開設され  
る。「学校」という建物だ  
けでなく、生活空間のすべ

てが子供たちの学ぶ場」との考えから、キャ  
ンプや運動会、農作業体験など地域活動への  
参加が、そのまま「卒業単位」になる。

カリキュラムの中にはアメリカへの留学も  
組まれており、日本での大学受験資格の取得  
が可能だという。高校中退者ら中学卒業以上  
を対象に、来年四月、正式に発足する予定。

(渋谷裕子)  
〈埼玉〉丸木美術館でも平和の祈り「発信」  
(毎日8/7)

広島に原爆が投下されて四十五年目の夏を  
迎えた六日、原爆をテーマにした「原爆の凶」  
の絵などで知られる「丸木美術館」(東松山市  
下唐子)で恒例の「8・6ひろしま原爆忌」  
が行われた。この日は先月十九日に設置され

た太陽光を利用した発電装置の点灯式も同時  
に行われ、同美術館らは「原爆も原発も爆発  
すれば被害は同じ。核の時代の幕引きを始め  
ましょう。核をなくすために今、私たちは何  
ができるか共に考えましょう」と訴えた。

(脇 美智子)

〈愛知〉飛ばす風船網かけ回収ー「海・山汚  
すな」市民申し入れ(朝日7/25)

豊田市で二十七日から開催される「豊田お  
いでんまつり」のオープニング行事で、二万  
個の風船を飛ばして祭りを盛り上げる予定が  
急に変更された。五日、「自然保護団体で活動  
している市民」と語る匿名の男性から市役所  
に電話があり、「風船を飛ばすと、海、山が汚  
れ、環境破壊につながる。『花博』でもやめた」  
と中止を求めた。続いて豊田市自然愛護協会  
(白鳳公明会長)からも申し入れがあり、市は  
急ぎよ検討した。地上に戻された風船はつぶ  
されて焼却されるという。

(山本直子)

〈長野〉朝鮮人への謝罪の歌大本営跡に響い  
た(朝日8/16)

上田市に生まれ、東京に住むフォーク歌手  
黒坂正文さん(41)が終戦記念日の十五日、  
長野市松代町の松代大本営跡の象山地下壕内  
で、強制連行された朝鮮人への償いの気持ち

を込めたミニコンサートを開いた。アニメ映  
画「キムの十字架」に寄せて作ったという  
「アポロジーズ(謝罪)」を中心に平和の願い  
を込めた歌。集まった人々の歌声が、過酷な  
工事をしのばせる壕の岩肌にしみ込んだ。

(宮崎春美)

〈京都〉復刻版「ベトナム通信」を刊行ー京  
都ベ平連の反戦機関誌(毎日8/2)

ベトナム戦争当時、幅広い反戦運動を展開  
した京都ベ平連が一九六七―七四に発行した  
機関誌「ベトナム通信」の復刻版が、戦争終  
結から十五年を経て刊行された。運動の中心  
的メンバーだった京大名誉教授、飯沼二郎さ  
んが左京区に保存していた資料をそのまま  
収録、当時の雰囲気や「寄せ集め」の運動が  
少しずつ広がっていく様子を伝える興味深い  
一冊で、機関誌復刻は東京に次いで二番目。  
飯沼さんは「京都の市民運動の『原点』の記  
録として、大きな意義がある」と語ってい  
る。復刻版はB5判、七百三十ページ。定価  
一万二千元。限定五百部、問い合わせは不二  
出版(東京都文京区 03-812-4333)  
(塚崎美和子)

〈岡山〉放射性廃棄物持ち込み拒否・県条例  
制定署名終る(山陽8/16)

高レベル放射性廃棄物の県内持ち込みを拒否する県条例の制定運動と取り組んでいる住民グループ「放射能のゴミはいらない」県条例を求める会」は、直接請求へ向けた署名集めの期限となる十五日、岡山市のJR岡山駅前などで最後の街頭行動し、二カ月間におたる署名活動を終えた。同会の推計では、回収済みの署名簿だけでも約二十万人の署名が集まっており、直接請求に必要な法定数である県内有権者の五十分の一(約二万八千五百人)を大きく上回っている、という。(丹原恒則)〈福岡〉熱意が過剰か―砂埋めの体罰議論続出(西日本7/14)

福岡市西区拾六町の市立老岐中学校(大穂猛校長)の教師七人が、恐喝事件を起こした男子生徒二人を、同区大原海岸に首まで埋めるなどした体罰事件は十三日、福岡西署が教師や生徒から事情聴取を進める中、男子卒業生グループが同中に押し掛けるなど、事件の余震が続いた。一方、教師がとった行動に対しても父母や識者らの間で「行き過ぎで教育効果は疑問」「いや、熱意から出た体当たり教育」など賛否両論が噴出、義務教育での体罰の是非をめぐる苦悩、模索する教育現場を浮き彫りにした。(安部宣人)

〈沖繩〉再び「人の輪」で基地包囲―県内外から二万六千人(沖繩タイムス8/6)

「8・5カテナ基地包囲大行動」(主催・県中央行動委員会)は五日午後一時から実施された。一九八七年六月以来二度目の取り組みとなったこの日は、前回のどしやぶりと異なり、朝から比較的穏やかな天気。組合員とその家族、本土代表約七百人、それに宮古・八重山など先島からの参加者も早い時間から続々、基地周辺に集合、家族連れの姿が目立っていた。午後一時。本部から一回目の包囲を呼び掛ける「基地に向かって、手をつないで整列して下さい」とのコールが響く。基地に向かって五分間、大人と子どもが手を握り合い、極東最大の米軍基地・嘉手納基地を取り囲んだ。また、通行中のドライバたちも、クラクションを鳴らし連帯の合図を送った。「一回目から完全に包囲しました」との報告に、各ポイントから大きな歓声が上がった。三回の「完全包囲」終了後、参加者らは、レッド、グリーン、イエローの三色のネツカチーフを基地のフェンスにくくりつけ、約二万個の風船、約五百羽のハトを飛ばし、反戦平和への意思表示をした。(大嶺麗子)

## 編集室からあなたに

◆Weは次号で100号になります。ここまでは見守り育てて下さった読者の皆様に、ありがとうを申し上げます。100号記念号は増頁して皆様のご期待に応えたいと思います。関西のWeの会の方たちが、索引を作って下さっています。100冊びつとそろえたいという方、また途中から読者になった方で、以前の興味ある号を読みたいという方など、索引をご利用の上注文して下さい。100冊すべてそろっているセットは、保存版も含めて5セットしかありませんが、例月号のみなら8セットあります。公の機関その他で、そろえたい方がありましたら、お申し出て下さい。実費、送料当方負担。

◆フォオラムの忘れもの―子ども用デジタル腕時計、お針セット袋、つげくしが届いています。お心あたりの方はウイ書房に連絡を。

◆8・9月号の「私の朝鮮史」に誤りがありました。訂正し、お詫びします。(金玉均のルビ、チュン↓キョン下段12行目、論吉に↓は)

## ★新任教師，研修完全実施

文部省は15日，新採用教師に対し1年間にわたり計画的な研修を行う初任者研修制度を，来年度から国公立高校と，私立の小中，高校で本格実施する方針を決めた。

私立校は「導入することが望ましい」との努力規定，このため同省は，(財)日本私学教育研究所に委託して私立の特色を生かした研修方法，研修期間などの研究を進め慎重に検討してきたが，私立学校側からの要請も強いことから，同研究所に初任者研修制度実施機関を設置，来年度からの本格実施に踏み切った。(8.16日付 読売)

## ★様が変わり家庭科教科書

来春から使われる高校の教科書の検定が終わったが，「家庭一般」の教科書も時代に合わせ様変わりしている。最も顕著だったのは，家庭での男性の役割を強調していること。従来，保育や家族関係では，女性の役割ばかりが強調されていたのに対し，家庭内の保育は男女両性によって行われるべきだと書かれている。また消費者問題，高齢者問題などに以前よりページを割くものが多く見られる。(7.6日付 読売)

## ★昇格で女性差別は違法(東京地裁判決)

政府関係特殊法人「社会保険診療報酬支払基金」の女性職員18人が，「男子職員だけ一定の勤続年数に応じて昇格，昇給させ女性を除外したのは差別」と同基金を相手に，男性との賃金差額など計約1億円の支払い，男性並みに昇格したことの確認を求めた訴訟の判決が4日言い渡された。

相良朋紀裁判長は「昇格について，合理的理由がなく男女を差別した取り扱いが不法行為。基金は女性職員の損害を賠償する責任がある」と，約9,600万円の支払いを命じた。

労働条件に関する男女差別では，賃金や定年についての差別を違法とする裁判所の判断は多くあるが，昇格についても不法とされたのは異例。(7.5日付 読売)

## ★婦人局長ポストに男性はダメ?

労働省婦人局長のポストに初めて男性の就任が内定したことに，野党の衆参両院の女性議員40人全員が「女性軽視」と一斉に反発，4日，連名で海部首相，塚原俊平労働相らにあてた抗議の「要望書」を突きつけた。この抗議について，坂本官房長官は5日，記者会見で「このポストは女性でなければとか，男性でなければとかいう考え方は狭すぎる。余りとらわれて結果的に女性の雇用機会がせばまっても困る」と述べ，婦人局長を女性に限定することはかえって女性の登用につながらない，との考えを示した。(7.6日付 朝日)

## ★差別の慣習，今も

「女人禁制」や「足入れ婚」などの封建的な女性差別が今も残っていることが，新日本婦人の会の全国調査でわかった。「女は不浄だから」と立ち入りを禁止するものが23府県，41例，「足入れ婚」は東北，四国地方などから15例の報告があった。(7.24日付 東京)

## ★子どもの体，最近おかしいよ

子どもの体の具合がおかしいと感じる学校，幼稚園の教諭などが十数年前に比べ飛躍的に増えていることが，日本体育大学の調査でわかった。「アレルギーが増えた」「すぐに『疲れた』という子どもが増えた」の声が多かったが，以前はほとんど見られなかった「低体温の子が増えた」という回答が目立った。子どもの平熱は36度台が普通とされてきたのに35度台が急に増えているという。(7.6日付 朝日)

## ★夫婦別姓——法制審も前向き検討

女性の地位向上を目指す海部首相の私的諮問機関の「婦人問題企画推進有識者会議」(座長高橋展子氏)は，夫婦別姓制度の導入について本格的な検討に入った。各委員からは積極推進の意見や，「子供の姓」の問題も出され関心の高さをうかがわせた。(8.1日付 読売)



# ア・ン・テ・ナ

## ★子どもの影、ますます薄く

子どもを持つ家庭がこの10年近くに100万世帯以上も減った一方で、お年寄りが生計を維持している高齢者世帯は全世帯の10%を初めて上回ったことが、厚生省が10日発表した'89年の「国民生活基本調査」で明らかになった。寝たきり状態のお年寄りや、独り暮らしの数も、さらに増えていることが裏付けられ、日本が子どもの影の薄い高齢者中心の社会に変わろうとしていることが浮かび上がった。

厚生省は10日、出生率を回復するため、総合的な政策を検討する組織を省内に発足させる。当面、①現在第2子から支給している児童手当を第1子から支給し額も充実させる ②子育てをしている家庭への税利優遇措置を大蔵省に求める——などの方向で検討を進め、できるものから来年度予算案に盛り込んでいく方針だ。(8.11日付 朝日)

## ★女子高生を校門で圧殺

神戸市西区美賀多台、兵庫県立神戸高塚高校で6日、同校1年石田僚子さんが「遅刻指導」中の教諭の閉めたレール式鉄製門扉にはさまれ、頭ガイ骨折などで死亡する事件がおきた。「あと10秒」などとカウントしながら秒読みし、「ゼロ」と同時に勢よく門扉を押して死亡させたこの事件は、管理教育やきびしい校則の見なおしが叫ばれはじめた中で、教育現場の実態をさらすことになった。(7.7日付 各紙)

## ★行きすぎた校則——日教組が見直し運動

日教組(大場昭寿委員長)は、兵庫県での女子高生圧死事件をきっかけに、学校の校則や生活指導の見直し運動を9月から全国で実施することを決めた。とくに遅刻に対する罰則や身だしなみの規則などに行き過ぎがないかを調べ、学校ごとの職員会議、都道府県教育委員会との話し合いなどを通じて改善をめざす。日教組が本格的な校則などの見直しに取り組むのは初めてだが、もともと教師は校則、生活指導の方針を生

徒に守らせようとしてきた立場にあり、校則などの改廃に取り組むためには、教師自らの反省とともに、教師への不信感をぬぐう必要があるとみて、生徒会やPTAを通じて生徒や親の意見を聞くことに重点を置く。(8.5日付 朝日)

## ★「不登校」急増続く

学校基本調査によると「不登校」の小・中学生が、史上最多の47,258人(小学生7,178人、中学生40,080人)にのぼり、小・中学生総数はどうにピークを過ぎているのに、学校に行かない、行けない子供の数は年々記録を塗りかえ、2年続けて対前年度比11.5%と、急増ぶりとはどまるどころを知らない。

不登校が決して特殊な現象ではなくなった中、文部省も、いきなり学校に引き戻そうとしても無理と、教育委員会が設ける「学校に行けない子のための教室」の設置を今年度からあと押しするまでにはなった。しかし'80年代、教師用の指導手引書を作ったり、生徒指導に悩む中学校に教員を手厚く配置するなど、たて続けに対策を打ち出してきたにもかかわらず、大きな効果はあらわれていない。(8.4日付 朝日)

## ★女子大生100万人突破

女性の社会進出と進学熱の高まりを背景に、大学・短大へ進学する女子が今春初めて男子を上回り、在籍中の女子大生も100万人を突破したことが3日、文部省の学校基本調査で明らかになった。専攻も、以前は文学や家政が多かったのが、最近は社会進出を背景に、まんべんなく専攻するものが多くなり、共学志向も強まっているという。

その一方、大卒OLの半数以上は、5年以内で最初に就職した企業を辞めているという別の調査(民間の労働調査機関「労務行政研究所」)もあり、相変わらず結婚や出産が女子の就業継続の“壁”になっていることをうかがわせている。(8.4日付 読売)

## ●編集後記

◆夏のフォーラムから帰ると  
「今年の夏は終わった」の感。  
十月号の仕事が山と積まれて  
気分は否応なく秋へ……と。  
フォーラムには全国から二

百五十名が参加。初めての方、  
常連の方との様々の出会いを  
楽しみ、We に対するご意見、  
ご要望もたくさん聞きました。  
この二泊三日の凝縮された時  
を、これからゆっくり味わい  
つつ、冬増刊号にまとめる作  
業に入ります。(青木)

◆小誌も次号で100号。夏季フ  
ォーラムで関西のWeの会の方  
たちから、100号記念の集まり  
を各地で持ちませんか」との  
呼びかけが。関西では、Weの  
バックナンバーの索引作りが  
着々と進行中とのことです。  
◆昨年まで、素敵な詩を連載  
して下さっていた羽生楨子さ

んの新しい詩集「花・野菜詩  
集」が出版された。表紙の深い  
紅は秋の色。思わず惹き込ま  
れる世界です。(稲色)

◆東京に住んでこのかた私に  
は地域に暮らしているという  
実感が無い。子どものため  
は望ましい環境ではないと思  
いつつも、あえて踏み出すに  
もまた不自然なものを感じて  
しまう。私が育った所では、  
住民が共同で何かをしなけれ  
ば生活が成り立たないという  
必然性があった。地域や共同  
体から離れて、人々はますま  
す孤立化していく。それはわ  
かってはいるのだが。(河村)

♥まだまだ日差しが強く、せ  
みも最後の抵抗のように大き  
な声で鳴いていますが、Weで  
はひと足先に秋の色になりま

した。

私の住んでいる所は団地で  
す。地域での活動はなかなか  
活発です。引越当初は煩わ  
しく思った時もありましたが、  
何ごとも積極的に参加するこ  
とが、楽しく生活して行く秘  
訣(ちよつとオーバーかな)だ  
と思っっています。(渡辺)

★私の利用する私鉄では、夏  
休み、同じノートを持った小  
学生が駅のスタンプ台に群が  
ります。バード・押ツシングと  
称し、全線68駅回って高尾山  
の夏鳥スタンプを集める「ベ  
ツタンボン」。自分で見つけた  
鳥の名を調べるほうがずっと  
楽しいのに。地域のよみがえ  
りも住民の愛着が出発点。イ  
ベント開催で地元に着る金  
を期待することではないのに  
★100号を記念し次号は増頁、  
テーマは「高齢化社会がやっ  
てくる」です。(半田)

Weバックナンバー (在庫があります。ご注文は、最寄りの書店「地方小扱い」  
または、料金をおそえの上、振替で直接ワイ書房へ)

- 83/2.3 住むということ (¥500)
- 85/11 みのりの秋に (¥530)
- 85/12 人間と土を生かす (¥530)
- 86/1 ぐらしの文化を探る (¥530)
- 86/2.3 水はいのちの泉 (¥530)
- 87/1 ぐらしの論理を創る (¥530)
- 87/2.3 明日一人はみな、成熟に向かって (¥530)
- 87/8.9 「原発」知らなくていいのか (¥530)

- 87/12 国際居住年って何だった (¥530)
- 88/10 食と環境といのち (¥530)
- 88/11 いのちを医療に任せていいのか (¥550)
- 89/8.9 地球市民として生きる (¥567)
- 89/10 食べものから地球を見る (¥567)
- 89/11 からだーその不思議 (¥567)
- 89/冬増刊号 ゆたかさを紡ぐⅢ  
—自然との共生を求めて— (¥721)

### 新しい家庭科

Vol.9 No.7 1990年9月20日発行  
定価567円(本体550円+税17円)送料共  
年間購読料・定価7107円(本体6900円+税207円)  
編集兼発行人/半田たつ子

### 発行所/(有)ワイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14  
☎・FAX03(326)1380 郵便振替 東京6-59867  
第一勧業銀行 調布仙川支店 普預1075292  
印刷所/(有)岩佐印刷所 〒112文京区春日1-6-7

●羽生槇子

# 花・野菜詩集

ができました

A5変型判／106ページ・装幀・装画 井上公三 ・定価1648円・〒260円

詩人は、あなたをどこにいざなうのでしょうか？  
羽生槇子のこういう世界、あなたは忘れていませんか？

## 月と大根

冬の終わりに干し大根をつくる

短冊に切ってひろげて干して

夜もそのまま干してみる

夜中に気がかりになって雨戸をあけると

月が照って

白い大根が静かに黄ばむところ

月と大根の愛

そう感じる、あらかい光の照り返した

## 春風

塵のきらが散りはじめて

「あたしたち蝶になったつもりで行こうね」

仲良しの二枚の花びらがそう言い合って

しっかりと手をつなぎ合って散っていく 散っていく

〈詩集〉木、鳥、娘たちとわたし 羽生槇子 1030円 〒260円

自然と人間の営みをこよなく愛す詩人が、しなやかにうたい上げた作品集、まごうことないオアシス……

〈詩集〉絵Ⅲ 羽生槇子 1030円 〒260円

絵を見て詩を書く楽しさ、ピカソ、レンブラント、ルノワール、ミレー浮世絵から…向井潤吉、荻須高德、猪熊弦一郎…絵の世界にひびきあう。

〈詩集〉夢運び屋 羽生槇子 1545円 〒260円

大きい水玉、小さい水玉、転がりながら、鈴を振るような言葉で、詩人のかぐわしい夢を伝えていく……

プレゼントにも最適！

好評既刊

ご注文は最寄りの書店に。(地方小出版流通センター扱)

ウイ書房に直接お申し込みの場合、単行本は、送料をお添えの上、振替で。(書名明記)

**ウイ書房** 〒182 調布市西つつじヶ丘2-25-14 ☎03・326・1380(振替・東京6-59867)